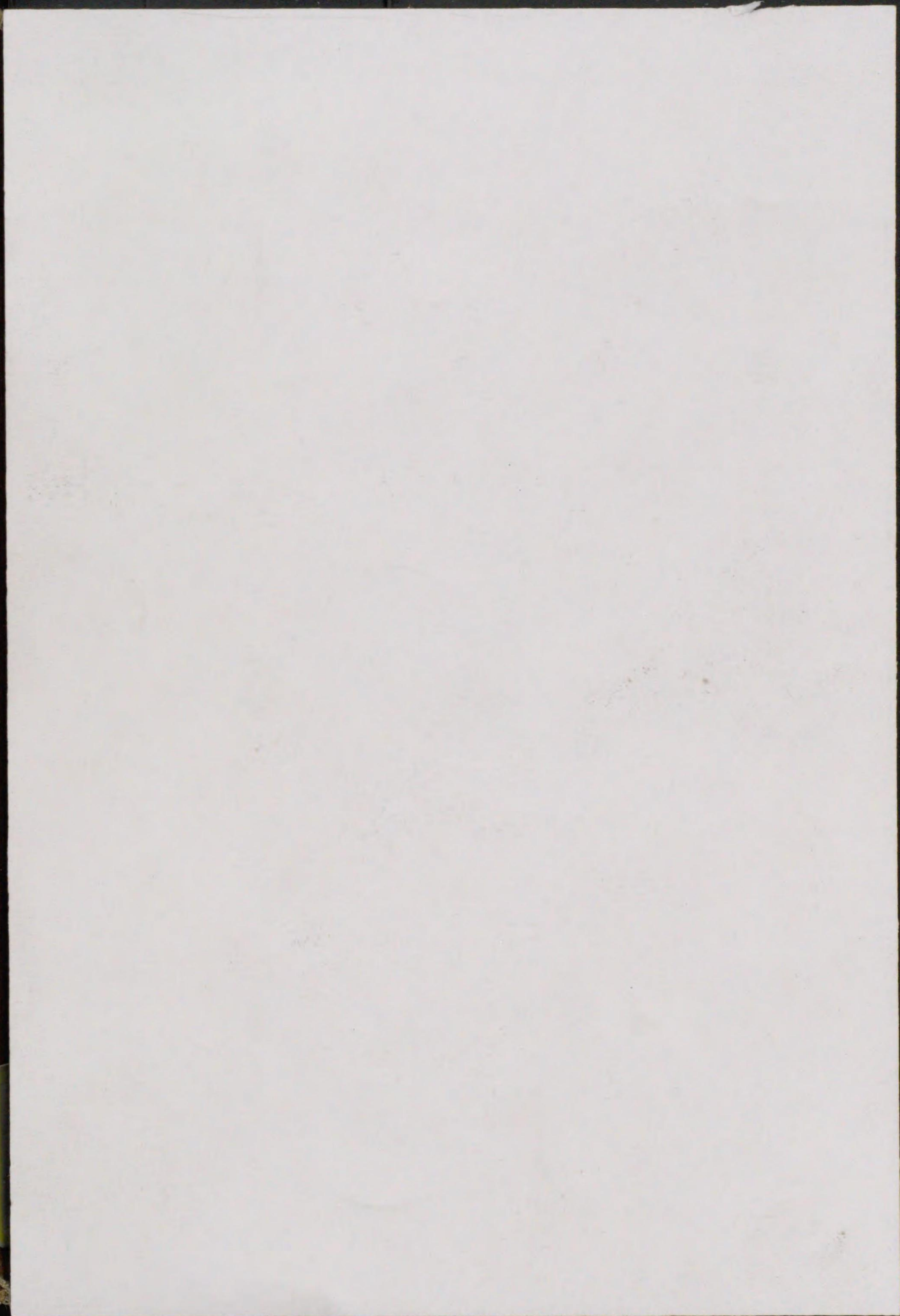


619-263
1200501537388
203

ま
ち
く
満洲國



281

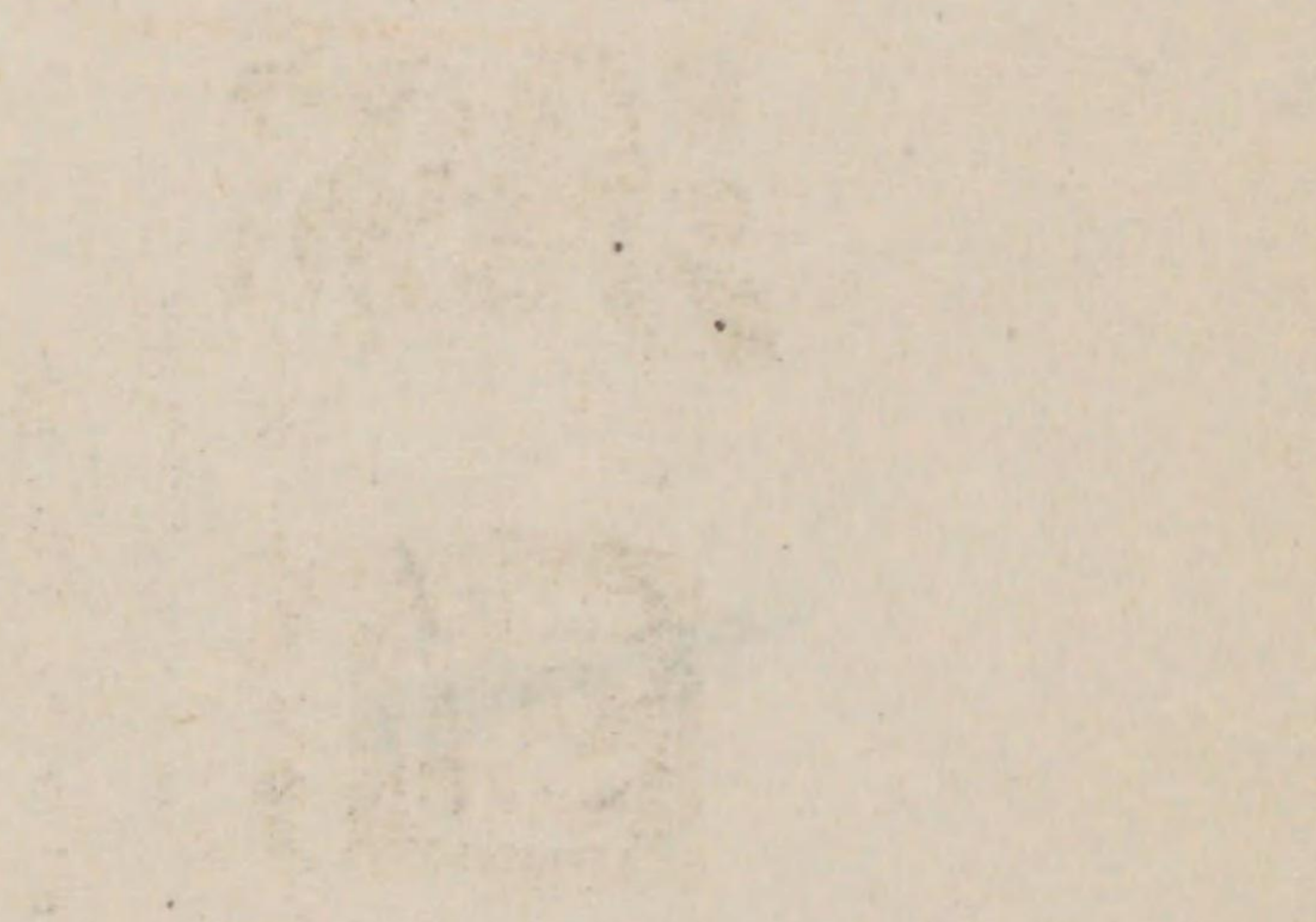




三笠

書房

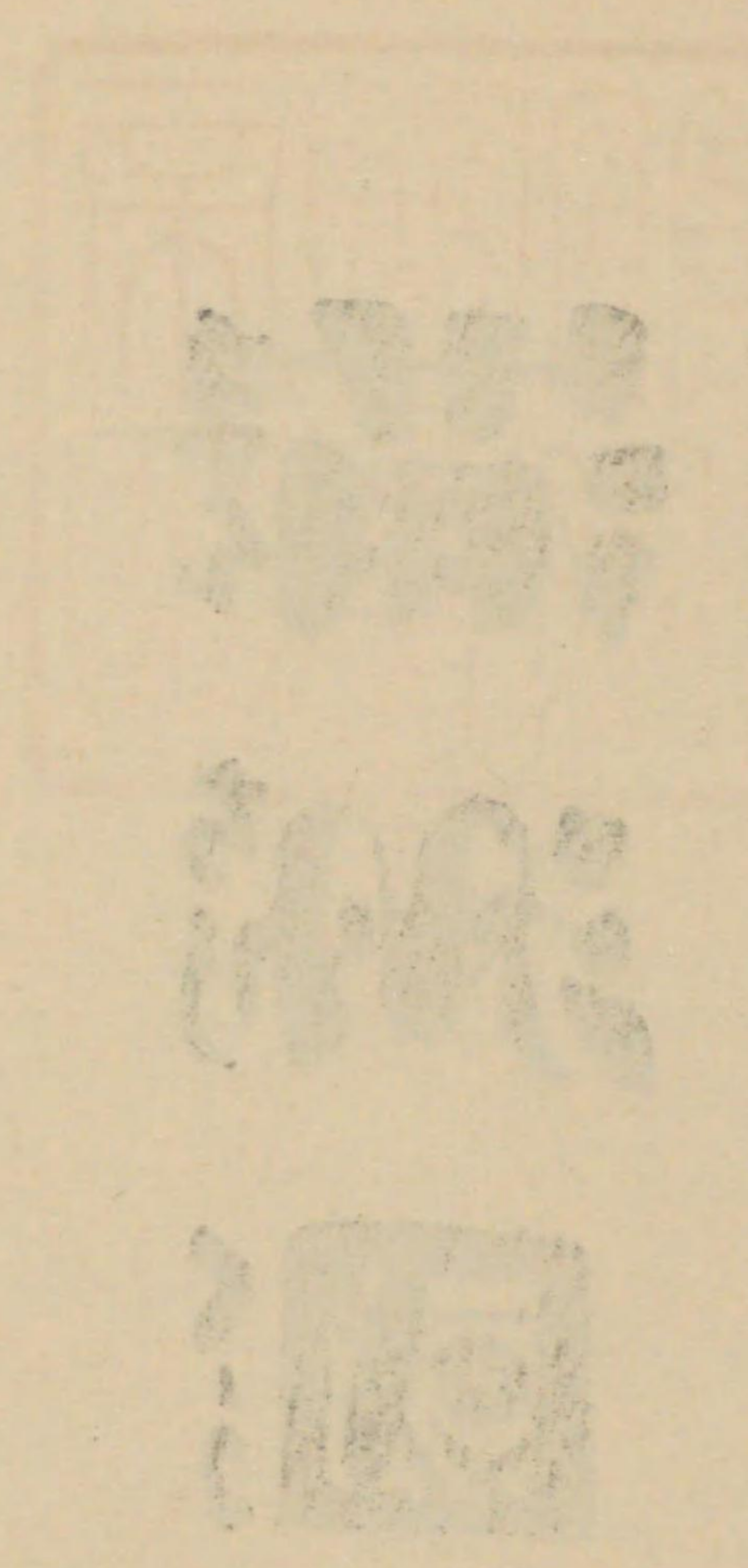
長谷川春子著
三笠書房刊



Faint vertical text impression on the right page.

619-263

滿洲國
目次



三
三
三
三



滿洲國現在

匪賊縱斷(吉林省) 三
 敦北城(吉林省) 三
 沙漠漠然(内蒙古) 五
 白音太來(内蒙古) 八
 呼海國威揚ル(黑龍江省) 四
 新都街の風(中央幹流) 三
 東支線哈爾賓 三
 關東州急過 三

風物・點描

「これでも春の海」 四
 「何をか言はんや」 四
 東京人の新大阪見物 五
 食べるは樂し 六
 體は國の手形也 六
 鏡が少なすぎる 六
 「女性畫家から現畫壇へ」といふ課題 七
 春興饒舌錄 八

二八荒れ月	一八八
家傳藥	一八六
秋影舗道ニ來ル	一〇三
秋菜維菜の味	一〇八
東京の一片	一二四

ひとり旅三年

サボワの山街	一二五
ひとり旅三年	一二六
美人のお城	一七四
漫趣三つ	一八二

巴里畫商風景	一八八
氷河特急	一九五
サボワ閑日帖	二〇一
至藝女人	二二四
イギリス船中	二三三
寒中のシベリヤ	二三五

滿洲國現在

裝幀・插畫

著者



匪賊縦斷(吉林省)



敦化の着陸場の土が乾かないので奥地の軍人は八月の異動がまだ動けずにゐるし、満鐵の工務段は月給の紙幣が目方五十貫目溜つてしまった。ましてや我々普通の飛行客はそれから何十人目かに乗れる番になるのだが、しかしそれを待つ人で吉林城内は満員だ。鐵道線路の安否は軍部以外にはさらにわからない。豫想はまちまち、不通は先日以來。

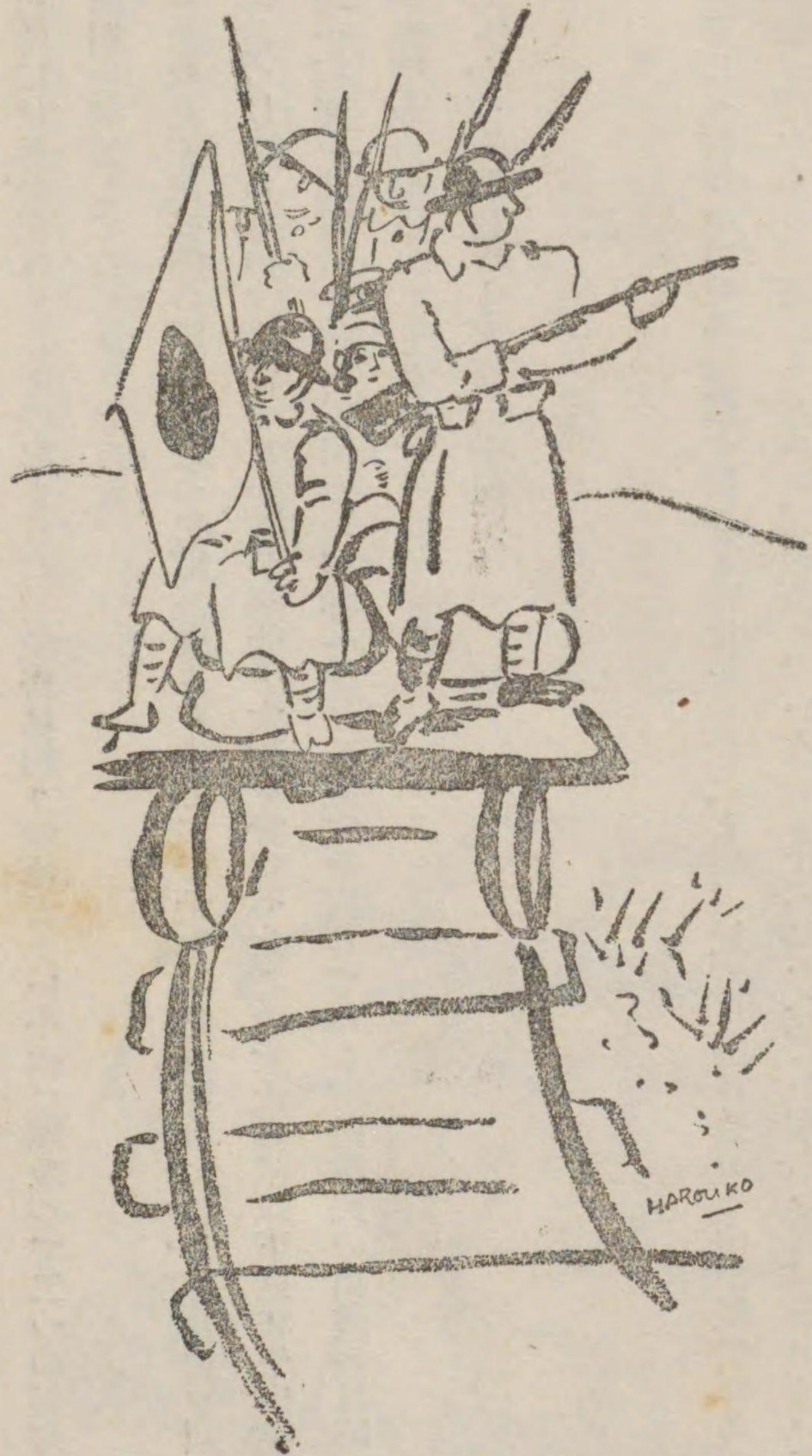
「勝手に行くのならどうも仕方がないが、保証や責任は持たれない。装甲列車の行くところま
では乗せてあげよう。」

立ち話の忙しい師團參謀殿の言葉である。ではひとつ力も武器もない體だからせめて機智と
理智とを相當應用して危険なところも安全に通り返けて見ようではないかと祕かに同志一人を
語らつた。

明くれば未明の装甲列車は外側は御なじみの如くキュビズムのピラのやうな色彩だが内部は
鐵道聯隊の世帯で兵隊さんがまだ寝てゐる。浴衣がある、今朝の給與の新しい油揚の黄色、張
りつけた美人畫、ゆうべの話等々大分なごやかだ。さて上部には砲が据わり雨の歩哨が立つて
ゐる。引ばつて行く無蓋貨車には苦力氏百數十名起立滿載。

昨日の夕方には吉林の材木屋の河岸から繪畫的に稻妻の光つてゐた連山、近づけばなるほど
匪氏山居の好適地だ。さて我等の装甲列車ははかなくも山に入ったかと思ふと直ぐに運行不可
能、橋が焼け落ちてもう行き止まりになつた。

それからお味噌と米と何人かの兵隊さんと一緒に進むのだ。紅密蜂こうみつばちといふ空驛へ着くと今ま
で見た簡単な防備とは異なり壕は十分に掘り下げられ土嚢は要塞の如く高く鐵條網に三重に張



り廻らされ歩哨の顔は緊張して睨めてゐる。をとつひの夜、橋を落して電話を切り、連絡のな
くなつたこの町の若い小隊長と十二人の初年兵を五百の兵匪が襲つて來たが、二つの機關銃と
一個の迫撃砲と半年訓練の若い人達は四十人殺して追つ拂つた、いゝ按配に彈丸がなくなりか

けた時には夜が明けてしまつたさうだ。敵將は向うのほどよい小山に陣取つて二つの提灯で進退駈引を指揮してゐたさうである。

驛を取巻く鐵條網の端には太つた驛長夫人——とても大きな完全形のために、形がたの鬘かみを頭の頂邊に戴つてゐるので女性とわかるが煙管と大袋を背負つたこの女大黒様以下近在や山奥の避難民が布團や洗面器を抱へて何とか吉林へ行ける便宜を探してゐる。避難民の出没の日は即ち匪賊襲來の豫報にひとしい。

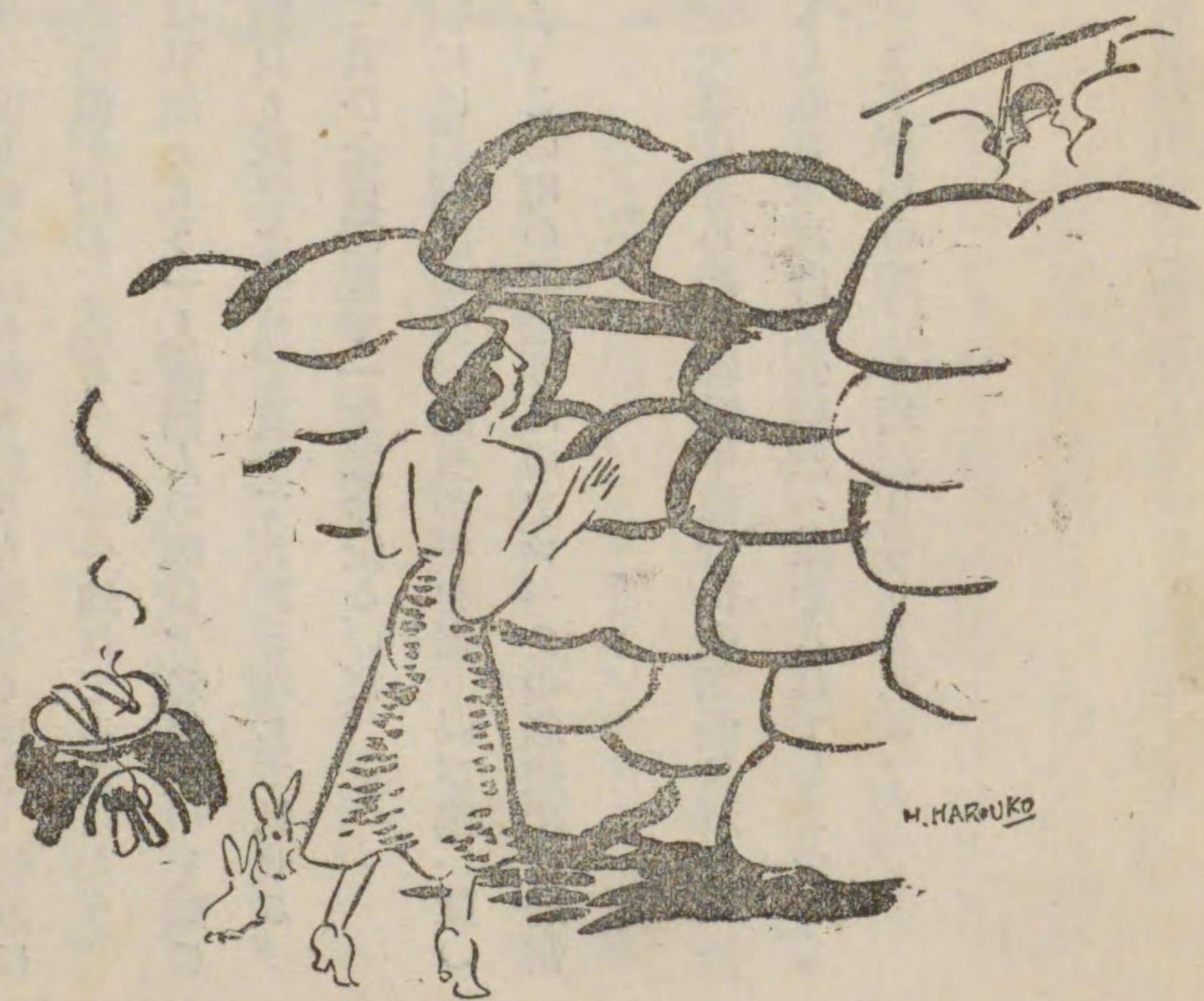
こゝから至いたる敦化はまた百二十何哩。

二

隊そなへ付けの匪賊分布圖を見ると吉林から敦化まで、近くに逃げ込める山が豊富にあり、落す橋は澤山あり、長いトンネル、天然林、いろ／＼仕事は十分だから赤い圓印の中にはく紅槍會何千、大刀會何百、反吉林軍幾何、何匪彼匪と無數に赤い匪印がつけられてある。それさへなければ吉林省の初秋は空氣はさわやかで、至るところ美しい秋草が咲き亂れた丘、山谷、川、森に林、塵泥の國とも形容したい滿洲の他の部分に比べて日本人にも千里ノスケルヂヤの郷想ノスケルヂヤを起

させないのがこの邊の風趣なのだけれども、よき秋は即ち匪賊季節であつて、千年も前から「塞虜秋に乗じて下り天兵出征」ときまつてゐるのだ。

さて装甲列車と別れて以來、三つ目の焼け落ちた橋を越える時分には、只一と筋の線路の先に七八里離れて我々を待つて呉れる數人の守備兵が最も身近い味方のわけなのだ。現在の私達には積みかへ背負ひかへ持つて來た大事な大事な兵糧を乗せた二臺のトロツコが今や金城鐵壁なのだ。前面には機關銃を据ゑ左右前後は實彈の銃をかまへて一同立ち廻り何所の丘、どこの草叢から敵が出て直ぐに應射できる身構へだ。そして更る更るに十何



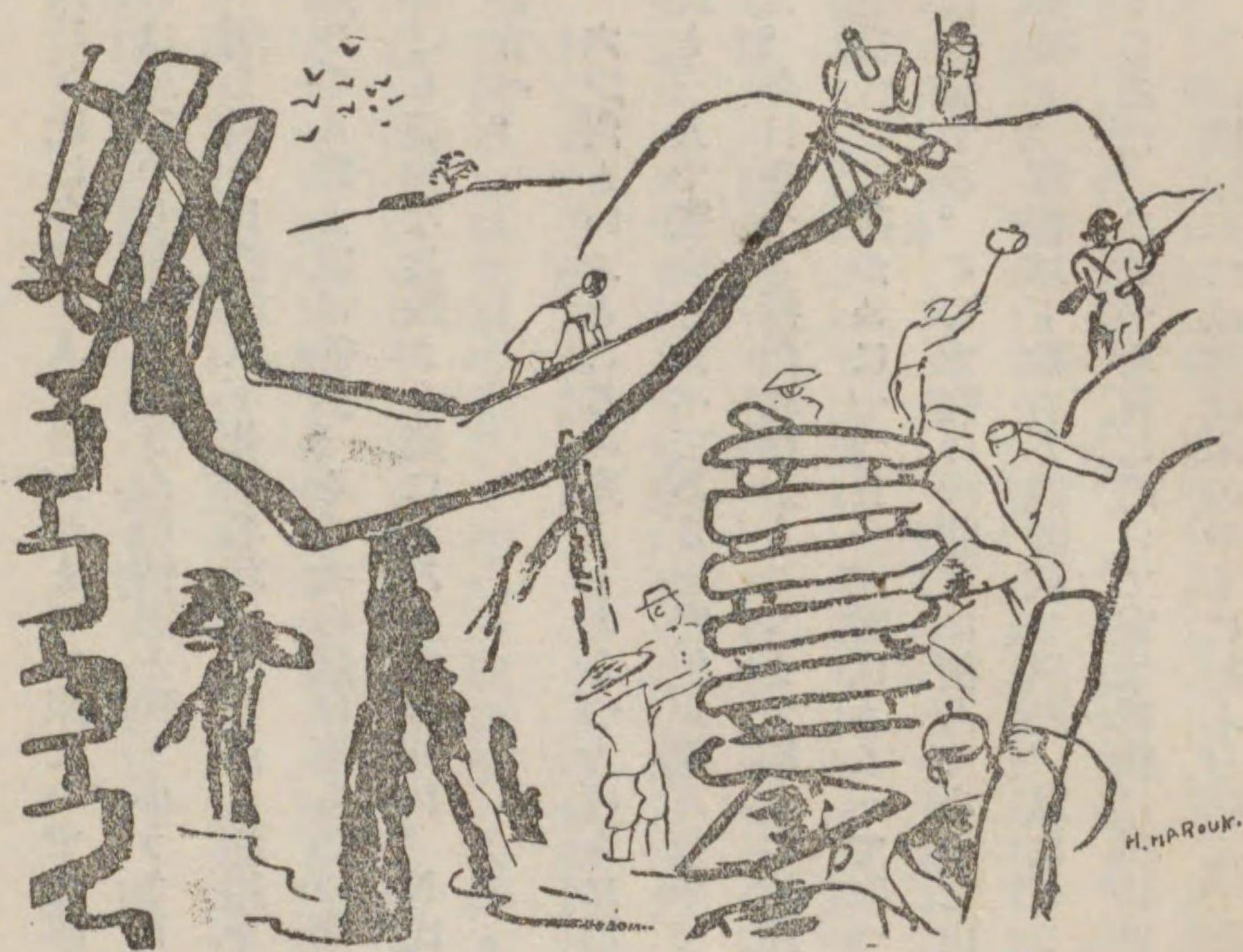
哩の上り坂を押し登るのだ。狙撃によさうな曲り角や丘も林も殊さら氣をくばる、先方には我々の數も兵糧を受取りに行つたことも始終密偵を出してゐるから多分知れてゐるだらう。此方の現勢力は兵は軍曹以下八九人、非武装は私達ともう一人滿洲人の驛員、私は鐵甲を頭に載せて米の袋の影へうづくまり、殘餘は非戦闘員も武装を分けて貰つて人數を増して見せる。時々大雨が來る、先づ武器を被ひ私がかぶせて貰ひ全員濡鼠で一生懸命走るのだ。

虎の出る岩山の頂が段々はつきりして來て橋には滿洲國の公安隊員が手を振り叫び黒い豚の數が點點とし出して漸くに到着。今夜はとう／＼この町の兵隊さんのアンペラの急造床に居候をさして貰ふことになつてしまつた。

その晩は一同楽しく汁粉の積りで赤砂糖湯を大事に嘗め高田聯隊甲種合格の立派な若い體格から出る見事な越後おけさの競唱合唱。然しもし五百米以内鐵條網内へ敵を入れてしまつたら萬事休すだから二人の歩哨は雨の夜中を風のそよぎ野馬の蹄にも劍がきらりと光る。

三

——今見北滿一帶完全平定你們須止輕舉歸誠移明爲一個之好人棄綠林就安業——



年月日 日本軍司令官

昨夜寢た空屋の驛にはかういふ布告文が貼りつけられてある。守備兵のほかには匪賊からいゝ身代みしろに垂涎されてゐる驛長翁、ちやんと寢床の上には天井へ逃げ込む繩梯子をぶら下げた。若い驛員は用がないから夢中に耽讀してゐる本をのぞくと上海版の「綠林の怪傑」。馬賊から上りあぶが大總統のやうな軍服になる挿畫入りだ。

夜は無事に明けたが、さすが無法に似たる私も先へ無事前進出来る豫想がつかなくてやむなく待機だ。昨夜は隣驛へも出たしつい五、六町先の村へも二百名ばかりやつて來て砲を持ち出して追拂ひに行つた。

同行N氏は多用の人で日がせまつて来たので仕事をしにもう歸らねばならなくなつた。慰むものは思ひやり深い兵隊さんの待遇と狗いぬと小うさぎ。

漸く翌々日將校以下廿餘名敦化の方から連絡を取りにやつて來るといふ情報が入つたので迎ひの人達と直に前進。その次の焼け落ち橋の所で同志N氏からステッキ一本を貰ひ馴染の軍曹にも親切な兵隊さん達にもみんなお別れ、N氏は將校達と廻れ西の吉林へ。私はひとりで東の方へ。

六道河といふところの塞とちて——とまづ大げさに形容しよう——の中で強さうな鬚の軍曹と通譯氏と三人で晝飯を食べてゐると密偵が飛んで来て今匪賊がトンネル附近を破壊中だと告げてきた。今日やつと折角敦化からこゝまで通じた線路をまた壊されたら橋で作業してゐる人間以下立往生だ。確かめにやつた公安隊はふるへて歸つて來て怖くて先きまで行かれなかつたと正直に白状する。そこで直に機關車に積んであつた山砲は作業場へ残り、この塹壕の中へは兵數名が残り、軍曹以下數名と機關銃で出動、私はどこに残るかと聞かれる。危険度はどこも皆同じくらゐだ。ひとつ軍曹に附いて戦争見物に出掛けよう。

その機關車には逆茂木のやうに材木を積んで銃丸を作らへ貨車の窓には土嚢を重ねて射たれ

たら平たくはふこと。いよく出るかしらん。貨車には私のほかにも一人非武装者がゐる。馬賊から『往きは見逃したが歸りには覺悟しろ』と丁寧な言傳をもらつてゐる滿鐵の秋森氏だ。機關手がふるへて悲しさうに訴へるのをすかしなだめて勵まして前進させる。深い溪谷とトンネル、なるほど危い、あぶない。頭の上の山にも足元の崖にも、遠くも近くも氣を配りくばり汽車を止めては進み止めては進む。眞暗な長い小佛位なトンネルだ。が何事もなかつた。次驛の中隊長と顔を見合せた時入つた報告は「橋へ今出た」「山砲で撃退した」。どうも先刻の密偵の顔が逆スパイでもしさうな氣に食はない顔だつた。

秋森氏の苦痛は馬賊のおどしよりも明日如何にして怖がる苦力を連れ出すかにある。その夕方の方の汽車には先刻の戦ひで捕へた間諜を一人縛り上げて我等と同車、彼は中隊長の顔を見上げて白い顔で悲しさうにいふことは『めしを食はして呉れ。』

まだ一日途中で寝てその先きは例の土嚢を窓へ積んだ貨車で塹壕の中の兵隊さん達に久しく手紙も新聞も來ないから淋しからうと正月ごろの「古つはもの新聞」を配りながら敦化直通。輕爆撃機が飛んで來る、土も乾いたらしい。遠くでは馬賊の狼火ろうしが上つてゐる。

敦化城(吉林省)

身分を證明してくれる同行者を失つてからは時々前者からの申送りが途絶えたと

「おいあの女は何だ」。また宿の老婆からは甚だ迂散臭い鑑別を最初に貰ふのも尤もなことで、兎に角にして漸く、然し突然に交通途絶の敦化城内へ出現した大分汚れた上着を附けた着のみ着のまゝの洋装女——私は貰つて来た○團長閣下への紹介状と新聞囑託の名札とで漸くに町中の日本人の不審を晴らした譯である。いひかへれば敦化城といふと大したものだがそれほど小さな急作りの板塀で圍んだ小部落にすぎないのだ。一度雨天となると飛行機も着かず、停車場へさへも馬も動けず人も歩けずといふ泥街だ。

さてまたその泥が乾けば塵風ちりかぜとににくの臭ひばかりの山間の小街上にも○團司令部があるからには従つて料理店某樓は某組請負と軒を並べミス敦化のジャズも生じ朝鮮料理の看板の影には可愛らしい日本服の鮮人娘、滿洲國公安隊は角の青樓の二階で宴會をやつてゐる。

もと／＼長いこと大したことはなく無に近

かつた町だから最近日鮮滿比較的等分に農商官に發達してゐる。客を送迎の鮮人青年は「おれ」といふ一人稱を使ふ日本語でいろ／＼な話をする。東京で長く労働してゐたこと、女房は朝鮮で兩親を養つてゐること、弟は東京留學秀才のこと、「おれ」にはよく譯らなかつたが東京にゐた時分鮮人労働者はボルとかアナとか何方かへお宗旨の様に入らなければならぬ様な氣がしたこと、送金に貯金するので敦化の鮮人附合にこれこれいはれること、此邊の鮮人小成金の話等々。

旅館の第二夜には今夜か明日か守備手薄に乗じて紅槍會その他聯合の匪軍數千來襲の密



報が入つて領事館分館へ引あげの通知と相談一晚中の高聲だ、○團長や○隊長は四十や五十づゝ片附けたのでは、はてしが無いから固めて征伐した方が都合よろしいと手ぐすねで待ち構へた。豫報は十日ほど遅れて實現し私の寝た宿も便衣隊に焼かれたさうである。

さてまた焼却橋渡りで歸るのかと覺悟をした時に手提げ共々四十四疋の私の體量は時には益あり。狭氣な飛行士が積荷の計量を奮發して定員の上へ四十四疋餘分に積み込んで數日間の難コースはたつた一時間四十分に縮まつて新京へ。

沙漠漠然(内蒙古)

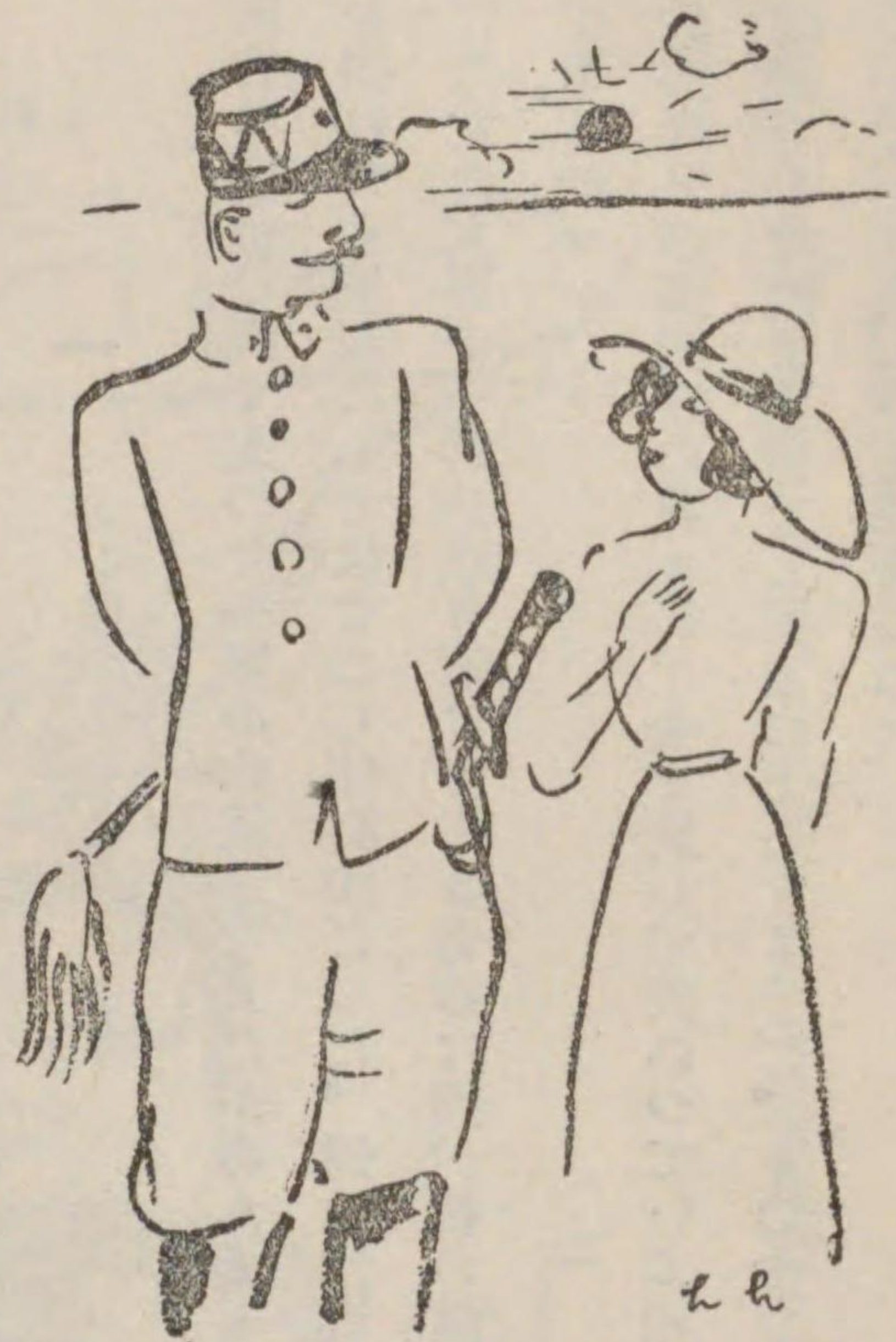
あの圓い一枚の黄灰色の肥料用の豆粕板を宇宙に浮べてその空間に小さな赤い丸い玉をぶら下げたら極少度に蒙古の形容ができる。大洋を航海すると自分の船が空中の圓い水盤の上にあるやうな氣がするがあの明るい藍盤のかはりに豆粕盤だ。そしてもつと仔細に擴大鏡でながめると土鼠のやうに灰土のもち上つたのが屋根の平たい蒙古の家、南京虫のやうにぼちぼち斑點の黒いのが豚、内地の白いまるい豚を觀念に入れると大間違ひ世にも汚ない存在で鼻を短かく汚らはしく作つた泥細工の象のおもちやだ。衣服あれば虱あり、泥家あれば豚あり、物が動けば即ち土煙り、馬車が三臺も走つたら氣の早い旅人はこれが春季名物の蒙古風かとおもふくら、讀者よ蒙古へ來て初めて何故に支那人に痰壺とタオルが付き物だかが氷解されよう。私に

しろ必然的に往來へ咽喉が大事だからまた臭いからつばを盛んに吐きちらす。

かういふ風に美的には甚だ難かしく、汚くならば容易に讀者に感覺的に話せる。人も犬もまた上等新式家屋にしても此の砂と土から作つた煉瓦製だから萬物すべて塵より生じたりで風土と等しき色調と漠然さだ。日本人仲間に「滿洲ぼけ」といふ言葉があるが、蒙古において一番有意義になり、テンポが早いといふとよく聞えるが氣短早呑み込みのねばりを持たない人間は悠々と偉大にはならず、かういふ雰圍氣だと直ぐ呆けるといふのは困るな、我々には意地の頑張りよりも自然のねばりの方が欲しいものだ。

さて白音太來とは肥たる土地といふ蒙古語で『俺達の民族は強かつた、成吉思汗は豪いぞオ』と放牧の夜なべ話を五六百年間續けてゐたら氣がついたら山東の窮民は南支の辛抱づよい商人はもう砂の中へ雜草地が出来たやうにしつかり根附いてしまつてゐた。また古いことでなく蒙古人が支那人に餘儀なくさせられた第二回開放地である。無から一足飛びに新世紀で市街は現代的な方針だ。廣くとつた東西大街、發電所、驛、製油工場等々。

このほどの二十日間に住民の一割ぐらゐる死んでしまつた大虎疫のために一時運行停止だつた汽車の第二回目通遼行（白音太來）だ。厄病除札はすなはち注射證明書。



原始的耕地と砂地と曹達地とのかはるがはるの連續と、名物赤い夕陽の甚だ故郷遠しの感傷的な水平線上に忽然として思ひ掛けないおとぎばなしの蜃氣樓が太陽を背にして現れた沙漠の中の大宮殿アラビヤ夜話。突然だから印象の効果的なことはいふまでもない。五六十頭の馬を一人の兵が縦横に御して馳る。

中央大屋左右翼舎の波、均整美しく一個師團は十分はいる新式城塞は張學良が作つたが今は新銳蒙古軍一千、日本の教官が指導してハイカラな服装の蒙古騎兵はなかなか勇敢ださうだ。讀者よ、もし赤い夕日のさすところに白音太來行きの汽車へ乗られたならば右の窓のこの繪畫を忘れずに御覽なさい。

白音太來 (内蒙古)

一

蒙古の活佛は圓く太つた平服の物柔かな人だがあんまり物識りさうな顔付きでもない、朝電話を掛けたら佛様にしてはすこし朝寝坊だつた。例の物淋しい色の煉瓦の塀の上へ派手に色彩つた天女の人形の一群が取り付けてある奇妙な門、彼の瀟洒な別荘。刺繡の天女の圖が掛けてあるサロン。

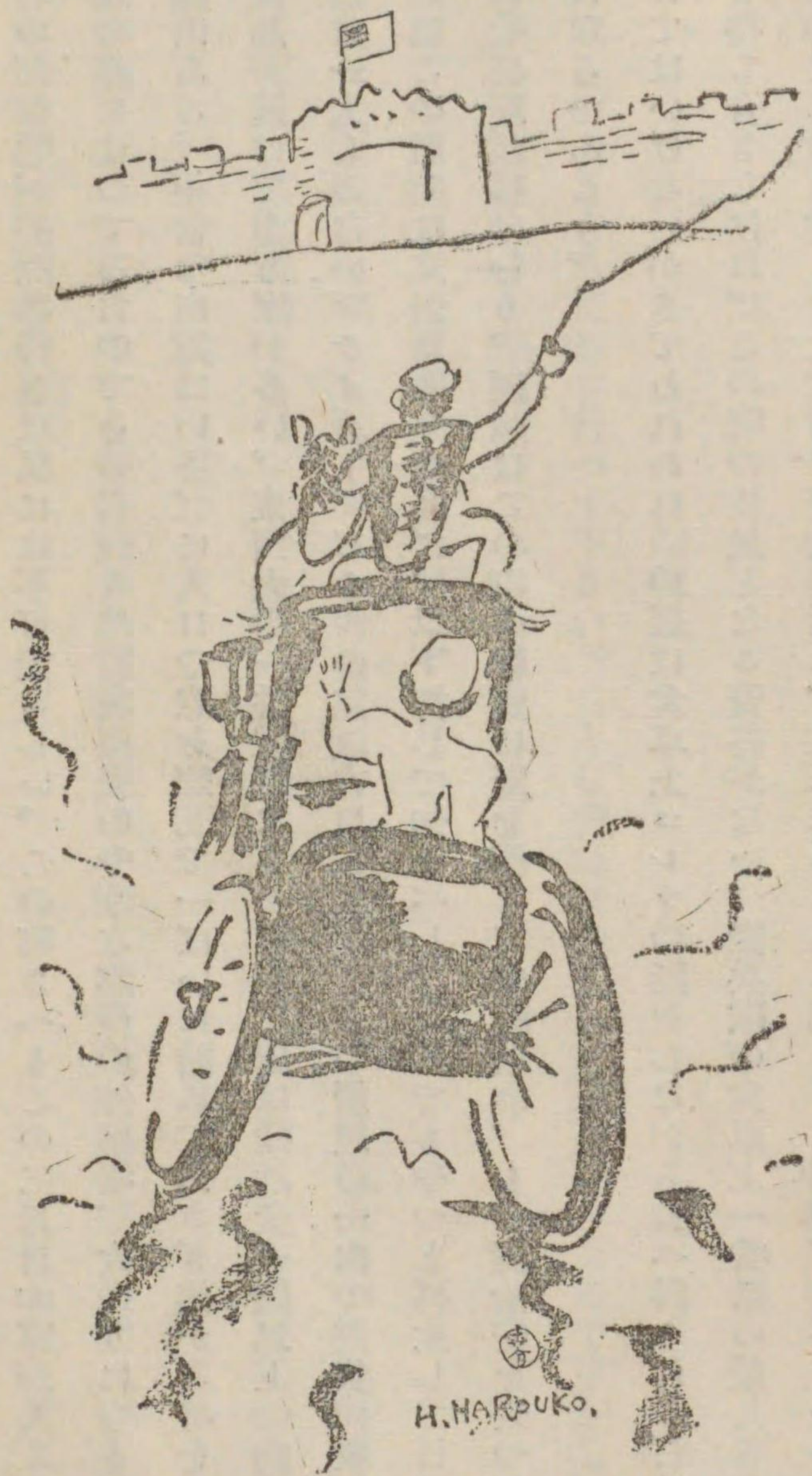
「活佛は只の訪問客の我々に、金を貸して呉れつていふ相談をしてゐるんですよ。日本へなら行政権でも地所でも何でも抵當によこすさうだ。その金で敵が討ちたいさうだ。支那軍には先がよくよく口惜しいと見えるね」

らい落な通譯T氏は大聲の日本語で當人の前で話す。憲兵隊長も私も少々可笑しいけれど笑

つては氣の毒だから眞面目な顔、T氏付け加へて

「大方實はまた麻雀で損をしたんだらう。」

手兵五六百ある活佛さへ僅か十里先の有名な莫林廟から逃げて來るくらゐだからもう遠く



はないのだが熱河省開魯行きは私には不可能らしい。この町さへもこの二月日本軍が入るまでは匪賊の巢になつてゐたのでその名残りは震災直後のやうな空屋の停車場、大通りにもまだ廢屋が澤山ある。相當な商家はいまだに入口や窓を煉瓦で一ぱいに詰めてふさぎ僅かな身をくぐらす隙間が開けてある家が多い。東西大街一番股賑などころの露店は通計金一圓以上の商品を持つ者は一人もゐない。サイダー、ビールの空瓶古皿古靴、東京の屑屋の一山で銅貨何枚のしるものはこの所では立派な人氣商品だ、以下押して知るべし。それでもやつと再生して日中の街は雜然騒然砂けむり、匪賊はこの町の物資に涎を流して虎視眈眈、も一度治安を失つたら廢墟になるであらう。

呆けてはいけなさがされてわれわれの神経は食卓上コレラの話をしてながら食べ得られるだけの太さも持ち合さなければこの町の住民となる資格がない。憲兵隊の食卓上一番話の榮えるのは何といつても數日前まで大流行の虎疫の話し、往來にあちこち倒れる人間達、物影といへば必ず捨てた死骸あり、生き返つてはひ戻るもの、犬に食はれる者、犬は仕方がないから随分殺したといふのに、まだまださすが犬好きな私でも觸る氣のない虱と泥煙りの立ちさうな食人者の豪犬は各戸にうづくまつてゐる。腐肉劑だといふ流言が出て逃げられて困つた注射班、何世

紀か前の疫病襲來話のやうだ。死んだのは住民は四千ぐらゐる日本人は十人ぐらゐる。馬賊氏も御多分にもれず然も防疫設備はないからこれまた弾丸なくして大分退治られ當時よく盗まれた物は棺桶、終ひには高粱のす巻きで間に合せた。こゝに無智な私に意外であつたのは沙漠地でも掘れば清い水が豊富に出ること、遼河の上流から取れる魚やさんもあつた。

二

「城外四五町のところだから行つて下さい。こんな奥地は誰も人が來ないところですから」

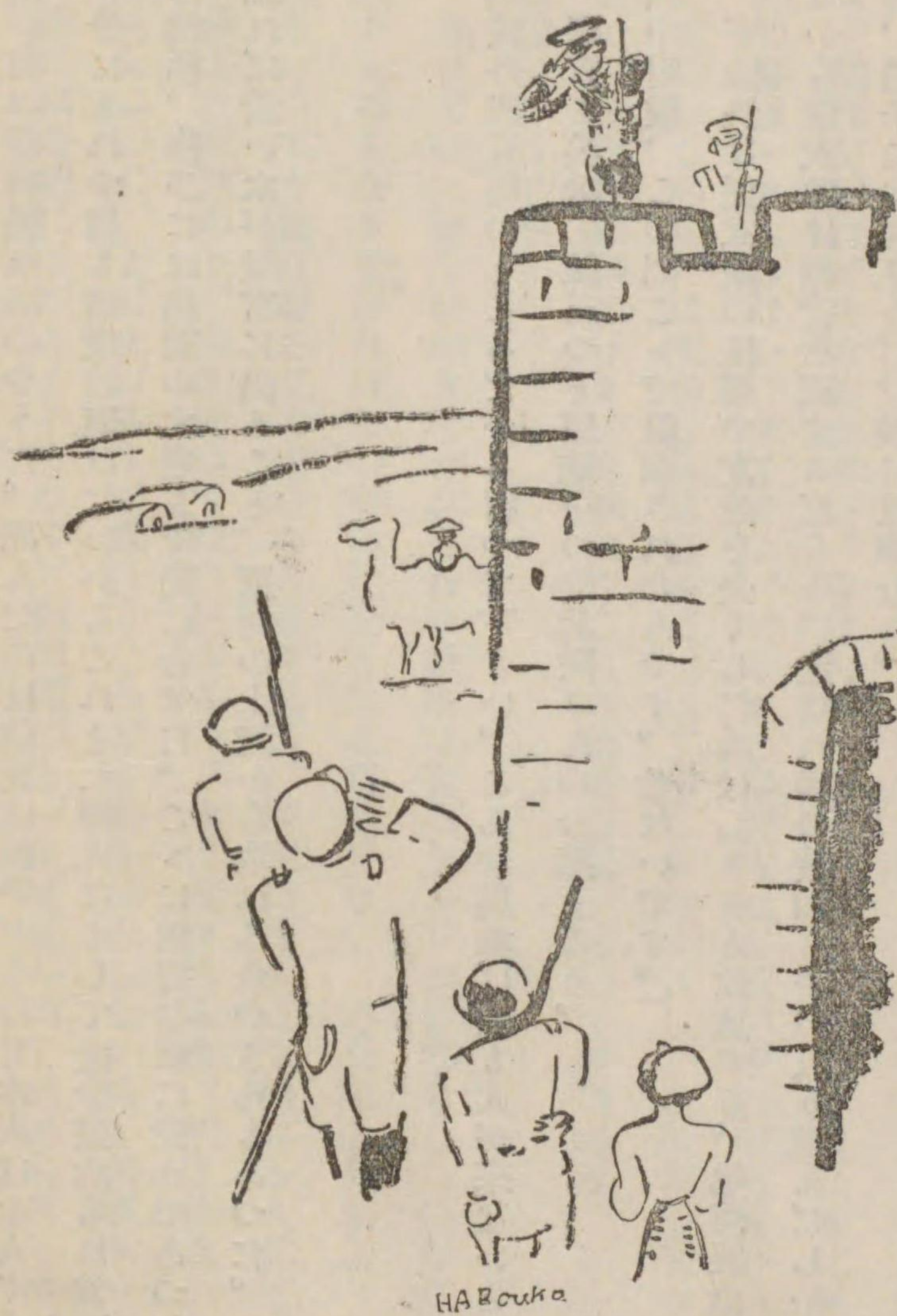
副官と兵隊と銃三つと短銃一つで兵隊さんのお墓まゐり。

「中尉殿、この間こゝで狙撃されたんです。危ないです。」

不愉快な便衣隊の狙撃で友達を失くした兵はしきりと注意する。熱河經由北平と連絡が取れるから便衣隊は相當活躍するだらう。途は八幡の藪知らずで入り組んだしかも皆同じの泥家泥塀、迷子になりさうだ、誠に狙撃むき。

犬の青煙を上げて焼けてゐる電流鐵條網、高い砂堤、踏み越え飛び越え城外の畑のはしに遠く離れて一つづゝ立つ木の標。

「彼奴は馬賊ですよ、必ず立派な身装りか、さもなくばずつと汚い苦力カクに變装して入り込んで来るのです。」



町はづれの物
蔭でその怪しき
紳士とひそく
やつてゐた公安
隊員拙いところ
を見附かつて腕
章の名前は讀ま
れるしまごく
してゐる。

第一回開放地
の鄭家屯、滿鐵
の四平街から直

ぐ近くで然もちよつと蒙古の風もにほふところ往きこゝで兵隊の足の下に彈藥箱を枕に深夜
出勤騒ぎの辛い一夜を味はつたので、兵隊さんに會ひにちよつと下車すると前面には兵匪では
あるまいが數百の軍馬が何となく、物情騒然、張某氏の手兵が何かに激して洩南引き揚げの情
景であつた。國軍といふ觀念より兎角まだ某の手兵と公私混淆するらしい。鼠の天竺木綿服に
銃劍を背負つた兵士に引ばられる蒙古馬のいななき、デッサンの興味を起さずに七言とか五言
とか四角い字にならべたくなる秋風胡馬行の詩景。

それからの二等車内は一ぱい。隣には少々酒に酔つてゐる日本人、前には體たくましく頼も
しげなファツショ式若人がゐるが洋服の一人女が氏の氣に障つたか言葉尻に柄えがついた。その
隣にはちやんと兼ねてこの黒旋風李氏に宋孔明のやうな人が附けておく人ありですぐ事すみ。
滿洲國內では各國人の指導者兄分になる自負がなくちやならない我々日本人だが兵隊さんが一
番畫家から見て感じのいゝ表情、奥地へ入るとたまにはおつかなく見える人もゐるのが苦力カク引
卒などゝいふ荒つぱい仕事の人、無慾の人達に交つて少々慾張りさうに見えるのが入り込んで
來た小請負師たちの顔。

呼海國威揚ル（黒龍江省）

北滿の美しさ朗らかさ、日本内地では濕氣の水墨が何にでも混り込むからこんな明るく落ついた青空も、またこせくした山などの邪魔物の入らないリズムカルな白雲の分列式も永久に見られない。大陸的繪畫題材だ、然し畫圖は上の方だけで下にはまた點景の何物もないと一面に實つてゐる無邊際の穀物の黄色ばかり、當分は肥料もいらぬといふ沃土、やがて科學的近代移民がやつてきて林や家畜や果樹園が點ぜられて「北滿の美しい平和なある村に」などといふ活動フィルムも出来ることだらう。

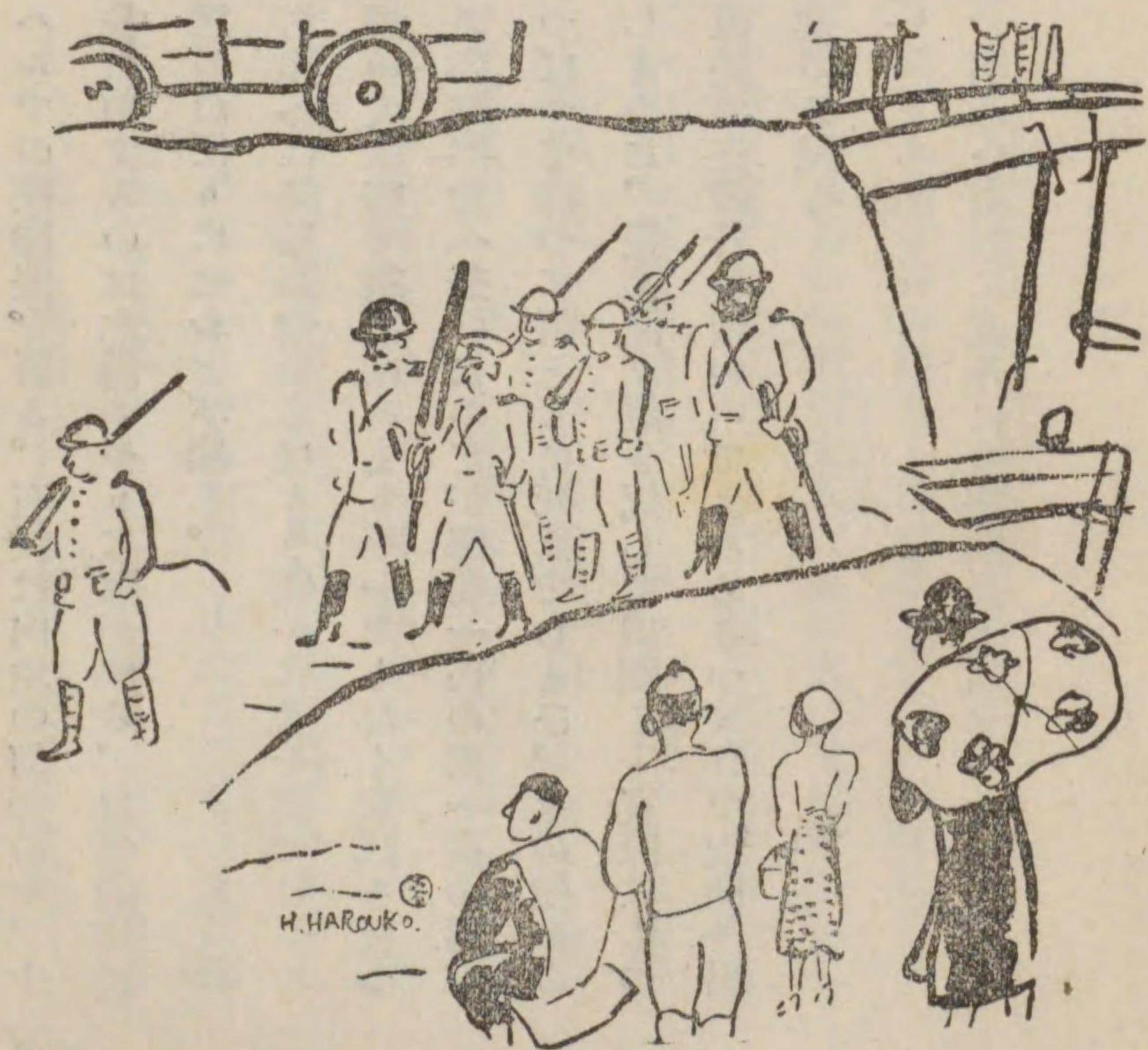
「内地から來る不景氣の手紙を見ると、どうかしてこつちへ残つて遣つて行かうと思ふんです

が」

「その代り、直ぐ成功だなんてことは駄目ですよ、あなたの孫の代に成功するつもりで、お祖父さんが昔此處を開いた時分には苦心したものでつていふ位にね。」

兵隊さんと私が世帯話の相談をやつてゐるのが呼海鐵道の三等列車、汽車はこの有名な北滿の穀倉用に出來たのだから夏は時々^{サボタージュ}怠業をし秋冬となると活潑に走り始める。

然し零下何十度は日本人には辛らいか否北海道生れの大工の棟梁はスキーの手並を見せたいために早く雪が來りやいゝ



と斗尺を振り廻して楽しさうに去年のチチハルでの経験談を語る。石炭は内地の何分の一、十分な設備と理解の計畫移民が永いうちに一番成功するのは北滿のやうな氣がする、自然的移民は故郷の辛い山東の窮民や生活のひくい人達のねばりにはおよび難し。

ともかく愉快だ。滿洲地圖の最北端大黒河岸へは終點海倫からはもう僅かに數十里。

といふと大層閑な線路のやうだが、北滿の大水害で旅程はあまり平かでもなく鼠賊もぼつぼつ、一九八哩が二日間完全にかかつて深更終點海倫へ着いたのだが驛前一匹の馬一臺の馬車もなし、馬占山が逃げ出す時馬を大がい引つぱつて行つて諸ともに死んでしまひ、その僅かの残りをまた追ひ掛ける日本軍が買ひ上げてしまつた、深く深く鋤き返した田圃——實際はもつとひどい——そのまゝの凸凹泥面ていめんこれが幹道路で三四軒を暗の中でよろめきつゞけで夜間外出禁止の人一人通らず。私も連れの兵隊さん達の心配も

「おいこれで着いたら飯が食はれるかなあ」
生き返つたやうに飛び込んだ○團司令部の明るい廣間に意外にも旅團長と話をしてゐる人は。



○團長と對座してゐる人はこんな端の端で意外にも上品な日本婦人——目立たない絹の支那服の——脇にゐるのは夫君習しゅうじん太人、此の人は此所で有力な官鹽業者で土地の事情説明——交渉折衝馬占山の古い知己で死體の檢視にまで働いた人、夫人は通譯と顧問汽車のなかつた頃幾度か旅行をしてゐるので道案内にも委しく目下夫妻は軍のためには大活躍、前線同性同胞といへば兵隊さんの往くところ必ずついてゆく娘子軍、可憐な朝鮮娘ばかりだと思つてゐたらかういふ女性もあつたのだ。また他にも一人二人通譯その他でこの夫人ほどではあるまいが大いに活躍してゐる女性があるさうだ。

それで其晩は習夫人と二人で相抱いて寝た温突床の上、永い間日本語をつかふことさへなかつたこと、故國が強くなる時生れた嬉しさ、今年の五月日本軍が正式に入るまで中村、井杉になる覺悟で便衣で来る人達、満鐵の社員さへ國際運輸といはなければ來られなかつたこと、あとでどんな目にも逢ふことを承知でその人達を泊めた覺悟等々眠い眼玉も口や耳は起きずになるれない話。

翌日海倫街上○團長閣下は肥馬にまたがり堂々と城内巡視、此の町は讀者も承知の馬占山の根據地で百何萬元かの手切れでやつと退いて貰つたほだから日本軍からどんな目に逢ふかと入城の時には人影さへ見えなかつたさうだが、今は討滅して返れば歡迎凱旋の飾りができ、前線として一番平穩な空氣だ、遠いせるか北平の便衣隊もまだ忍び來ず、○團長は便衣で風呂屋へゆかれる氣輕さだ。さてつゞく白馬には私にまたがりこれでも記者の資格だ。つゞいて軍屬兵等々の行列、公安隊は敬禮する街の人はあふぎ見る、内地の友達に見せたいものだ。然し口悪が諷刺畫化すれば立ち所に滑稽化する。閣下のは立派な軍馬の背が高く私の白馬は小さな支那馬、乗り手も小柄で鞍につまりほかほか悠々と前に食つ附いてゆく内地なら冷汗ものだ。時々前後で顧みては心配して呉れる中をまづは體裁よろしく落馬もせず○兵○團司令部訪問。

内地からの慰問隊も中々かういふところまでは遣つて來ないので、スキーの棟梁からは産婆と間違へられた私も軍隊へ敬意を表しにゆくとどこでも中々歡迎。

「本當によう來てくれた。たまに來るかと思へば利用しようとするか慾ばつた奴ばかりでう。」

三

日焼け面鬚面古服夏服冬服、また私物行李や軍用行李は遙か三百里くらゐ遠くにおいてあるといふ隊、冬服で夏中通してしまつた隊、この冷たさにまだ破れ放題の夏服の隊、洗濯度々で縮んでしまつて下からお腹の出てる中隊長、まんぢう笠に便衣の方が似合過ぎるやうになつた中尉殿、質屋の奥座敷の司令部、よろづ屋の二階の隊本部等々千差萬別、往來で繁昌するのは哀れな古皮で綴ぐる兵隊の靴直しや、騎兵は五六百里、歩兵が三百里位、雨と泥地と炎暑の難行とどころどころの合戦、その代りどの隊でも苦心談と手柄話は山のやうだ。またいくら聞いても飽きぬほどに人は感動させられる。

それでも人間の方には精神とか氣魂があるからには討滅し得た喜びと誇りとで人間といふ者



は實に丈夫なものだと感心するほどあとで病者も少かつたが、哀れな馬匹は當時の寫眞を見るとお尻がなくなつて生きた骸骨、今いくら手厚く養生してやつてもほつぽつ死んで行く、泥の中で生きながらの馬の立往生は敵も味方も少なからず馬占山も最後の幾日かの行動は全く浪漫的悲劇作者の好題材である。

さて綏化まで立戻つて○團宿舍で疲れを休めてゐる夜半。

「すぐ近くで出火であります」

「兵は彈丸をこめろ、無暗に出ちやいかんぞ」

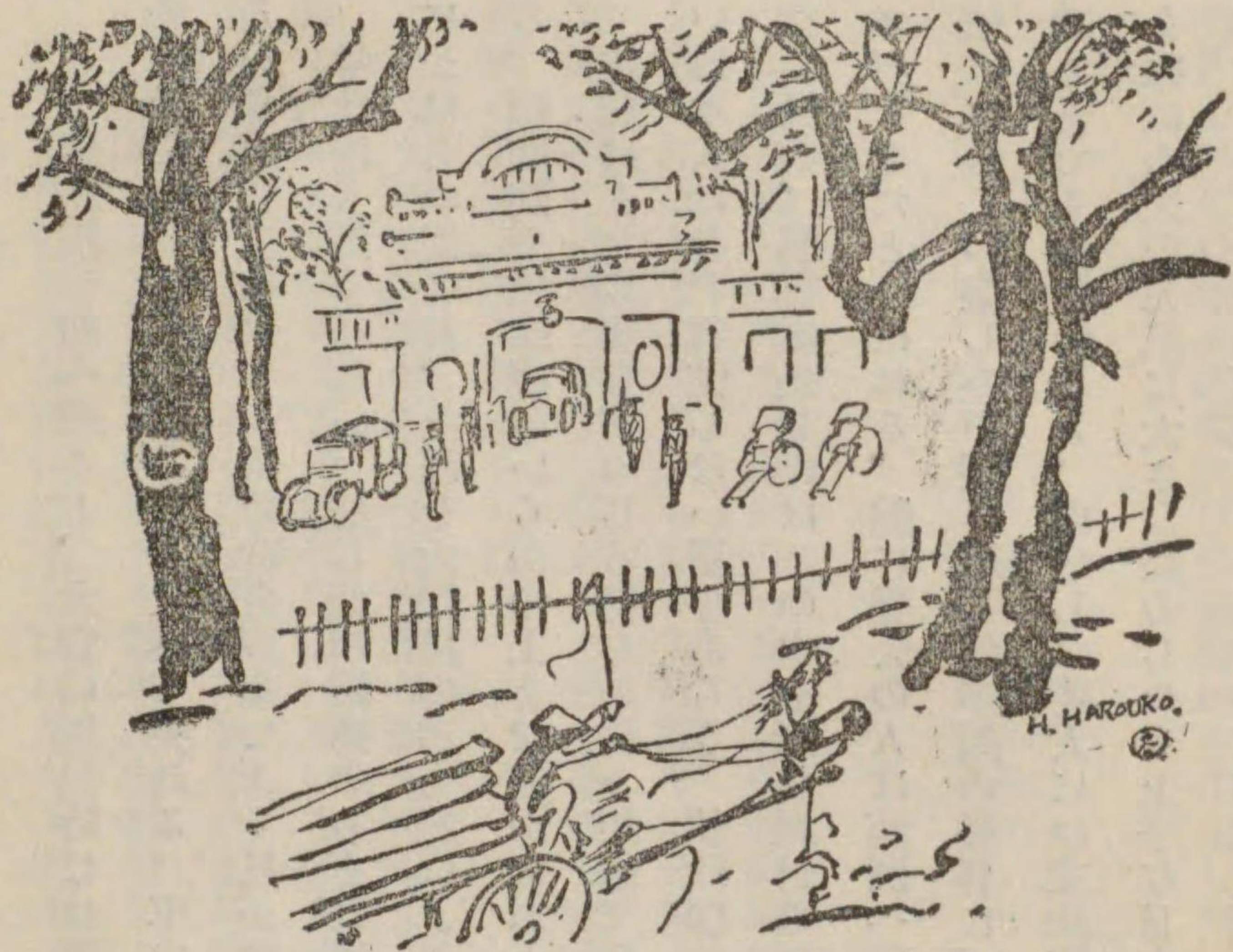
放火だ。昔のモスクワ焼打ではないが

これからの寒さに宿舍煙滅戰術は閉口だ。翌朝憲兵隊その他の取調べ中々急だが、無智で後難ばかり怖がる住民の返答は手が掛ることおびたゞしい。

珍しいことに綏化城内には本屋が一軒、吉林蒙古黒龍江と奥地の城市でこの心の糧を賣る家があつたのは此所ばかり、何所かで一度表具師を見つけて商賣になるものかと可笑しく思つたことがあつた。それから醫師の看板が相當に賑やかで皆それが性病、賣藥の廣告もそれ、一體支那でも滿洲國でも旅行して氣がつくのは富の割合に多いのが醫者の間口、すくないのが藥局文化のパロメーターだ。また加特利宣教師は昔からすつと奥まで活躍してゐる、然し成績は疑問だ。高等商店は茶莊布商ブリキの五重塔の飾りを立てた金銀商に錢莊、大體の食料品は肉に唐辛、にんにく、數種の粗末な野菜に李に瓜、馬には豆粕板他に鹽と砂糖があれば、高粱飯と粟飯で町の生活は成り立つ、雜貨や化粧品などはまだ當分不要だ。農具さへ賣ることまれである。

新都街の風(中央幹流)

日本人は氣が早いからもう北嶺^{ほくねい}を過去の古戰場として終ひ村道巾一ぱいの乗合バスが郊外の豚をけ散しながら内地からの巡禮客満載。遙かに見える附屬地の給水タンクは張學良の兵隊ならで今は案内者の作戦説明の大立て物、追つ拂はれた兵匪たちは今いづこ、兵舎殘骸草茫茫たりで、かたはらにはもうそのかはりに高等學院が出来て國吏國士となつてやがて地方官の積弊を改善する大務の日本男兒が勉強の間には見事な體格勇ましく短銃を習ひまた支那馬のお尻に鞭を當てる。文化は附屬地よりで通り過ぎるところつゞく商阜地城内城外とだん／＼と同じ股賑の中にも文明人には不可思議のナンセンスが加はつて来る。先づ文化の水を城内へ別けはじめたお蔭で、飲用水も近ごろは一日何回の斷水めばしいといふほどの文化的大厦高層はまだない。皆これから。



それでも日滿蒙漢露五民族に、外に吉林や黒龍江の山奥にはゴリツドピラル、オーロウト、ギリヤク、チブチン等々聞くことも珍しいやうな未開族も十指にあまる大國の首都になつた大新京だ。驛前へ來ればずらりと並んだ前掛や涎掛に何々棧と記いた支那宿の客引きの引つばる騷性には並ぶ日本の旅館ロシアホテルのポーター達およびもつかず。自動車はまだ貴重品、一臺銅貨數片の馬車は秋風に馬の立髪雄々しく堂々として何百臺、ぼろでもはげても遠くからはこれも壯觀、アカシヤや柳、楊柳の大樹の蔭から自動車の騒音のかはりに窓に響いてくるのはくつわの音の長閑なぼこぼこ。

さて國務院の前へ來ると、大官の退出時には警備兵が嬉しくほこらしさうにあれば總理の鄭孝胥氏だと聞きもしなくても教へて呉れる。車中の人々の顔も輝きカバンを抱へて煙草悠々の人力車上官吏風景も子供の時分東京でよく見かけて以來久しぶりだ。

執政府も遠くはない。然し此の樞要のちまた垣一側の外側はこれは又昔々の蒙古開放地時代にかはらぬ泥の波、それを大繁昌の馬力屋はより悪くし、より深くし、より勞力を濫費してゐる、國務院や執政府のいらかの上まで泥がはね上りさうに。

内側はまた日滿官吏めじろ押し肩々相摩で政務の大勉強、何から何まで新設新規で氣の早い日本人はさぞ氣忙しない事であらう。執政即位の室を窺くと疲れたのか誰やら忍び込んで晝寢の最中。秘書處長某氏はその中を割愛應對されて何より澤山欲しいのがあらゆる部門のエキスパートだといはれる。腕に覺えの人は滿洲へ行けである。智慧に技術に先だつ資本、日本の懷は當分この楽しみ甲斐のある幼弟國の養育にプロの母親の苦勞を味はなくてはならないのも我々までも覺悟のこと。面會した要人には立法院長趙欣伯氏建國の大務列國承認の努力と成功を味はふ氏の元氣な大きな聲のしかも上手な日本語談話に感心し、然し過勞かアヘンか、白哲細身ハイカラな氏の顔色は方々めぐつて日焼け面を見馴れた私にはひどく悪く見える。あゝ阿片

阿片これだけは兵匪の次ぎに滿洲からなくしたい。

東支線哈爾濱

滿洲笑話「どつちが強いか」反吉林吉林の兩軍が合戦をした。一方は久し振りに大枚の月給を貰つた計りであつたから相手方は勝てば分捕り望みのまゝと激勵された。ナポレオン伊太利攻略以來の必勝戰術だ。所が文字通り命より大事な物の腹巻に入つてゐる兵士はかつて見ざる必死の勇猛で忽ち撃退した話。

その大事な紙幣が時に荒唐無稽な紙であつて、金銀兩立て新國貨日本貨ハルピン洋銀、黑龍江、吉林はいいとしてその他にもいろいろの大洋小洋の色目も解らぬ垢と細菌紙、奥地へ行く日本貨よりそのあやしげな不換の紙切れが瓜賣りの笑顔をもたらず。昔は日本の魚屋が邊地へいつて彼氏肖像入りの紙屑を數萬元發行したといふ笑話もある。

歐洲行幹路の東支線は水害以後は全く不完全で、新京哈市間四五時間の急行路は今は早朝發



の夜着、警備は護路軍、日本の兵隊さんとは數人で匪賊突破も怖くはなかつたが私もこの夜行は乗るのを躊躇した。車内取調べに來た痛快な國際インテリの中校（中佐相當）殿あつて快談滿洲の將來を祝福すれば友達とかへり見て明るい満足の額ひた。この人の會話主題は全く東京智識人だ。先日拳固を貰つた露人給仕は彼を恐ること猫對鼠。宣傳立國のソ政府は沿線抜かりなく滿洲旗の下へ録旗を立ててゐる。かういふ點で日本人は遠慮深い。もつとも立て出したら四省中いたるところの丸になりすぎよう。

ハルピンも變つた、去年通過の時と比べて市中日滿の色彩の増大したこと、帝政ロシアの東邦侵略大望の記念物はもう滿洲中こゝだけだが市内の主潮をなしてゐる露風にすつかり伸張性が消えてしまつた。もう古風になつたが豪華を誇るロシアホテルにも日本使用人を入れて營業を考へるやうになり、ロシア百貨店の商品も日本とドイツとチエツコ製品ばかり。日本人の殖えたこと。

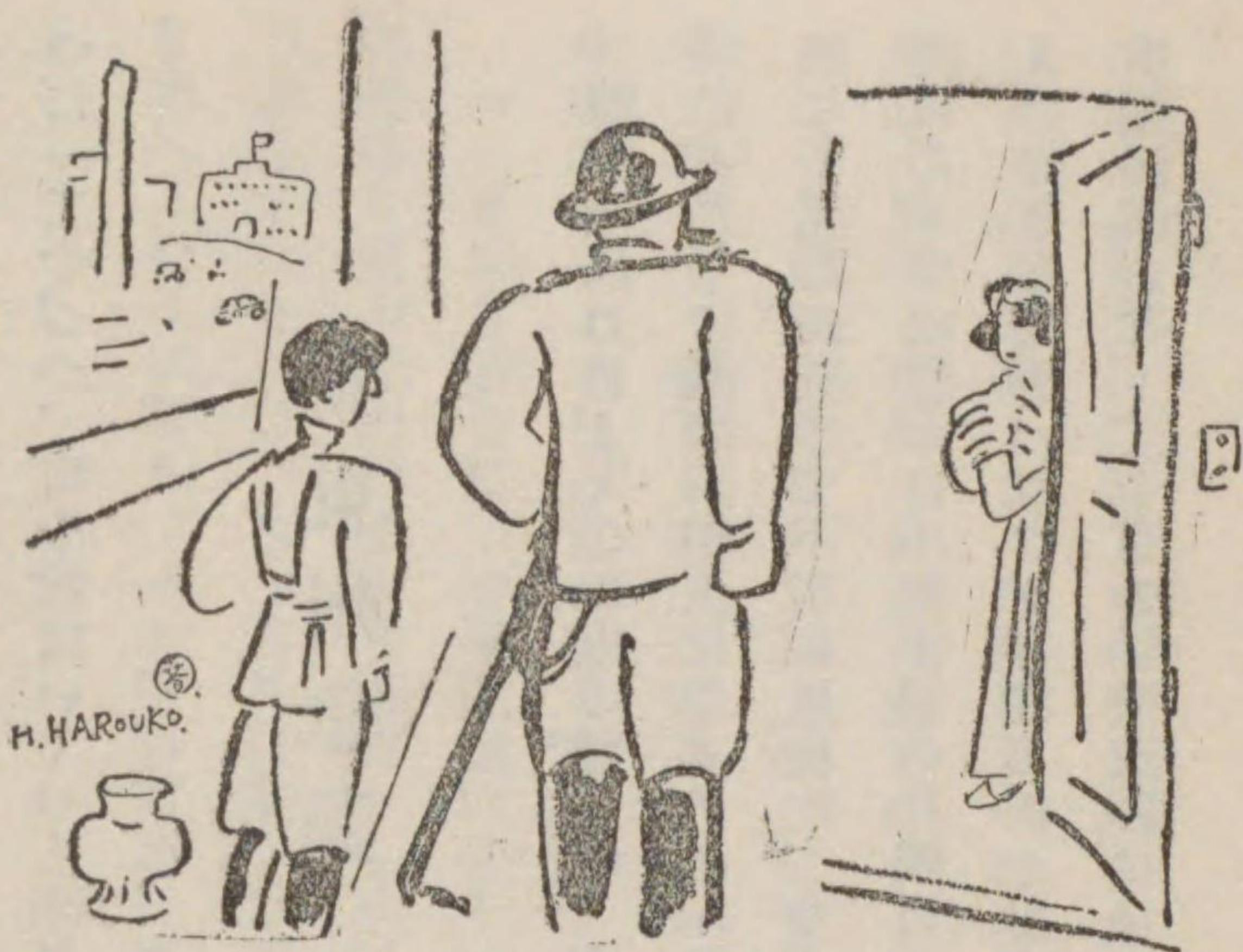
しかし新京までは内外全き成就の滿洲國市、こゝへ來ると多少會つての國際關係の餘燼か、何だか時に風となり雨を呼ぶ平靜の不穩一まつ、メタンガスがどこかに残留してゐるやうな所もありさう。ソ國の新國家承認條件は即ちこの邊の空氣所産か。滿洲事變發端の殊勳者S歩兵

大佐も何時の間にか○兵になつて此所で活躍し、特務機關、新聞記者こゝの空氣を半日吸ふと旅人の心臓へいろんな觸手が残る。東支線の消長がこの町の氣壓計かもしれない。

さて水害の名残りは數町の河幅が、まだ對岸呼蘭まで三時間の船旅、それを減水量は一日たつた一二寸づつ、町や村はいくつも來月には氷結して來年まで冷蔵保管。

關東州急過

關東州はわれ／＼の親達の記念塔モニュメント。南下大連へ來れば内地のこせこせを削除した新日本、同時にまた今に滿蒙が樂土になるのを示す既製模型。天然文化科學を十分に應用の近代都市、兵匪なく兇器が初めて不用に思はれ、今まで邊地東西南北で滿喫したあらゆる過去の姿の荒唐無稽はこゝでは僅かに小泥市場の片隅におできのしこりのやうに残る計り、氣候のおかげで日本人の好きな安物バラック存在し得ず計畫に因襲の煩ひがなく日本景勝の地至る所で溜息のである風景汚損がなくて十里の鋪裝道路はほどのよい山々、明るい海、島、鹽田を廻り廻つて旅順に



至る坦々の大道、心地のいゝこと日本一、満洲一だ
—ちつとも誇張ではない。人もし満洲でうんだ時、
晴れた日にこの旅大道路をドライブすればいつまで
も何時までも走つて居たいほど快よいだらう。

二〇三米高地から見下す黄海と渤海、遼東還附の
悲憤、歩兵の血肉を澤山吸ひ砲工兵を散々泣かした
金石のやうに固い固い旅順の丘や山、明治時代の國
の柱の靈達にお禮をいつてきて私達はもつと先きの
先きへ今度の記念塔をば建てる役割だ。

「皇道指針」の大きなお守札の飾つてあつた司令官
室、思慮と温顔で深みのある柔しい本庄將軍を奇妙
な質問でなやませた日も遍歴數句の今は將軍も功成つて東京へ凱旋のあとで、ヤマト廣場の表
忠塔の日ざしもすつかり變つてしまつた。軍司令部新聞班を訪れば、
「やあ大分いゝ色に焼けましたなあ」

この満洲やけの顔色をおみやげに一路今夜は東上で蒙古の塵、敦化の垢、呼海の臭ひを洗ひ
落し、のびすぎた髪の毛を櫛づる時突然ホテルの部屋の戸をノックする人あり。

意外にもこれは馬占山討滅の殊勳者の田中信男大隊長の大きな體格と、小脇に直實なら抱へ
さうな紅顔の美少年長靴拍車の珍客は川島芳子嬢。大隊長は先日呼海歸上の途を矢張り大小の
對照私も今日の川島嬢のやうであつたらう。然し意氣地のない私はお辨當から風呂敷包みまで
少佐殿の御世話になつたが、川島嬢はあべこべに大隊長を乗せて自動車まで運轉だ。

「こんなホテルなんて君贅澤だよ。僕は何時でも三等旅行さ」

この有名な人も美しい華しやかな體は過勞で痛ましく衰へてゐるやうな氣がする。芳子嬢よど
うぞもつと丈夫になつて續いて活躍して下さい。君に待つ仕事はまだ中々多い。

さてそれでは奉天出發。大隊長殿よ、それから満洲の兵隊さん總べてよ御無事で。働く同胞
たちよどうぞ元氣で。

風物・點描

「これでも春の海」

一分でも一寸でも振動できる隙のあるものは、締切りの雨戸板戸、障子ガラスから茶だなまで総動員で一日、どことどこ、がたがたと夜も晝も不斷の小太鼓大太鼓でうつつの攻め苦だ。

たつた一つ、この名物乳らくの卸し元まだら牛達の神経だけはまことにちつと静穏な事らしいが、あとは上白雲も雨雲もやつとかじりつかうとする二千尺の山の頂邊へも谷間にも寸時も引かゝつてゐられないで又海の中へ追ひ飛ばされてしまふのから下島内一切合切、吹かれて動いて濱邊の石ころや屋根のおもし石までごろごろ泣いてゐる。満目白浪のあわの中に向ふに低く平べつたく船の胴腹のやうな式根島も、すつと遠くしぶきに見えかくれする沈みかけた船のせう塔のやうな利島も、同じ難破島のお仲間だ。

春の海洋々どころか冬の西風の持ち越して、大洋航路にはこの邊は脱れてゐるし船の影は十

幾日間一そうも見えない、来ない。どの島も火山島で港がないからせめて山蔭へ寄り添はうとしても意地悪の西の風が追ひまくる。旅行案内で見ればたつた三日の旅程の所だけれど島の用あり人は往きも返りも我が島を素通りされてまたくに、本土の事だ——へ戻る仕儀がたびたびあるさうな。我が待つ船も大方下田へ逃げ込んだか、大島から東京へ歸つてしまつたのであらう。これが東京府下で伊豆七島の雄、大島からは僅に十八里也の××島である。

*

さて旅の憂は着島第一夜、まづ古雨水の風呂で人間のくさやの干物となり深夜隣の爐邊でもせうちうの長夜の宴でまるつて、第二夜は數里前進して大きなT村だ。宿帳取りの中爺いはいく
『昔はこの村が流罪人の住んだ所で、習俗まことにおそろしく、夜間侵入の名物の所だつた。御覽なさいだから古い家はいざといふ時救ひあへるやうにくつつけて建ててある。今でも——』
と私を何と觀察したのかまづわあつとおどかしてくれたので、これは夜明け早々脱出した。さてかくして最後にもうあと一里かそこらで元の船着き場へ回りつく事になる地點で、『知事

さまたつて泊れる』お二階家だ。溶岩が古くなつて漸く清水がしたり出るやうになつた貴重な地、そして濱邊の岩間からはぬるい温泉のわくといふ樂土安全土へたどり着いた。が外はその通りの風の移動期間でどうにもならない。

魚もとれない、米も盡きかける。村の人は水つぽいもをふかして食べる。牛は鹽を含む草を食ふのだから第一流のピフテキが出来るわけだが、大事な寶で殺す所か、漸く雄の赤仔をつぶして見たがまたちつとも味がしない。所へ隣の室に鐵砲と犬をもつてきてゐる混血の美少年の客あつて——二た間きりの二階へ我々を並べておくとは亭主も粹な人間である、が山をあさつてしぎ鳩のたぐひを提供してくれる事になつた。だからいつも我等客人たちの話題はコーヒーの味や、うまいお菓子の事ばかり。

さるほどに、かくして毎日毎日少年は山を狩暮し、私は畫題や石つころを拾ひながら、の方に向いた岡邊から遙にとほくとほく見える雲のすきまの富士山をなつかしむ。雨風の激しい日には二階の欄干からまるで木れんの花のやうに木に一ぱい止まつてゐる目白をつかまへて遊びランプの下では少年と宿の子と三人で五目をならべる。

約束の會合にも『シマナガン』と電報を打つた。さうしていつか彼の少年はおばあさんが幸

せな『お蝶夫人』の身の上であつて彼は漂泊のロシア女の義母にいちめられるミリオネルの息子だといふ身の上話をするやうになつてきた。やれ／＼我が讀者よこれでは少々ポオルとヴィルヂニイのおはなしじみて來た。然し諸君、もしこんな孤島に合ふ話題といつてはせいぜいシネマの話位にせよ、もし半年一年と用なしでゐたしたら我々男女は心の平靜をだん／＼缺いてくる譯ではありませんか。が然しそれはまだ／＼春の血潮がさせる空想のさきばしりの期間中であつたある日のこと、亭主がにこ／＼と驅け上つてきて

『やつと、遠島の赦免狀が到着いたしましたよ。』

*

來た船は今年は高い利益の得られる木炭を積み取りに大膽に荒浪を乗り切つてきた炭屋のぼろ、貨物船であつた。

炭俵と私達とを積み取り波を泳いできた牛をハツチから入れるや否や直に沖へ乗りだしてしまつた、じつと停まつては風よけがなくなつていられないから。

大風のあとの暗夜の大うねりの凄さ、大島から先のあの深い深い海のはさは小汽船で横切

つた人達ならば知つてゐるだらう。やかましくないと犬共はすぐにまるつてしまつた。薄暗い回轉ランプとぶら下つたはうきが器械體操のやうにぐるりと回つてゐるうちに段々傾斜がひどくなつてきて薄べりじきの室の中をまづ小さな私の軽い身體がすべりだす、手荷物があるのを追ひかけてころがりだす。向ふから黒い圓い塊になつて寝てゐた紺がすりの大きな書生さんが轉がりだして來ていきなりぶつかつて私の眼から火花がでた。越中富山の藥賣りが大工さんと抱きあつて轉がつてくる。藥箱に傘、大工の道具箱、鐵砲、竹行李、鳩しぎ目白ごちやごちやに人間の轉がりまはる間をすべりまはる。いちいち始めはめいめい片付けたが、仕舞にはほつぽりだしておいた。

唯もう水夫上りの豪傑船長がこの際大事な頼みの人で、五六年前××丸が骸骨になつてアメリカの西海岸へ流れつたのもこの邊の難船で、然も今日の風工合はその難破日に類似すと島の役場にはりだしてあつたのを見てきたのだ。

そのうちに十何時間の苦闘だからかはやへゆきたくなつた、客船ではないから甲板の上の船尾にちよつと仕かけてあるのだ。もう甲板の上の品物は大きいすべつて海へ流れ込んでしまつて何にもない。ところで彼の少年は南歐騎士の血を受けてゐるからついで來て呉れたが、そこ

へまたひとつ大うねり。はつと彼の大きなのび／＼した肢體と両手が私の身體を中にして手すりへおさへつけた。振り向いた白い顔、口をきく所ではない。月は詩的に何もかもをすめるものですね。暗澹とした雲はすこしちぎれかゝつて凄くて艶なおぼろ月夜になつてきて折々は暗くなる。誠にどうも我身ながらにあまりシネマの一断片のやうな光と場景になつてきたものである。然し無情な大うねり、轉り落ちたら早速私はふか一口となつてしまふからこの浪漫的小情も瞬時にして解消。

*

東京灣へ入つてしまへばそれまでである。あの怖ろしかつたうねりも暗澹とした村雲の夜も夢のやうになつて、私がいくら形容して話しても海の嫌ひな友人達にはちつとも想像の進展がない。そして島物語を聞かされたある友人いはく

『だからおまへは畫描きで小説家ぢやない。事件展開がないよ。』

『何をか言はんや』

「輝く」へ何か書けといふ。此の讀者の過半は私より文藝界の先輩にして文字の人々、繪具の筆の私が何をか言はんや、云へません。然し時雨女史から其の報償として先きに芝居の切符を貰つてしまつた、こゝにいふ機會でなくては劇場へ行かない私は久し振りで見物をして退屈をして他所見をしたりそつと欠伸をやつたりして隣席の時雨女史から叱言を貰つた。まつたく無作法恐縮至極であつたが何時間も興趣を起さないやうな演劇を私のようなお饒舌が語らず動かす音無しにして居る事で私の肉體の最大限度のそれでも慎しみであつたのである。もすこし年でも取つて疲れてゐたら居眠りといふ便法を取れたのでもあらうが目をつむれば役者のろくに腹に落ちてゐない上つ面の臺詞が、これ又すこしも音楽とか詩とかを解さぬ音聲で私の聽覺器官をおびやかす、耳ばかりが苦勞するのが可愛想で、眼を開いて散漫とあらゆる私の他の器官からも一般的に出来るだけ愚昧の苦痛を漠然と受用して居た譯であつたが。そこでいよいよ前記の

無作法のお詫びとして何かを少々書く責任を感じた次第であります。

其の時、幕間の茶ばなしに時雨女史は此の悪妹をたしなめて『兎も角芝居へ来た以上は公けの舞臺へ上演されてゐるといふ事がすでに或る程度の評價を生じてゐるのだから相當敬意を表して靜肅に觀てゐる可きものだ』と云ふ。然り我が親しき藝道の先輩菊五郎氏から聞いた話に彼の亡父五代目菊五郎か未だ若く藝が未熟の頃、土間の——今のオオケストラ席の一番前の側の中央で靜かに將棋を指された事があつてこれにはまるつたさうである。さういふ味ひ深き皮肉に比べては、私は只正直にそつと欠伸をし、プログラムでぶきつちよ、な折り鶴の研究をした丈けである。そこで時雨女史にいつた。然し我々繪描きは展覽會であなた方に數百點の繪をはしからはしまでよく見る等といふ苦痛を強いはしない。然も一つ一つの作品は驚く可き努力の果實でそして八釜しい審査を美事にパツスした物ばかりである。そして無論平凡作も愚作も會場にはちやんと澤山備はり交つてゐるのである。だから端から端まで謹直によく觀賞しなくてはならない義務か責任かは其の關係者と感覺にぶき慈善家だけで勘辨していい筈だ。拙い畫なら過半が素通りをするが拙い芝居でも觀客が過半廊下へ逃げ出してさふ事はないのであると。と、しかくは詭辨を弄したにせよ劇壇關係者の時雨女史の同伴者としては誠に不向きであつた。

事は申す迄もない。然し實は私は決して演劇は嫌ひではないのであります。巴里藝術座の女優ピトエフ夫人を觀た時には此所迄演藝道の神祕を解した女の人が世にはあつたかと、涙を流して喜んだのである。そして今でも彼女の藝の話せよと云はれば私は戀人の噂さより夢中になつてあなた方にお話し出来る。

菊五郎氏も、もう大分以前の事であるが、芝居を彼と一緒に見物した時にはこれも行儀の悪い觀客であつた。其の時の出演俳優は皆彼の先輩ばかりであつたが觀客席の眞中で彼は相當大きな聲を出して、『拙いなあ、まづいなあ』とやるのである。

さて又私の師匠楠木清方先生も好劇家の一人である。舊劇新劇申すに及ばず昔しはサワシヨウ今のエノケンを一番早くに見て來られる。日本カヅドウの役者の名までを知悉してゐられて近頃の演劇界にうとく新進人氣俳優が出てきても『あれは誰です』などと傍の通人を赤面させる私に折々劇知識を分けて下さる。もつとも先生は子供の時俳優にならうかと思はれたさうである。日本は梅幸以上の名優を一人未出生に終つた譯だがよく此の事を笑ひ話にされる温厚玉の如く氣品高き清方先生の場合に於ては劇退屈に及ぶと平常は誠にお行儀のいい先生がしやぶり館をまさぐり出されて口の中へ投げ込まれる弟子の手へも渡つて來る。これは欠伸と眠り氣

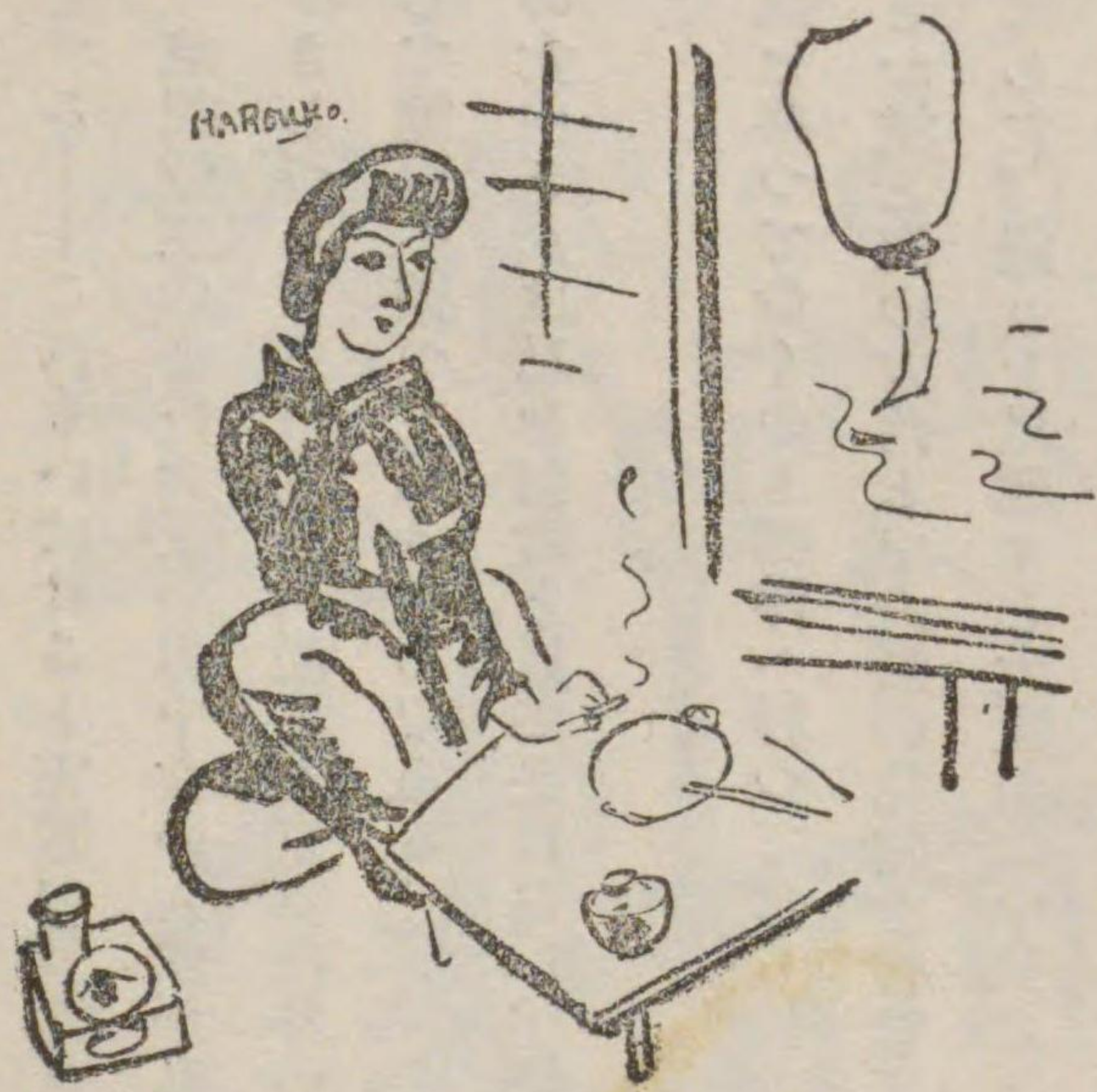
を防止し悪口を口から出さしめず甘味を楽しんで苦痛神経を緩和して妙である。但し電飾華かなる一流劇場の棧敷、オオケストラ席で少々お行儀は悪いけれども致し方なし。例の將棋指しの話しを受け賣りしたら先生も其の妙をたたへてゐられた。無論私に話した菊五郎も彼に聞かせた亡五代目自身も此の妙評の案出を感服していたのだ。

先年亡くなつた近世の三絃の名人熊本の永谷幸輝檢校の高弟でこれも味ひ深き音色の名手神戸の阪本檢校が上京して官位高き某氏、有名な箏曲大家の演奏會へ行つた。有名流行東都隨一の樂人の其のカリカリびんびんと堅く冷めたい非藝術の音をきいてゐる檢校は首をすくめ後ろを向いてはくすりと笑ふ。冷笑苦笑さまざまの顔を後ろの席に居た人に見せる。然し演奏終ると檢校は双手を頭の上へ高々とさし上げて盛んに拍手をする。拍手の音は演奏の盲大家には聞えるし冷笑の顔は見えない。そして手を拍いた人の悪い自らも盲目の檢校はつい椅子の脊がひくくて冷笑の顔を後ろの座席の人が見る筈だといふ事をつい想像出来なかつたのである。此の話しを聞いて私は大笑ひをした。若し其の演奏會に居合せたら失笑して出演大家の噴激を背負ひ込む役廻りになつたのは私に違ひない。故に私の箏曲の師の女史は決して此の弟子を曾つて仲間の演奏會へ同伴しなかつたものであります。

東京人の新大阪見物

「東京へ行つて人に物を尋ねると皆が怒つてゐるやうでこはらしい」

とかういふ意味を大阪語で給仕の女中がいふ。實際今朝、難波驛の改札で「有難う御座ります」といはれて先づ吃驚した。見物人といふ者は途上の土地の日常茶飯のことに物珍しく氣が附いたりそれから種々と土地のことを半分自分の想像を交せて觀察や比較したがるもので、わが東京の省線へ乗るとちつと官



僚風の中に智的教養的態度と正確があつて悪くもないけれども、社線や市電、有名な市電、不親切と不愛想で客は何でも彼でも不正乗客扱ひをする——これもいはせると市電の貧乏と不景氣から生じた副物ださうだが——を思ひ出すと、成程愛想のよい大阪の男や女の人達が私と正反對の驚嘆を東京でするのは無理がないわけだ。さしづめ東京市電氣局長と東京市内外の電車會社の重役達は大阪へ見學にきてプロの振りをして電車へ乗つて見るべしである。

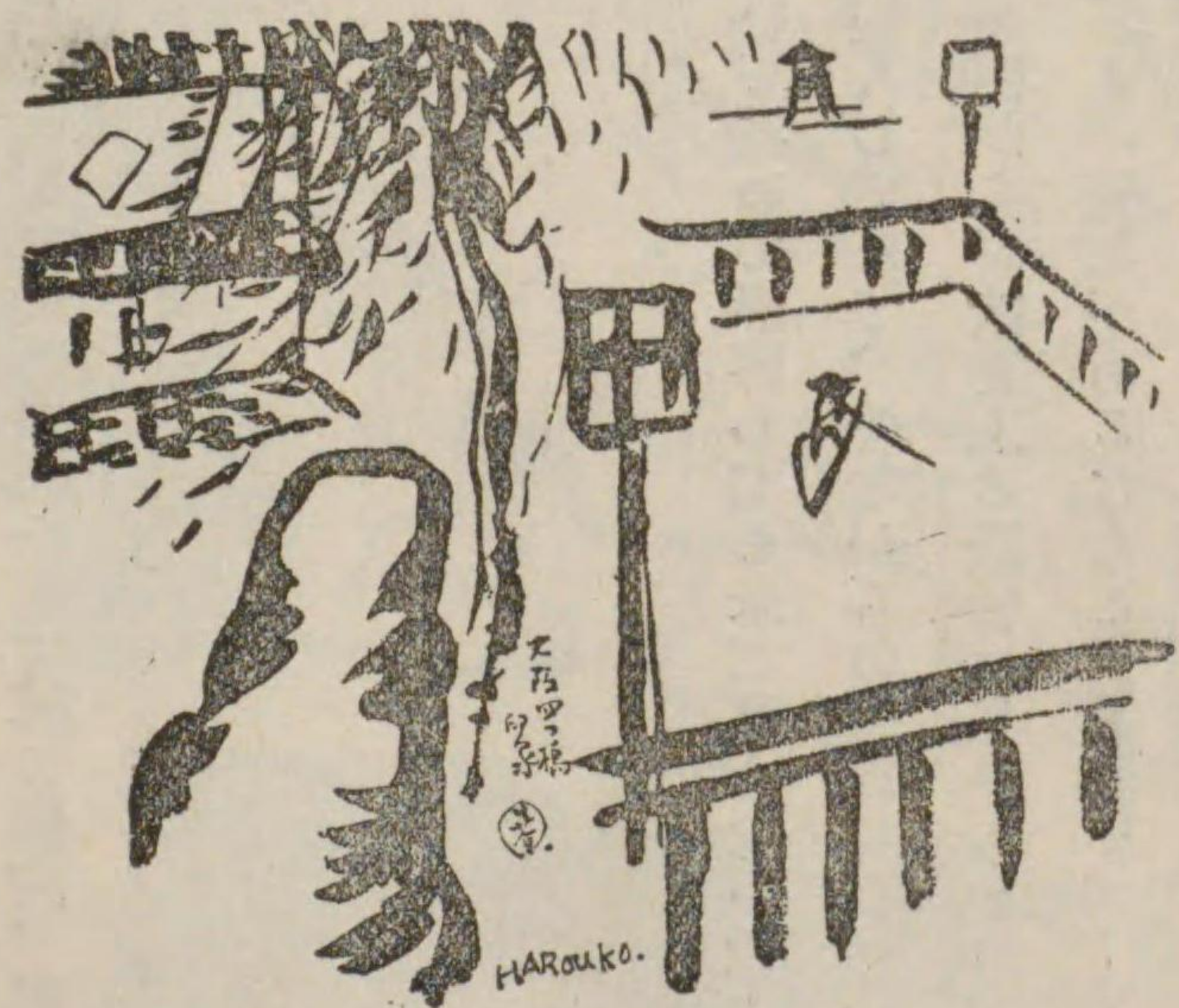
そこで大に東京語で賛成の意味を現すと、この女中さんは私を何者と見て呉れたか、紙卷を出してふかしながら立て膝をし出した。

たしか長堀川と書いてあつた邊りである。地圖を持つて歩くのも西洋へ行つてなら仕方がないが、そこが江戸子の見得坊できのふ以來淀川とお城と海の方角とで大體の見當を付けて歩いてゐるのだが、突然名はお馴染の文樂座に出くはした。邊りを見廻すと大阪の川中到るところにある船料理で「文樂の御幕合に」とか何とか書いてあるのが食欲と好奇心を動かして棧橋を渡らせられてしまつたのがこの女の人の出て來た船である。

何年振りで出逢ふ煙草盆、襟白粉の濃い二百三高地といふ日露戦争傳來の束髪の年増が立てひざで鋤鍋をたいてくれる。かくしてここは鰻谷といふところで、なるほど「お妻」のやうな

かういふ人がゐるのだ、彼女の大阪東京比較感と大阪語を幾つかとそれから傍若無人な工事をしてゐる地下鐵で水の動かない川の臭ひを嗅いだ。この地下鐵の表象するが如く由來不愛想で怒りつばさうな癖にしんは臆病なのが關東人で、明るくよく氣がついて如才ないうちに傍若無人のところがあるのが愛すべき大阪氏だ。もしこれに藝術美術の風味が加はつて洒脫になれば西洋ならちよつとパリの人に近いかも知れない。

さて四つ橋へ出て新と古典の大阪とが、がつしりと組み合つてゐる風景は圖の如しです。四個の近代橋に往來する都會人と自動車のジャズ。その片側には鬼貫と來山と阿彌陀池の立石、おまけに柳の間から見える向ひ側には三階建の白壁作り、間口は何間か角店に斜の紙が張られてある。義太夫節や近松の世話物——橋盡しや何とかの玉子酒



云々の感覚が出て来る。江戸の清元や端唄の風景はこんなにもめげもせず近代風物の中に立ちこらへてはゐられません。様式が新時代に成るだけで將來も大阪の性根からは同じ傾向、質の新藝術が湧いて来るやうな気がする。

さてその晩、ホテルへ歸つて寝ますと

二

BBOO、ぶうぶうぶう、B、B、BBOO！

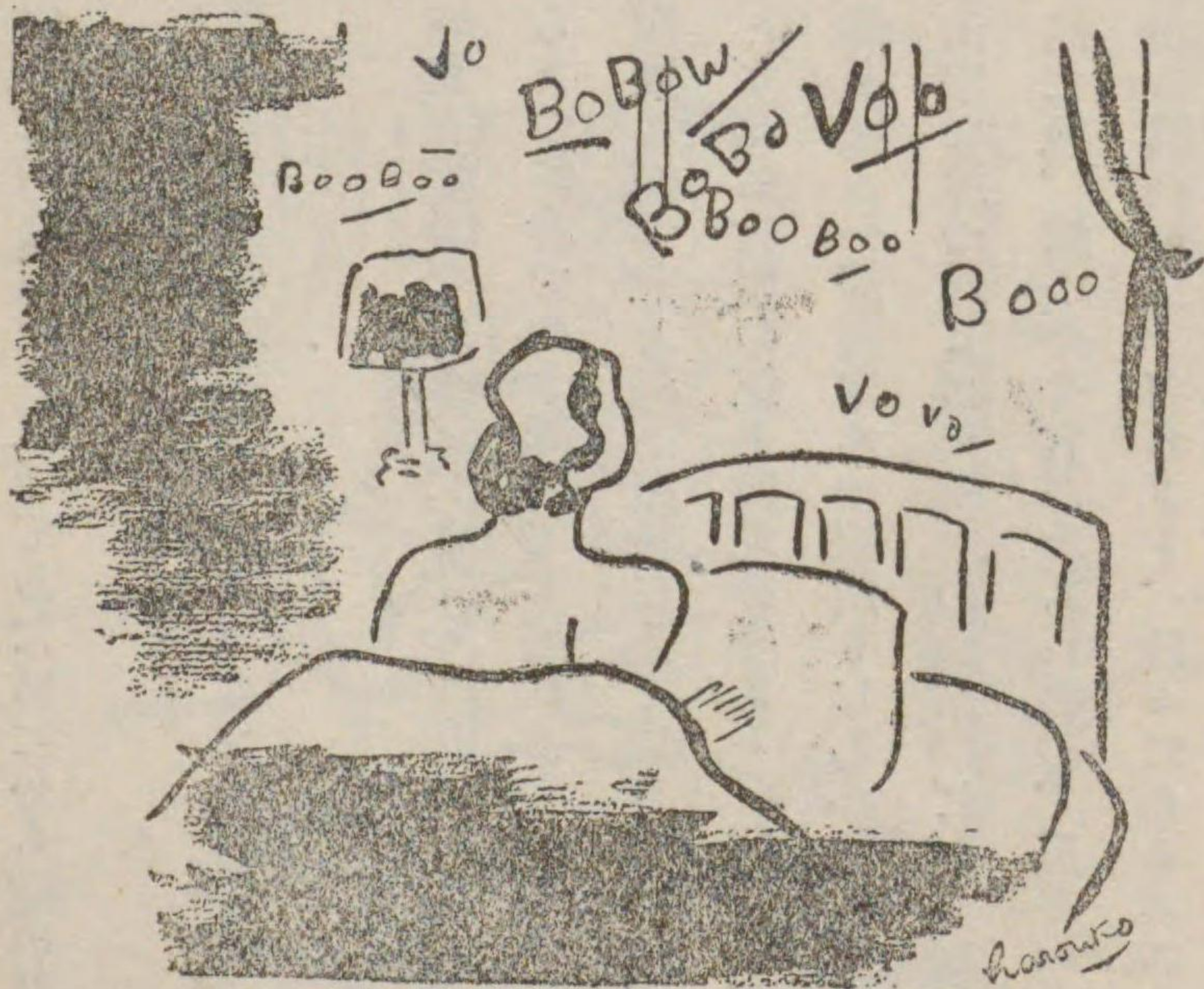
一秒時間に、原稿紙全面へ數百のBとOの字を書いて埋めて形容しても未だ足りない位のBOOが六階の寢室のガラス戸なんぞは物ともせず侵入して来て、昔ながらの現攻めだ。一秒時ではだから晝夜間斷なく走つてゐる大阪市の平面全體から、吠え上る騒音は思ひも掛けなかつた大阪市の恐怖だつた。自動車の笛の色音がさまさまの變化があるならこれもジャズ——ガソリン三人ボウイといふ映畫を見た人は黙うなづんでせうが——あれならまだいゝが、大部分が四シリンドアの安價物で何萬臺ともほとんど似たりよつたりの單調なる警笛は、しかも一回でよささうなところをヒステリー患者でもあるやうに必ず三回も連続させる。困つた方の大阪特異情

景だ。これを三日間聴いてゐたら私の聴覺は微妙な音楽を聞き分ける力を失つてしまふかもしれない。夜が明けたら直ぐ市か府か監督官廳へ出掛けて「曲り角に限り一回だけ鳴らすべし、無用の吹鳴は嚴罰にしろ」とでも請願しようかと思つたほどだ。

そこで翌朝圓タクへ乗つた時、早速その閉口を述べてせめてこの車だけブウブウをやらぬやうに頼むと運転手の返事は誠にほがらかにエコノミックだつた。
「ちいと五月蠅うるまおまんが、そのかはりガンリンはすつと儉約できまんのや」

*

堺の水族館は有名ださうだ。モナコや伊太利ナポリの水族館を見て日本は何故に太平洋



のふちにある大國の癖に素敵な水族館の一つもないとは情けないと思つてゐた私だから他の見物は止めても大喜びで早速出掛ける事にした。

内海の魚介は豊富だし、海の水は充分に利用出来るし、さぞ立派なコレクションが有ることだらう。

居る居る。大きな鯛も居るし、大龜も大穴子も海老も鰹も平目も砂にもぐつて居る。磯巾着も章魚もオコゼも等々々、がこれは魚の刑務所ならまだ終身で生き延びても居れようがもつと悪い。通水がひどい。一番の大きな窓には大物は遠海魚も浅海魚も混茶混茶ごちやごちやに全く動けないほどに收容されて魚の留置場の風景だ、岩蔭へ寝ようとすれば大蟹の缺と海老の手あり、薄い砂の布團にはすでに平目もぐり込み、上には大鯛が遊ぎ明るい清麗な水の場所もなし小魚の死骸は浮いて居る、神経を休めるほの暗い谷間もなし宇宙に迷つたヒステリーの魚達、だから鰹に突かれた鯛は獨眼龍となり、鼻のすりむけて血の出た魚、鰭の半分食ひ取られたの、尻尾のない魚等々どうも不びんな魚共だ。まさに現代社會相の諷刺畫だ。有名さと、辻々にあるポストに對してでも甚だ悪い設備である。子供達の科學、自然、發明藝術等の尊い萌芽のために、また大人にしる完全な水族館は大事な暗示と參考資料なのだから——を一日も早くお作りなさい。

い。今でも繁昌して居るのだからエコノミスト氏の立場からもよりもうかる仕事だ。やり方はどうぞ昆虫學におけるアンリ・ファブル式にして頂き度いものだ。

たしかモナコでは水槽で三十年來楽しく活潑に游泳して居る黒鯛の群もあつたし、岩へ引きついて鎌首を上げて敵を狙ふ海鰻の村落、大足を擴げて樂々と晝寝する大章魚連、甚だ自然なポーズでふざけてゐる小魚、それを捕へようとする海老、水面の鏡に自分を見とれる奇麗な紅い魚等々、思ひ出してもあゝ日本の子供も水族館の魚達もまだ恵まれないことだ。ところが翌日の夕食に魚の豊富さに江戸つ子が感心したことは。



一人で歩いたのではさすがに悪車夫に詐されないだけの違ひで、ブリユウガイドやベデツカアのやうに事細微に説明してある案内書のないことだから、江戸つ子も大阪へ來ると、とうとう東京上野驛で荷物を抱へてうろつく東北の山奥の娘さんとわれながら大差はないやうだ。故に昨日鰻谷の舟料理のやうな少々けつたいなところへ飛び込んだりして食道樂の大阪を知る由もない。そこでわが讀者からも異議のないほどの先祖傳來の大阪生え抜きといふ人に本當の大阪らしい甘味い物の案内をお頼みした。それに近ごろ東京は大阪料理に完全に征服されて純粹の江戸前といふものは殆ど亡んでしまつてゐて半大阪風はめづらしくないから並々の上方料理でないところをと注文を出した。しかして十分享樂し得たのですが大層本當の意味の贅澤でシツクな献立で三軒の店を廻つて夕飯を完成したのだが全計締めて五十八錢也!!たゞしデザートだけは別であるが、これが私の分の支拂金額だつた何店へ行つたかは讀者はこの挿畫で譯るでせう。しるやの二杯の汁の美味はパリ第一流の料理人のポタアジユにおとらず。

次ぎに訪ねたのが鮎何とかいつた家の生きた車海老の鮎の味、輕くて風味高く鮎は東京に限ると思ひ込んでゐるわが在所の友人達に「ところが左様ぢやなかつた」といはなければならぬ。その上しると絶味の鮎の代は上記の如し大阪人は本當にしあはせだ、すくなくとも味覺の

發達した人には、さてそれで北へ戻つてデザートを取れば讀者よ前日にひきかへてなんと申々粹な夕食でせう。

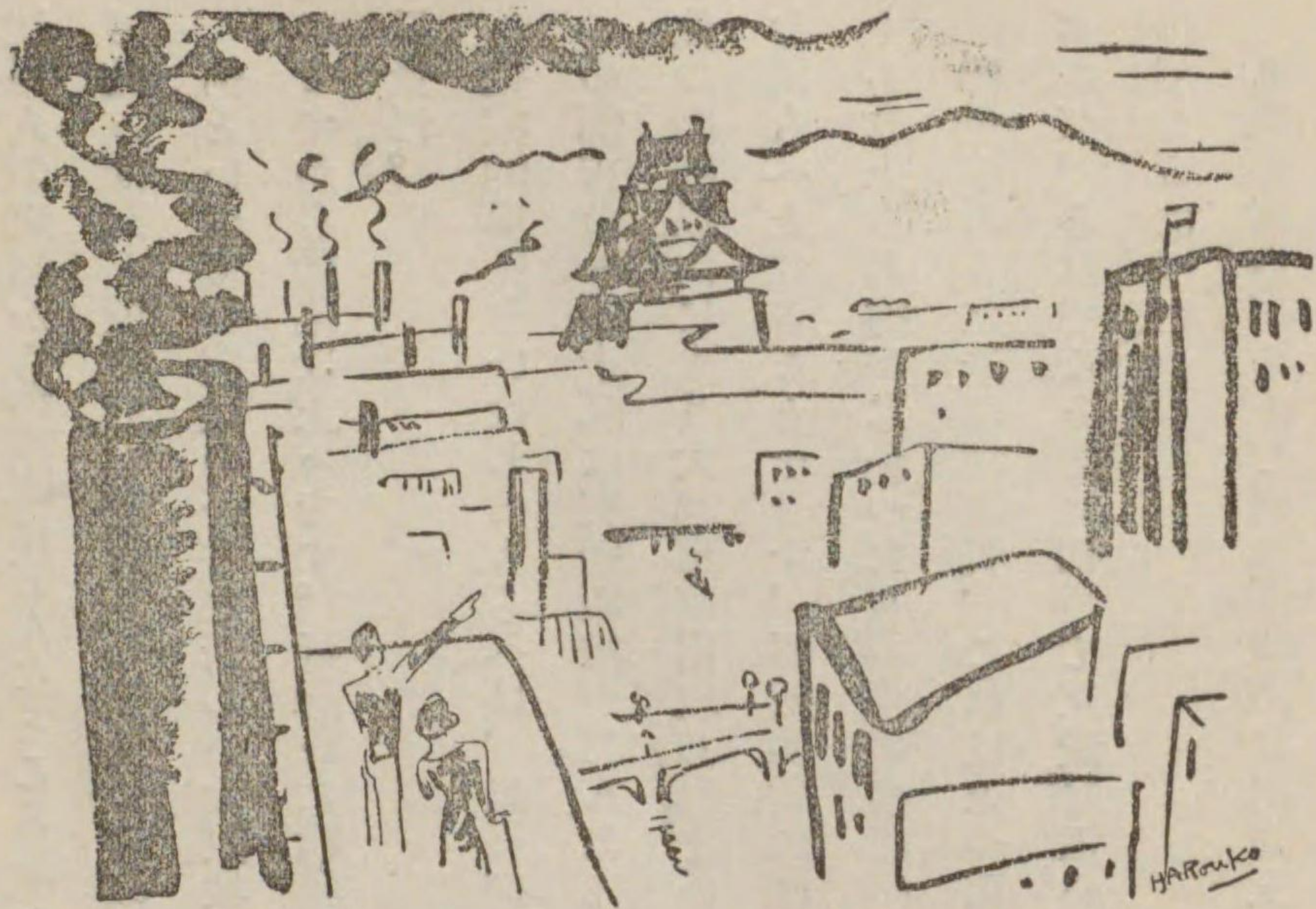
*

かうして表面計りの見物では大阪の社會相がわからない、澤山ある橋の袂に身投もゐず、折悪しく自動車悪漢の記事もなし、不景氣で新緑の憂鬱、東京は毎日心中と自殺の記事をかゝさない、だが大阪の人はわれ等より樂天家かなオフテュミスト?凱旋兵士で景氣が好きさうで、それに歐洲からロシアを廻つて來た眼には大不況といふぐらゐでは追つかないといふくらゐの世相の今日なのに、日本ではまだ東京でも大阪でもキモノの慘たんたる人が不思議にも少ない。若い娘達など安くとも新物でなか／＼身ギレイなことである。

都市計畫で街上は何所も新装だし、僅かにホテルの部屋の壁が塗りかへを怠つてゐるのであるほどもうからないのかななどと考へるほど悠長な旅行者は誠にあかん眼識である。すると一
夕犬齋橋の根元で。

未だ舊大阪の名残りの方に小さいながらも行人をひき止める味がある。一夕犬齋橋を過ると青空に紺屋の白い布瀧の掛つた足場、遠景には飛行機が飛んで、川の中には老人が體を濡らして活計のひる取りをやつてゐる。釣りだと風流も交りげだがひるでは生活資料よりほかに詩はない。果敢ない此の畫趣^{モテイ}に佇ずんでみると、珍らしや大阪到着以來初めての不景氣のシムボルムペンさんが定石の位置——橋のたもとに程よくしゃがんでいた。

見たところルンペン相當の榮養も充分の皮膚で然し『ルムペン乞食までに徹定するのもこれまた餘程の努力が要るよ』とはある仕事好きの某氏のいつたことだが實際この哲人も然り。年寄りさへ飯の種を泥の中からでも探したくなるのに彼は只にやりやりとして此のおのの商賣仕事にみんな没頭している大大阪の眞ん中に、この女もほかんと紺屋の干場に見取れているようでは精神的に多少お仲間とでも思つてくれたかおもむろに私に話し掛けようとして來たから元來貧民窟やルムペンの慰問などには誠に不向きの私で他に方法はなかつた、逃げだした。他國人親密感表示もルンペンからではあんまりどうも愉快でもなかつた。ひとついちはん高



級でにぎやかだといふ堺筋とやらへいつて眼直しに新大阪美人にでも出逢はうか。

清方先生が初めて關西へ來られて『大阪の女こそ流々^{ゆるゆると}綿々^{めんめん}と愚痴も相談もし結局相當の分別がありながらに心中となりさうな』と觀察せられたがそれは舊大阪の女の戀愛、カフェエは東京風——心理的に、だし一般女性は小説家のより少ない此の都會だから美も特色も性格も想像するだけで未發表だ。矢張り偉大な小説家が大阪から生れて女のも男のも鋭い心性描寫を提出してくれるまでは結局他國人には綴り合せの觀察しか持ち得ない。

*

東京へ歸つて我々のように智的雜種でない純粹

江戸人の老嫗から『大阪はどんなところかへ』と聞かれて此所がお城でこつちに澤山ビルがあつて此方は瓦と煙突でと畫解きして見せたのが此の素描です。

何といつても遠望の一番は新しい大阪城、煤煙に薄霞む淀川の上へぼつかり白い天守が浮ぶのですから効果は上々です。近附いた建築の形その他は少々俗ですが、毎朝毎夕飽きなかつた風景だ。

畫家的屬望をいはしてもらへば、以後何世紀に亘つて東京と對立して嚴存する日本の唯だ二つの都市の一つ——私は交通距離がだんだんスピーデーが出るにつけ縮まるから、東京大阪上海位の間隔以内にもう大都市は出現し得まいと思ふので、一をお手軽に忙いで中途はんばな都市を造らへ上げることをせず、要所要所には風土の特色を發揮した大建設物をゆつくり研究し盡くした上——名案がなかつたら將來の名建築家を待つ位にした都市建設をやつて欲しいと思ふ。

特色のある立派な都市美、これは上つ面の市人の見得じやない、後世への市民の才智のシムボルだ。それでこそまた初めて立派な恒心と愛都心のある市民や大理想を持つた大事業家が生れてくるはずだ。

名物の河や川のまだ新都市情調は出來上らないし舊調は漸く壊れつつあるして目下河川の特

色が大そう薄い。水都をも一度生かして楽しみたいものだ。また道路が良くなると自然人間が下を向かずに眞直または上を仰いで歩くようになる。そこを缺乏してゐるのが大きな樹木の並木に大噴水、下に見る水ばかりでなく炎熱の都だ、アスファルト道が完成すればなほ苦しくなるから清涼の大噴水が辻々に欲しい。ただしけちな噴水はいけない、夏日炎熱四十度以上の都、羅馬の特色はあの立派な廣場や辻々の噴水だ。それから路上に綺麗な草花を道路課は東京市に先んじてたくさん植ゑて下さい。若い女の服装でもないと途上色彩がまことに乏しいですよ。それ等に更に加ふるに中の島や大阪城の公園あたりにセーヌ河畔の様な大木の森蔭が出來て市民が深緑のすず風にいこへる事を想像したら我が大阪市民よせめて孫子のためにでも今から早速用意しておやり下さい。

食べるは樂し

初夏大いに食欲をもよほし、窓邊の筍を見付けては直ぐに掘つてうでん事を考へ、山椒の新芽には汁椀をおもひ出し路をくらひ苺畑をのぞき今年の枇杷はどの位實つたかと梢をふりあふぎ、柿をみては秋穫の甘味に涎がただよふ。幼い果實の桃梅に毛蟲のたむろするのを見るに至つては匪賊に出逢つた討伐軍のごとくに直ちに殲滅を志して竹ぼうきに火を付けるといふように大都會の一隅、畑の借地の類歩の庭にでさへ私は食べ物の空想と現實のたのしみをかく感じるのであります。

食べる樂しみ、會食の快談、まことに之れは私の人生の最も樂しみの一つで、古風なお行儀おとなしく黙つて行儀よく食べるに早めし早何とか——それで我國胃弱に胃くわいようが多いのですぞ——は一番の苦が手で、私は折々よく嬉しさうにゆつくり饒舌りしやべり食べて、いつか只一人とり残されてゐる我が身を會食の際に發見する事がしばしばでありまするがデザ

トの水菓子が口中でまだ動いて居る中に、もう生温なまぬるの香りのひくいコーヒーがやつてきてミルクを入れるか——牛乳入りとはさりととは野暮の骨頂を其の返事を樂しく饒舌つてゐる耳邊うるさく催促されるのは誠にゆとりのない、いぢらしい食事ぶりではある。

其の食卓のたのしみとは、よくぬぐつた膳やテーブルでも悪くはないが、時下新緑のもとでは眞白な布を掛けた食卓によくみがいた金具とコップはなほ結構、無論取り合せの悪い御馳走なんぞはいくつも要らないのだ。時に應じた一つ二つの皿でいゝのだ。フランスの詩や小説には羨ましいようないみじい食卓が時々出てくる。

歌ひながらに戀人は庭の垣根の果ものと、白きパン牛の乳とを準のへ置きて
いざや寄りそひて座らんとわが身のほとりに進みきぬ(珊瑚集)

これだけだつて中々わるくはない。又『千一夜』アラビヤナイトの中では到る所うまさうなアラビヤ料理の皿がまたすすしげな甘さうな匂ひ入りの湯上りの飲み水が、自分で興に乗つて新バタを付け新麥

粉をまぶして魚を焙く明君アル・ラシツド王なんぞが出てくるのでいちのきたない私の愛讀書になつてゐるのであります。

また快談會食のたのしみの方は巴里の下宿屋にゐたころには時々ひつばつて來て一諸に食べる同胞や友達の外には人間ひとりで食べる時には雀、猫、犬も仲間だつた。人馴れのした巴里の動物共は、雀は食堂の窓邊へすらりと並んで佛蘭西パンのうまさと私のむしり具合をちゆつちゆつちゆつちゆく私に饒舌つて聞かせ、波斯猫は鳥の骨の愛好者、狗は珈琲の砂糖の入れ加減の批評家であと口の舐め廻し具合で表現してみせたものです。

さて歸國して私が發見したる新日本の珍味には森の苺があるそれは森林や高山で見付かるまあ蛇いちごみたいな苺だが、佛蘭西ではこれのクリームを添へたのは今の季節の一番しやれたデザートだちよつと野生の香りに好き嫌ひがあるが味はひが細かく深くつて之れを食べると畑の苺は水つほいばかりで先づ養魚池の魚の味とたとへ度くなるくらゐ、私は富士山の吉田口五六合目で見付けて採つて來て裾野の宿で牛乳と砂糖で楽しんでゐると、先日亡くなつた母がつくづくとそれを見て、我が子を犬猫と間違へて

『まあ蛇いちご迄食べるとは、お前は意地がきたないから食べ物で騙されるねえ』

體は國の手形也

たしかにRとLとを聞き違へずBとVとを微妙にしやべり別けるのは我々日本人の滑らかな舌と耳とでは中々骨が折れる事であるやうに、西洋人にはまた極東人を日本か支那かその他かと直ぐ見分けるのも中々むづかしい事らしい。

それでもヨーロッパの人間共のうちではかんの好いフランス人やイタリヤ人にはかへつて我々お仲間同士でさへ故國でない各種いれ混みの歐洲で突然出くわすと、ちいつと色が淺黒すぎたり頬骨が出つ張り過ぎたりしてゐると、こりや印度支那か安南シヤムでもあらうかと聲をかけるのを一寸控へさうなタイプまでを、日本系と支那系などは無論一目ではつきりとゆきすりに見分けてのける、驛夫や無學の物賣り婆があるのには古くから外國人なれして居るとはいへ流石天才はだで藝術家の血の羅典人種のいゝかんだと感心する事がある。

さうかと思へば社交の客間なんぞで周圍の會話から押しても大抵當りの付きさうなものを、

頓馬な識別をやつて主人役をはらはらひやりとさせて、間違へられた此方の腹の中でも『このうすのろめ』といひ度くなる紳士もあるし、大體にアングロサクソン系は味覺における場合とひとしく感覺が甚だおぞましい。そこでそれを又悪用の一手には都合の悪い事や宜しからぬ振舞をする時した時には國籍をお互に近所の似た顔の國へ持つて行つて國名をばづかしめぬといふ悪智慧も出てくるわけだ。

*

さて然し日本人の旅行券の人相書といふものはどうにも表現方法が甚だ簡單により書きやうがなく變化のある特徴の書き込みやうもない。向ふの人間ならまづ眼の色、髪の色はだの色合ひから高い鼻にも著るしい特徴があり中でも眼玉の紅彩は變裝の場合でも一番こればかりは作爲の方法がないといふから大事な旅行券には書き込みだ。殊に青眼玉の變化は面白くイギリスだねの灰白色のしらじらと小意地の悪く冷めたいのも、また鮮やかに濃藍の眼が興奮したり驚喜したりして藍から黄金に變化してきら／＼輝く面白さ等は到底いつでも黒眼か茶眼かかへやうもない日本人の眼玉では如何とも唯これ圓くするか大きくするより表現の手段がない。

旅行券を見せてもらはないでも、人もしパリの繁華なカフェーか盛り場のイスへ陣取つてゐるさへすれば餘程かんの悪い人間でない限り世界中の人間が一と通りはそろつていつでももうろしてゐるパリの事だからぢきに人別を覚え込まれる事だけは妙であるまづざつと北歐中歐南ラテンには昔方々から侵入したモンゴル、フィン、アラブ、黒(ノワール)の血も混つて多彩多様南米からは俗に「アルジャンタン」のうまし男、北米はドイツ種イタリー種の立派ですご味のギヤングの親分、英國渡りの場末のヤンキー、北國の色白で圓顔團子つ鼻のロシア人、其中へ交つて我が日の本は櫻の國で血色鮮かに美はしいといひたい所だけれど残念乍らあちらで見ると顔色がどうも明るく來ない。古來胃袋へどつさりお米ばかり詰め込みすぎた胃腸病か運動不足かくわい虫の虫かはにかみ屋のふさぎの虫か、たしかに代々世々の消化不良と新陳代謝の宜しからぬ點、私はつくづく何度となくパリの街頭コーヒーをすゝりながら日本へ歸つたら食餌改善とくわい虫退治の宣傳の手傳ひだけは必ずしようと考えたものである。

*

體こそいつはりのない國の手形なりけりだが、つくづく我が同胞の特色、向ふの人間に日本

人の特徴として手取り早く覚え込まれる然も残念ながら威張れない方の特色は顔色の外にまだある。體の均整もまづい。諸君よ怒るな我々日本女性の永遠の對照、憂さも喜びもまかせる人になつてもらふ大事なる君達なればこそ、感じた所を話して早く改善してもらはうと思ふのでまた我々母親になる側でも共にこの點を努力しようとするればこそその苦言ではあります。

まづ肩が下つて肉がない、いけないのが手が小さいこと、體に釣り合ふ男らしい手首を袖口からだしてゐる男は日本では労働者ばかりだ。あとの男性と來たら何も彼もの用事はみんなこのかよわいひ弱い直に疲れてヒステリ氣味になる女房にばかりさせて家へ歸れば懐ろ手の大旦那どの、女房もひ弱い癖に亭主を神様と間違へて奉仕ばかりしたる事何世紀間も續いたものだから男の手が滑稽な程ひよりの優さ形になつたのが九分九厘までとは男女共に恥しき事で慨歎に堪へない。殊に若い息子達で女の手の様な細つこい指の持ち主には諸嬢よ、ゆめ戀したら不幸ですぞ。

或時私はドイツを旅行して汽車の窓を開けようとしたが萬事が驚くべき程がつしりどつしりとしたドイツ國の汽車の事だから、西洋では十四五歳の體にしか通用しない私の腕では動かばこそ、丁度乗り合せた日本人は我が同胞としては中々相當な體格の立派な紳士だつたが立上つ

て來て開けて呉れようとしたが残念ながらこれも押せどもうなれども汗を流しても漸く少しがた付く許り、到頭見兼ねて最後に手を出したのがドイツの中年老——彼手をかける、みると忽ち苦もなくすうつと開いた時には氣だけは負けぬ我々日本人、同胞紳士はいきなり吃驚するやうな大きな日本語で、

『男つぷりが下りましたなあ！』

もつともそのドイツ老の手も足も片つ方づつが厚さも大きさも私の手の四つ振り、日本男の倍以上は正にあつた。

*

同じ大男でもついこの間、省線電車で見かけたのは西洋の大男にも負けない大振の男がつり皮につかまつて居るのを仔細に觀察したが拳闘の人かお相撲さんか彼氏自らは甚だ體格得意らしくしてゐるが、全體の均整が取れてゐない、殊にやつぱり手と足が貧弱だつた。足はその大男をさへる巨きな根のやうに立派にがつしりした足で欲しいのに西洋なら女ぐらゐしかないと手の骨全體がけち臭い。顔もいけなかつたこれだけ立派な肉體の表門の顔がしまりが足らず、

心の窓なる眼の球が、愚かしくつては、これでは何のための大男ぞやで、だから古來『總身に
智恵がまはり兼ね』などといふ型ばかりが日本の大男に多いのは感心しない。心身共に壯大だ
から人種の偉大性もあり他を憎伏しゆうふくさせる力もあるのだ。我等伴りよの日本男性諸君、これから
アジアの兄貴や親分となり泰西を向ふにまはす氣組だからには體力々々まづ體力、意力に釣り
合ふ體力養成をどうぞしつかり頼みます。

また私はよくシネマのニウースでその國の兵隊や學生や少年少女の行進する足どりや足音を
聞いてその活力と精神力を計つたりする。日本の兵隊さんや學生の歩きぶりを善隣の東洋諸民
と比べれば無論はるかにかばかばかと勇ましく見えるけれど、更にもつともつとテンポを大
きくさつさうとかつばかつばとリズムがつよくはつきりと然も軽く足を揚げたい。まだまだ少
し足の裏に飯つぶの残りが粘ねばるのか歐米のそれに比べると大分にまたるこしい、歩き振りも心
身の表れの一つ也青年よもつと明朗に力づよく大またに歩き給へ。

レビウへ行つても折々は少々焦れつたくむづがゆい。足のあげ下しに何分の一秒かづつテン
ポが息がゆるみ勝ちなのが氣になる。のぼす手、揚げる足おろす足。踊る少女達はあれでもせい
一ぱいのつもりであらうが、まだく指導者の棒のたたきやう、號令のかけやうは何秒かつめ

る必要を認め、もつと強い息吹をかけてやれば少女達の足はもう一と息かるくもう一段びよつ
と高く持ち上る事受け合ひ、つまりは窮極する所、總じめになる人間の神経のテンポの如何が
全部へ表はれるわけなのだが昔流の八分目主義が一番いけない何でも十分十二分にふだんに訓
練しておけば何時か十分が八分目位にやさしくなり十二分の最大限もやすやすと飛躍できると
いふわけなのだ。考ふる所どうも腹八分目主義は國力發揚の機會に際會した今日はあまり信奉
するのはよしあしである。かくして、ひと息奮張つて、我々の無字の手形の體格を諸君よひと
つ斷然改良する必要があります。



鏡が少なすぎる

寓話ではありません、ほんとうに何所にも彼所にも鏡が少なすぎるやうです。入口にも廊下にも客間にも、隨所にもつと澤山、程よく周りと調和させて鏡が掛けられてほしいと思ひます。

日本の若い女の人達が美しいけれども古風と不便とを痛感する着物をおもひ切つて、新しい服装を自分にびつたりさせなくてはならなくなりつゝある現在、如何に美と調和の想像創作力を澤山持つ天才者でも、全身を映し考察することなしに、全體の釣り合ひと調和とが要素であるヨーロッパ風の服装を身にふさはしく合はせることは出来ないはずで。

十分に鏡に映してながめてそれで何だかおかしいといふ所なくなつた時がその人の本當に適した服装が出来上つた時です。服装は視覚から來る場合の表情に次ぐその人の品性個性の計量器ですから文明人である限り、清淨優美な處女、或る事物に徹した偉い人物の風格も、美と

魅力が命の媚女も、又は何かの主義を奉じて自らを空しくしてゐる宗教的な人達でも、めい々がその新しい、古い、貧しい、質素な、贅澤な、様々の服装、つまり、好みを云々する場合でも、そんなものゝ一見無關心のやうな場合でも、色、形、時には着方だけの場合でも、その時は服装といふよりその人々の空^{アトモスフェア}氣ですが、性格、氣品、頭腦が判るので深淺多少は必ず自然に顧慮されてゐるのです。

そこで鏡は偉れた學者達の机上大政治家の室内、藝術家の工房に必ず必需品として歐洲では見出されます。もしこれ等の人達にその必要か否かを訪ねたら、學者は自分自身の内面の考察に、政治家はさまざまの感情を整理する必要のある場合に、藝術家は思ひも付かない面白い観かたや、構圖や構想を發見するためにそれゝその必要を解説するでせう。この場合鏡は助手、助言者偉れた友人です。

一般のだれかれにも、オフィスのでも住居用のでもアパルトマンの入口の門番の脇の壁には餘程貧しい家でない限り、大鏡、幾人かの全身を一度に映すことの出来るのが必ず備へてあるのが常例のフランス邊は大邊具合がいゝのです。それから家庭の内部にもまた公開の場所には劇場その他十分に鏡があるのは無論のことですから人は往きなりに自分の姿を一寸品評し、安

心し、整へられます。中でも異彩なのはパリのオペラ座の横町の小劇場エドワード七世座がオ
ーケストラ席の横一面が鏡でした。丁度東棧敷にあたる場所全部が。これはすこし過剰すぎま
すけれども、日本の我々はコンパクトの小さい鏡の中や胸までしか映らない手洗ひの鏡とばか
りの交渉では女の人達が顔、首、せいぜい胸あたりまでの配慮です。だから顔だけ首だけ綺麗
であとが拙いか平凡の若い人達がまだ多い。嫌な媚態のはあるが、氣品と美をもつすばらしい
腰と足の風趣は甚だ稀です。

また日本の種々な部類の制服ユニフォームが歐洲で時々ひどく向ふのと並んで見劣りがするのを着て
る自身で氣の付く人も随分あらうと思ひます。今後制定されるものゝある場合などもつと澤山
形、配色に微妙な考慮が必要です、おしやれや浮華などといつては困ります。文明人の心理で
なく餘りに好みに對する神経がまだ未開です。西人等はその配合の微妙な關心の出来る頭腦こ
そ藝術、科學、政治あらゆる微妙で精密な計畫コンピュレーションの出来る人種として認識するのですから。

『女性畫家から現畫壇へ』といふ課題

こういふおつろしい課題を美の國の石川さんが先日朱葉會の展觀の時に會員の間へ持ち込
まれた。丁度私は事務所になかつた日で此の月は私の雜文かせぎがあちこちにあつたので他
の以前からの會員諸姉が四五人書かれる事にきまつてゐたのだが、淑女で慎しみの深い會員諸
姉にこれは實の所罪の深い主題だ。

所で締切もとづくに過ぎた今朝A女史から誰も書かないし催足はしきりなり。饒舌駄文の私
に何とか宜しく一人で背負つて石川さんへ顔を立てゝ呉れといふ二枚續きのハガキが到着、今
日は朝から前借なしやら繪具かせぎの雜文畫稿計五つといふレコードを出したあとだが、思ふ
に石川さんや係りの記者のふんがい女つてものはなんぞといふ會話が編輯室で出てゐる事は正
に受けあひ、そんな想像構圖を描いてみるといはれゝば直ぐにも描き現はせる程に私にもその
憤慨振りとお氣の毒さが身にしみる。無口の揃つた朱葉會へ引つぱり込まれたのが：犯人小寺

菊子さんだが、さういへば女史でもせめて何か面白いものを書けばいいのに、まづは生來のお饒舌の因果とここにあきらめて書き出したる拙文一章、燕雜の罪は我にはあらず他人にあり。さて女の展覽會では一番賣り込んだ、蕎麥ではないがきれずに十六回とはよくも長く續いてきて毎年女畫家のタマゴを澤山作り上野の各展への入選者の前身地となつてゐる有意義らしき此の會でさへ前記の次第、女性畫家にまだ現畫壇に對して何の注文がつけられますか。まづかくいふ我が身をかへり見て、一同もつと萬事畫ばかりぢやない、あらゆる事にしつかりよく勉強せよと申すの外なき次第であります。

國展の鑑査で、それつきりしか未だ私は人の畫を多く見別けないが女の畫が出てくると直ぐわかる。畫は作者の心身を偽りなく、識者にわからせらせるものだから、「脆弱」^{フラジール}なのは當り前だといはれて了へば其れ迄、弱ばかりぢやないこれならいと自分自身が承知が出来る程に、自分の畫を熟視研究批評もしてゐないし——描き込み、繪具と手ばかりの事ぢやない——が全體に全然不足だ。もつともなまけ男にもよくこんなちよるつか仕事のやつつけ仕事をすると思ふのもあるけれどそんなのは始めから問題にならない最下レベルだ。男は飯を食ひ身を立てる生命の一大關心事だから兎も角何せよ一生懸命だが女でそんなつもりの方は仲々ないし

下手にやつて老嬢やヒステリ女ばかりふえても困るしさとて好いた人でもあれば飯も炊いてやりたし子供もできるし其の上たとへ時間がぼつちりけ出せようともそんな事で本當の畫の描けようわけもなし、そんなにしてまで老嬢畫家がふえるには、無論及ばない事で、仲々よくよくの事では畫題をつかみ己れを知り力を程よくコントロールして充分畫道に生かし得る等といふ事は富くじ^{とみ}の様な運命の落ちこぼれか、思つても大變な事だらけで、ああ實に藝術とは難かしく大變なもの、人間の永久的な大仕事のひとつなのだからいつそかへつて何にも考へないで好きな物を描いて、すこし畫がわかつて多少趣味が深くなるあたりの方がいいのかも知れない。

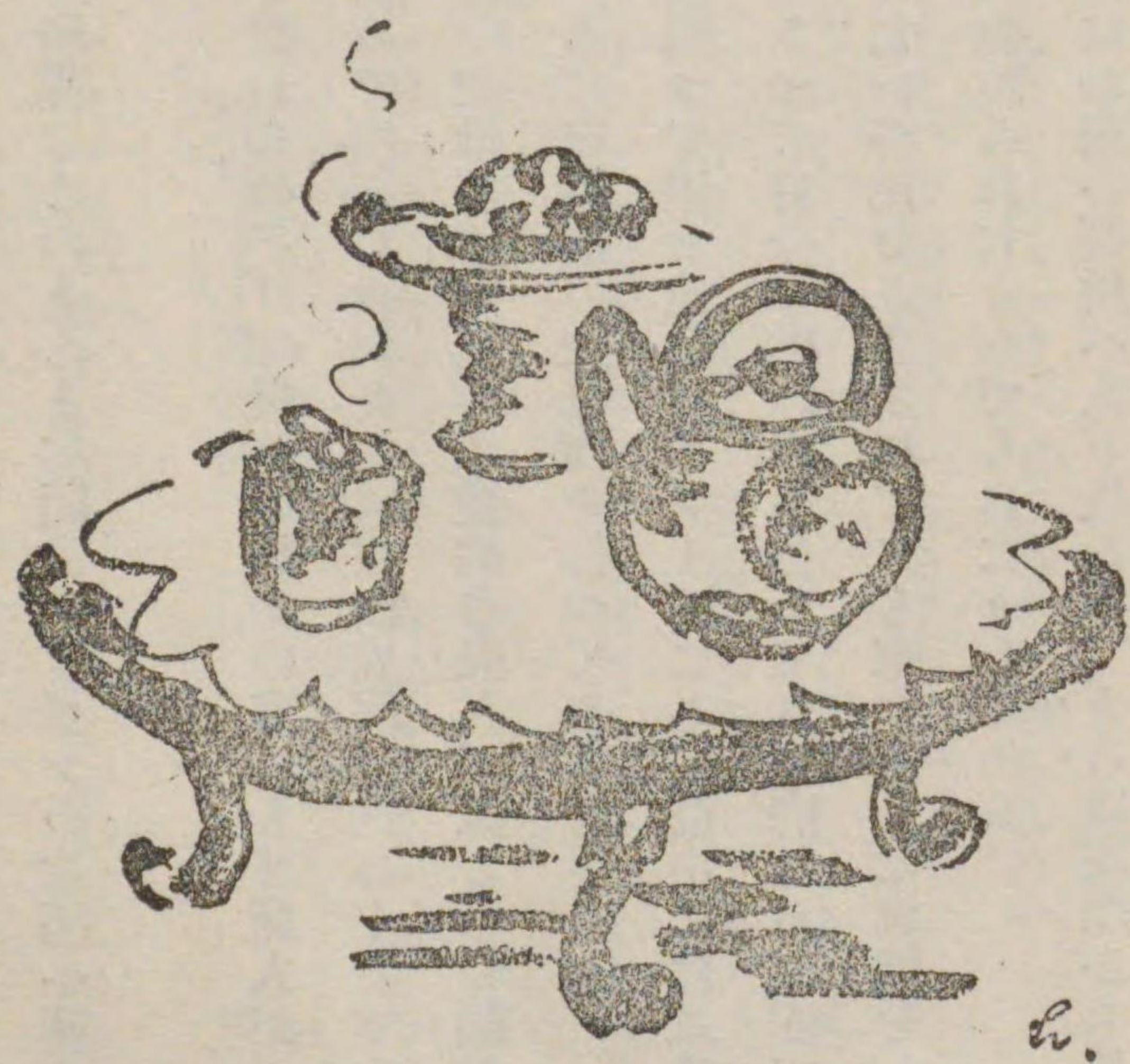
と、こういつて了へば同性の諸嬢に對し、實も蓋もない事乍ら、少くも此の位おどろかして覺悟をしつかりして貰はなくつては困るからだが男の進む所婦隨は人類發達上これも必然、文化が華を咲かせれば女性藝術も引つばられて案じるに及ばずこれもちやんと前進する、中には多少パーセンテージは少くとも普通の男より筋のいいのも相當出るし相當面白いのが無からう筈はなく、まづ其の邊りより以上にはしやちほこ立ちをいたして見ても天才者以外には割り出せる算術にあらずだ。だから日本文化絢爛期^{けんらん}の始まらうとする現代以後、必ずや男十人か百人

かに女一人二人はすこしは見られる畫描きも生れてもこんだが、考ふる所、今でも多少しつか
りした仲間の女流畫家からは現畫壇に對する注文不平を私もきかされる事なきにしもあらずで
あるが、先づ繪も八丁に頭も八丁おしのきく女性畫家が澤山でさへすればいやでも位置も向上
するし、正直な所何か役に立てば人もたてゝ呉れるし、認められようし、どつちかといへは洋
和各展女性畫家數が少ないので何かとハンディキャップで現在は相當好遇の様にさへ思へもし
てゐるのである。

春興饒舌録

郊外

扉をあければ百花繚亂、青い外套細引眉毛
クロコデイルの高足の華しやかな靴、さては
郊外といふ所であつさりと毛皮なしの散步^{ボエシ}
廣えり外套にまづ眼をうばはれ向ひの側には
和装は薄色の何とか織のつつましやかな若年
増の夫人達、お嬢さんか奥さんか見別けのつ
かぬ美人達、中でも一番ばつと眼につくのは
頃日伊太利亞がへりのプリマドンナのHN女
史で、黄と赤黒の三彩縞ちりめんの帽子と共
の細えり卷、ナポリ^{イネロ}黄の薄毛の上下で指や



手首から金剛石がびか／＼と輝く所、げにもミラノの歌ひ姫トスカナ風の此のたわや女は小作りにして、人形の如く人魚のごとく妖しく綺麗でこのまんま客間のデイヴンの片隅へ飾っておきたい位。

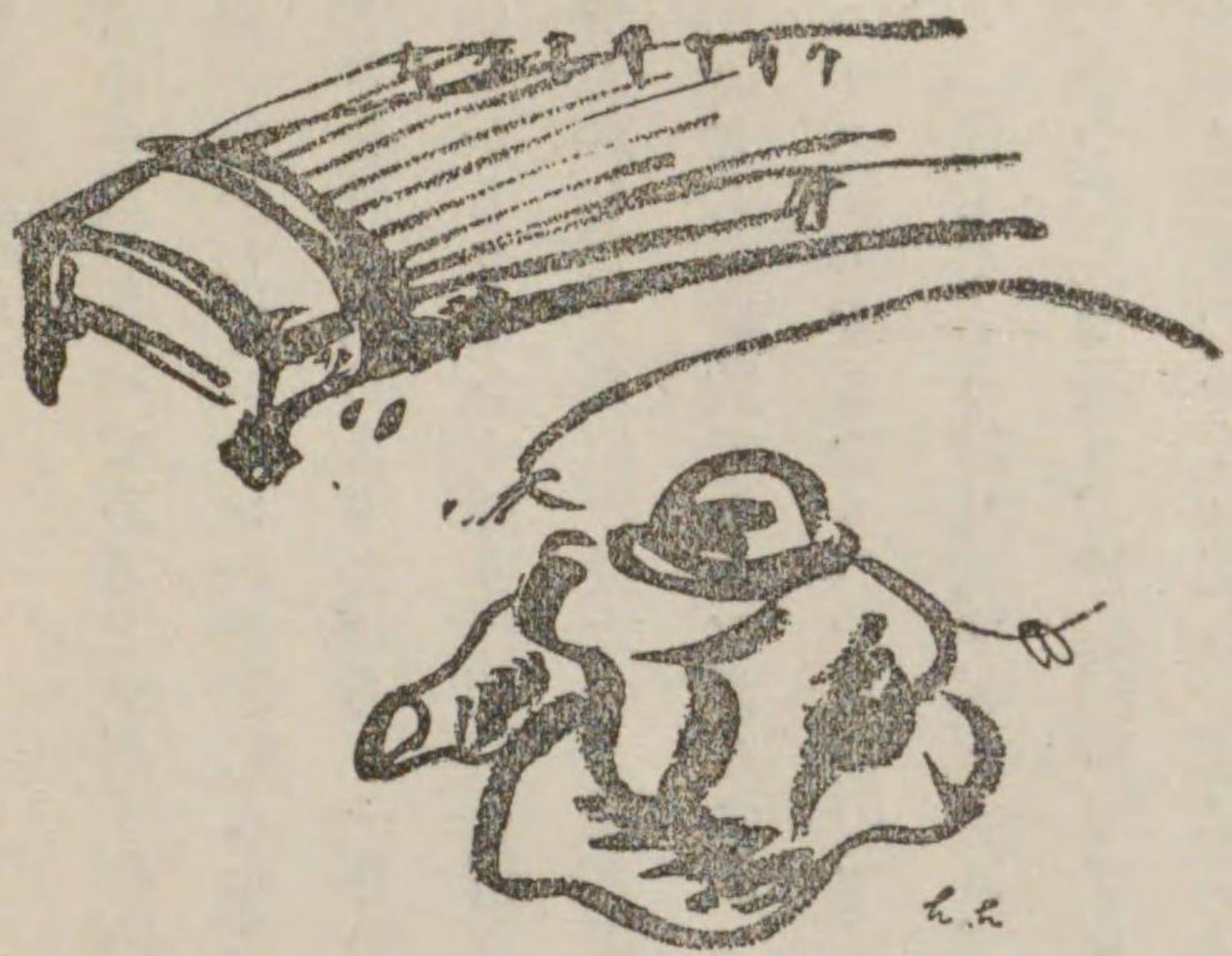
今日は春立つてまだ十幾日の雑木林と麥畑を窓からのぞけば暖かい赭土の庭にも又麗人が一人、日本の誇りの大作家S某氏に物の憂ひを初めて知らしめた人とは成程成程、色あくまで白く眼眉は朗らかにしてつゝましくうつ向き勝ちの聖母型は帝展のA畫伯令夫人、似よつた顔付きの愛の果實、二つ三つに取りかこまれてそゞろに復興期の聖母面を作つてゐる。

サロンの方では今日は名工T氏の今年の初窯開きで淑女達をパリケードにして眞中には皿や壺が一ぱい、陶器共は千度の熱火をT氏に燃やさせて自分も熱い思ひをしてきた癖にあくまで情ない美人のやうに白々として、清らかな冷めたい谷川でさらされてゞも來たやうな肌艶をして一座の男性女性の白い手赤い手汚い手までに詠められたりなでられたりしてゐる。

すでに藝術鑑賞心から食欲に墜ちた我が一味はお隣の臺所へ入り込んで、とろ、鐵花巻ひら貝のたぐひを物すごい速度で口腹へ收めながら折々は生がを摘む事も忘れもせずまたどういふ口の端の方に間隙があるものか女三人寄ればこれは致し方もなき大饒舌で、隣室に壺を楽しむ清

雅の人々の眉毛はさぞやし／＼かまつて居る事疑ひもなし。

中でも自然色の散歩外套の君は婦人雑誌界の第一の寵兒女流大衆作家のYN女史、オレンヂの白粉のしやれた好み。



『Yさんそんなにかせいで貯めて如何するの』

『あら嫌だ、赤檜満枝ぢやあるまいし』

『いや、かせいどいて下さいよ、江戸つ子のS女史や私なぞじや貯りつこなし、直木氏に菊池さんのやうな友達があるやうに私もひとつあなたに葬ひでも出してもらはうかしら』

プリマドンナの君の聲はまた世にも甘く美しく――

郊外——丸の内

HN女史の聲は世にもあまく可愛らしくそれを聞いて居ると伊太利亞の海邊の別荘の窓で戀歌のやりとり

をして居るやう。

『この平貝を食べてゐるとナポリの海岸で馬
刀貝をむかしてレモンの汁をたらして食べた
うまさを思ひ出しますよ。あゝ一月か二月で
もいゝからソレント邊りの別荘を借りて情人
とでも暮したら人生の最大の幸福と贅澤ねえ』

『出来たら一週間でもよござんすよ』

『ニース邊りでもいゝぢやないの』

『あの邊ぢやもう紋切型すぎますよ、すこし
通にやつて矢つ張り、伊太利亞でソレントか
シンリイ邊りのかくれ住みと來なくちや』

『やれやれ私は矢つ張り大衆作家かな』

『伊太利亞へ行くとどこでもかしこでも手當

りまかせに男が女と見れば誘惑する。もちやもちやいふ、上つすべりで大袈裟な身振り手振り



でをかしいが、男振りは安つばいながらみんな良い芝居のやうに實に手に入つたもんだわね、

日本の男性の無愛想なる事男々しき事は天下無類だ』

『あなたが來るとすぐ話題がそんな所に来るよ』

男性よ非常時近づける時節柄こんな事ばかり饒舌る有閑女とばし思ひ給ふな、この三女いざ
となれば唱をもつて或はジャアナリスティクに國難の場合には國民の勇氣をちつとは振ひ立
たせる事にも多少の自信ある輩でもあります。

さてこの賑はしき一群は、よくよく煎じ詰めれば騒々しいのは歸する所私一人であつたが作
家Y女史の自動車に乗せてもらつて、あとにはさぞかし靜謐にはつとした事であらうと想像し
ながら雑木林に赭土みち飴色の朝鮮牛からやがてアスファルト道となり郊外電車の終點街の賑
やかさとなりお壕となり松と柳にビル街となり都心となる。

まづ堀ばたの百貨店に圓タクを停めしめ化粧を直し身をとゝのへ靴の赭土泥をふき取つて紅
茶一杯に舌を調へ、更に新らしくしやべる用意をする。

二八荒れ月

「何とか様にはおよびもないが、せめて成りたや殿様に」といふクラスの、日本で指折りの大地主の支配人をやつてゐる知人がある。

その人が或る地所を見に行つた所が、どうしても彼の智識から割り出して一たん洪水に襲はれるとふいになつてしまふ地勢に思はれるのだが、その土地は山地ですつと高い場所で、ちよつと常識で推してはさうとは見えなかつた。だから案内した村長や村の古老達はそんな馬鹿な事は首と釣りかへにしても絶対にない、この年まで何十年間一度もなかつたのだと保證をするのでさすがの彼も段々と古老の経験の前には自説をひるがへさうかと餘ほど思つたさうだが、それちやあ最後に兎も角村中で一番の年寄りを見てくれと八九十の爺さんを漸く探し出した。果してその老爺だけが洪水の場合にはこの地所は水がかぶつて石つころの不毛の地に還ることを覚えてゐたさうだ。その支配人はまだ年よりでもないが、年が年中、廣い管理地の

どこかに洪水干ばつ雪崩に地くづれ山くづれで五風十雨と地勢のことでは苦勞しぬいてゐる人である。

こんな人にはおよびもないが、だが、女のくせに私もしかも洪水のことなどは新聞で讀む以外一番無關心の市中の眞んに女の子に生れて來たのだが、生來の好奇癖を神様が哀れんだのか、洪水出水の経験、つなみに、たい風禍までざつと味はつてその上例の震災に火事もまたちよつとやられたことがあり、これで五難、いまに圓山應舉先生の向うをはつて七難七福の晝巻が描けるかも知れない。

しかし、建築好きであつた両親がそんな天災のたびごとに背負ひ込む損害や経験を従つてこの小娘は覚えてゐて、今でも家を造つたり、新しい土地をいぢる時には折々生兵法の注文を私より無知な若い職人などに出すことができる。だから時には先輩や知人が天災の大小をちよつとも慮ばからずに無造作に住居だのまた無理な山の中や海のふちへ危なつかしい別荘を建てるのを見ると、やれあぶないなと心秘かに心配をすることが時々ある。

昔から二八は荒れ月、八月に水が出ると必ず大事に至る。九月になれば風は本物になるけれど洪水は決して大したことはないといふ。ところがもう久しいこと我々關東地方には大洪水も

ないし東京市へ海瀟もやつて来ない。市内の海瀟などといつても、廿年間と一ヶ所に住み續ける家族は珍らしいといはれる東京市中の事だから東京の盛り場でこゝは少し低いから危いですよといったところでへえさうですかね位のところがせいぜいだが、大そう苦勞性の私はもう廿年も前になつた大水や海瀟の味をしみじみとまだ忘れ兼ねてゐて、今でも七八月の候に、ちよつと一週間十日も霖雨がつゞいて、その降りつづりがざあと来ては小止みになつて、またざあと来る雨量の多い場合には、あゝまた水が出るのかこの降り尻が、たい風から海瀟になつてまた初めての連中が多勢ひどい目に逢ふのかなあなんぞと年々歳々お婆さんのような入りもせぬ取り越し苦勞をする癖がついてゐる。

飢饉なんぞもさうらしいが洪水が出だすと大抵二三年目とか四五年うちとかにつゞいてよく来るものらしい。そんな度々の洪水後の修繕費に人知れず苦勞した母を子供ごころに案じたのが後年の苦勞性の因を成すのだが、母は子供達の學費のためにその時分H温泉の早川べりで温泉旅館を經營してゐてくれたのであつた。

その温泉部落の橋の角に昔は雲助でいろんな面白い話の種を澤山もつてゐる盲目の團子屋の爺さんがあつた。夏休みで来る東京の子供達に石臼をころがしながら、毎日毎日子供の本には

出てこない實在の狐狸にへびまむしや猪の事件、それから洪水のはなし、大きなあの立派な温泉宿が流れてお客が二階で手を合せながらどンドン流されていつてしまつたなどといふ子供心には怖ろしい悲しい話までしてくれた。

しかしその川は御承知通りの今もその時分も大昔も兩岸の山々のためにせばめられた細い溪谷で如何してあの大きな旅館が丸ごと入るか知らんと私には不思議でならなかつた。

さてある八月の初め霖雨が降り出した。終日びしよびしよ降つては一日に何回か篠を突くような土砂降りが来る。遠くの嶺はもう幾日も見えないが近くの山々も、窓のつい鼻先きの崖の上の木さへ白く煙つて見えなくなるほどに雲がひくく下りてきて、土砂ぶりが来るとありとあらゆる傾斜には大小の瀧が無數に現出して壯觀だ。

それが四五日も續いてうんだ浴客にも子供達にも谷川の増水するのがだんだん怖はくなつて来てみんな欄干から天ばかり仰いで見るのだが、ちよつとの雲の斷れ間さへも出来てくれないのである。溪川の勢ひはどんどん強くなり疾くなつてきて、川の中の大きな石もかくれてしまふし、あつちの何とか岩やこつちの大岩まで姿を消してしまふ時分には川の中の大きな大きな石共がみんなごとんごとんところがり出して流れて行く地響がお腹の底へおそろしくひびいて

来る。

山の水は大河の出水のようにとうとうと氾濫して行くのとは違つて、氣早でせつかちで疾つてゆく水が、ほんのちよつとばかり石垣でも道路でもの一角をくづしたら直ぐにはつと思ふ間に、一と息に高い崖の上から下までが、一度にがらくらくと石も木も家も人も一と呑みに水の中へたゞき込まれて、悪魔の踊りのように狂つて行く濁流が、それをたつた一べんだけ反対の向ひ岸の崖か岩へみぢんにたゞき附けて、あとは一瀉千里物の影をみせない。せまい山と山との間を水が押し割りもみ上がり暴ばれる水の真中は炎のようにもり上がり燃え上つて疾風はやてのように飛んでいつてしまふ。

盲目の團子屋のお爺さんはかういふ場合に立至ると一番の司令官と指揮官だ。若い者には前後の處置さきの豫測、すこしも判断が下せない。必死になつてくづれさうな石垣や急所急所へながしを掛ける。竹とか丸太とかを綱でしばつて流して打つかる水の勢ひを弱めるのだ。

まづぐらくくしてゐた老朽の橋が一つ流失する。一つ初まるとその流材で下流の橋は順々に新も舊もぶちこはされて流れ出す。もう一軒並びの川沿ひの家はみんな危険だ。

浴客と子供が二階の欄干へ並んで見てゐると、あつといふ間に向ひの旅館の立派な浴室が川の中へ身を投げてしまつた。續いて直ぐまた地續きの洋館の大座敷をクリスマススの塔菓子を巨鬼が食べるように一とくちにぱくりと谷川が飲み込んでしまつた。さうしてその痕は根こそぎ、建つてゐた高い土地までが消え失せちまつて、知らない人にはあとでいくら説明しても受け取れさうもないほどに完全な溪谷になつてしまつてゐるのである。

向うがくづれれば今度はこつち側の番、くねつた谷は急流の曲線が増大してくるから平時は水勢の當らない場所も、もう安全な地點ではなくなつてしまつてゐるのだ。部落の橋は二つとも落ちて連絡は三分されてしまつた。

浴客はもう混乱状態、各人まちまちに性格を露骨にさらけ出し初める。大抵の人が一度は必ず不安と恐怖と災難を帳場のせいのように怒り出し恨み出すものだ。この人がと思ふやうな大分別の紳士がうるたへ出す、あとで氣恥かしいような個人主義を發揮する、まづ愚痴を並べない人はかういふ場合には實に少い。男はさすがだが使用人の女達も自分のことばかり考へはじめて一所へ固まつてしまふ。雨は益々やまない。電燈はつかない。

夕暗の薄暗い川向ふのせまい山道を先刻半分流失した宿の客達がぬれそぼれて避難してゆく浴衣姿が見える。こつちでも安全な土地をあれこれと考へ出して浴客や女中達を山くづれの道

を難澁しながらもともかくみんな逃がしてしまつた。その晩はまったく獨立無援の離れ島の大
きな暗い家の中にとらんと母と私と四五人の男だけが一と晩中暗やみの水量を提灯でかざしか
ざし見に行つては怖はい夜を明した。廣い臺所へ行くと先刻まで満員だつたお客のための御馳
走や飯櫃が出来上つて一めんにもそのまゝに並んでゐた。

私達は正面座敷が流れ出したらすぐ家を逃げ出して前の山へよちのぼる事に決めた、がその
前の崖も水を含みすぎて今にも山崩れがしさうになつてゐるのである。玄關であぐらで元氣づ
けにちびりちびりやつてゐる仕事師の若い衆は綱を胴へ幾重にもしつかり巻きつけてゐる。い
ざとなつたら幼い私を背負て流れても土につぶされても引つぱり出せる用意をしてゐた。もう
家の前後もくづれ初めたのである。

戀ひこがれたお天道様は漸くその翌日の午後顔を出して、水もどん／＼治まり初めると往
き所のない浴客達も戻つてきたが、今度はまづ土砂で埋まつた飲料水道と温泉の修繕、忽ちお
米の缺乏、手が届きさうな向う岸とこつち岸でも水の音で大音聲でも通じない。そこへ向う側
では射的大弓店の亭主が立ち現れて遠矢を一と矢、こつちの崖にさゝつた。矢尻には綱がつい
てゐる。それをまたこつちの浴衣の強弓先生が射返してやつと二條の糸の連絡から電線ロープ

にかはつて米俵が渡つて来る、鳥獸の切肉がぶら下つてくる。材木が縛られて渡つてきて、漸
く半分流れた橋の端へぶら／＼の釣り橋がかゝつた。

夕方頭の上の山でがや／＼する、まさか猿でもあるまいと思つてゐると人間がよち下りて
来た、川上の温泉の人達が橋はみんな流れてしまつたので、嶺づたひに杣も通らないばら道
をお米の工面にやつてきたのだつた。

こんな事件が東京から二、三時間のH温泉の入口の町で起る等とはおとぎ話じみるが、つゞ
いてその翌々年だかの出水には團子やの爺さんが話した通りの事件がまた何十年めで再現され
たのである。そして水に飽きた人達や土地を流した人達は段々立ち退いてしまひ、今またそこ
を通つて見ると同じように河原に石を積みあげて土地をこしらへて家が建ち、また人間は次の
災難の來るのを知らずに待つてゐるらしい。

家傳藥

一

小せんは十七歳の花の盛りに一人で見も知らぬ江戸へ百里餘の道をやつてきた。

他國人にはいせつこじき、これを土地の人が讀むと「伊勢子しようじき」となるの

ださうで、家は代々のお庄屋の娘さんだから模範的伊勢風につましく仕込まれたのだらうに彼女なかなかの派手しやで田舎むすめなんどと思はれない爲めには道中も始終駕籠か何かの伊達の初旅を芝居きどりでやつて來たらしい。

雲助や馬子や立て場の下す男が



うしろびつくり
娘さん

『うしろびつくり、前うんざりい!!』

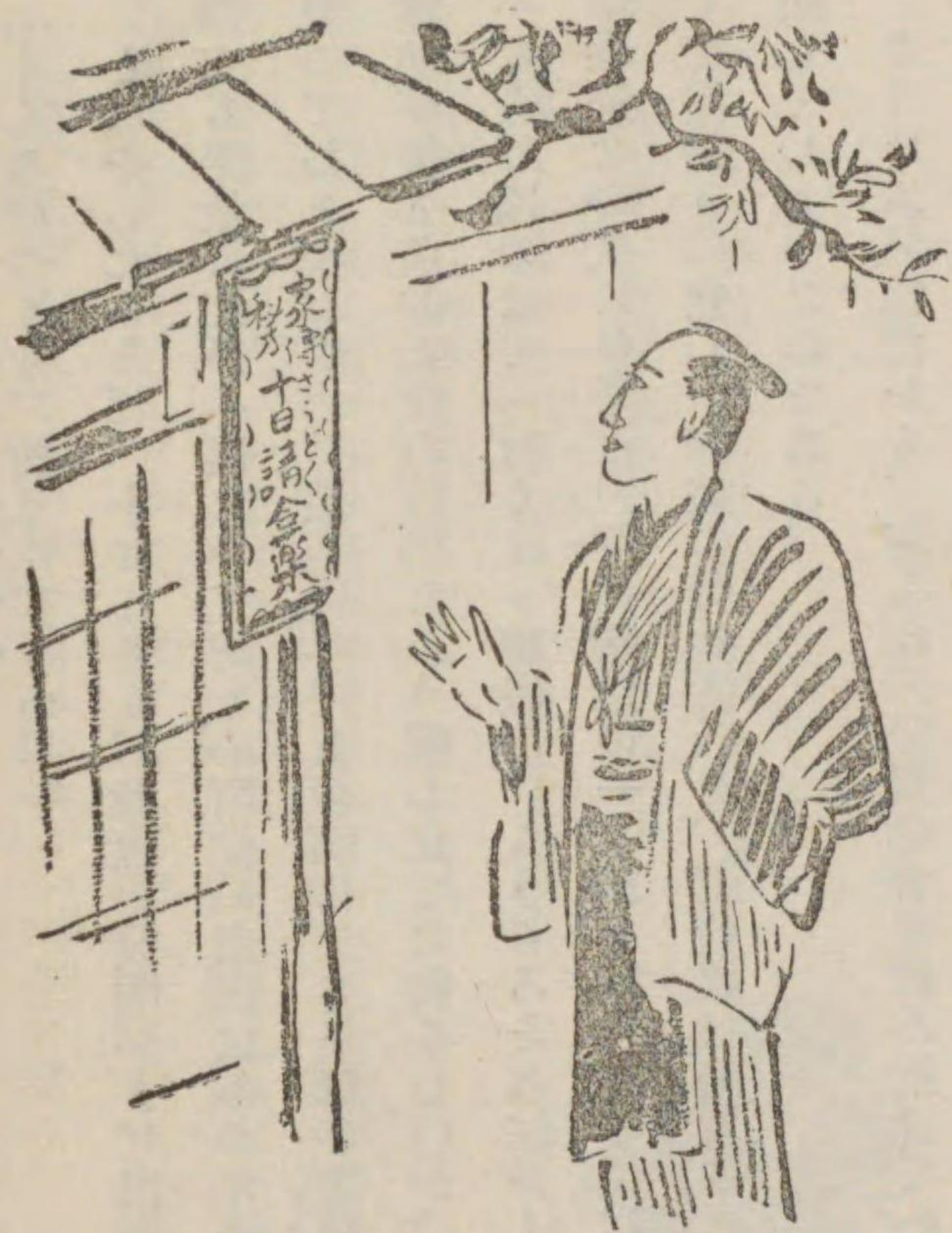
とはやしたさうだ。小せんさん、種痘の發明がまだ出來たか出來ぬ時代に生きた人だから、顔立ち器量は江戸へ出たつて何々小町位の自信はあつたのだが、可愛想に娘ざかりにはうそに思つてしまつたのだ。然し後年、人の話によると顔の痘痕きょうこんも大した事ではなく、つまり馬子や雲助が後と前の比較の誇張にかう囃し立てた物らしいが、これが動機か何か知るよしもないが今なら外國のはてへ行くより難儀な、もうそろそろ江戸——西京間の空氣が嶮しくなつて、道中物騒な時代に伊勢江戸間の新造の一人旅を敢行して、江戸でお店へ律氣に勤めてゐる音無しくて男振りの宜しい許嫁の芳兵衛氏を、都會娘に略取される事をおもんばかつて先手に彼を征服してしまつたのである。

さういふ氣性だから、忽ち江戸氣質を合せ飲み込んでいよいよ才氣煥發、世帯もちよく夫婦仲よく、然もかた氣の亭主を程よく驅使して新世帯の家運はりゆうりゆうとして、忽ち藏が立ち其の建てた土藏の縁の下には、時節柄の御用盜の目をしのお小判の壺がうづめられ——そのうづめ方も智略深謀で、まづ上側に一つの小壺に少量の黄金をいれておさめ、其下に本物をしつかりと埋けて近くの盜人までおもんばかるといつた具合である。

やがて同じく江戸へ下つて近所に大きく店を開いた彼女の兄の一人も御亭主殿も、こんな氣性の小せんには時にはやられ過ぎて少々閉口の氣味があつたらしい事も確に此れから話す事で後世のわれわれにも多少想像がつくのである。

二

或る年伊勢の國の本家から長兄がこうして江戸で榮えてゆく二軒を見舞ひ方々見物かたがたはるばるとやつて來て、兄妹兩家の大事の客人となつた。兄妹とも何しろ長兄が一世一代これを限りに何時逢へるとも知れない人のこと故、懐かしさにまさりおとりはなく歡待にけぢめのあらう筈がなかつた



が、やがて本家殿永々の滞留を厚く謝して伊勢へ歸る時がきた。

其時に——そこで此所へ一寸註を入れて、其時代は御承知通りの今から思へば想像もつかない封建の絶對男性獨裁時代、女は才物であらうと人にすぐれた分別ものであらうと田舎の庄屋さんや町人の兄貴にはけむたがられるばかりでわかりよう筈がない、只もう平凡な先入觀念尊重者達の事だから、まづ此の度の御禮の印しとして本家殿は祕かに江戸の兄の方だけへ子々孫々相傳の大事の家傳の名藥を『但し拙者江戸府内に限りて販賣致す可き事實證也』とでも云ふ一札を入れさせて祕法傳授をしたのである。

これを何所からとはなく耳に入れた小せん夫人、然しヒステリーを起してへんな顔付きで怒鳴り込んだり嫌味をいふような女ではない。一族一同最後まで機嫌よく本家の出立を高輪まで、名残りは惜しくもうすこし先きの品川の本宿までと、段々時もたつていよ／＼さらばと皆と一しよに涙をこぼし合つて見送り、そこで本家は荷持の男と東海道は鮫洲鈴ヶ森のかたへ、一同はもとの江戸の方へ戻つてくると小せん夫人ついでに私はお参りにまわりますからと皆と別れてたつた一人、何枚駕籠とやらいふ超スピードの早駕籠をふん發していづれかへ飛ばした。さて御本家さんは供男と二人づれで六郷の川も渡つて日も七つ下りになつた時分に漸く川崎

宿の入口へさしかゝると

『おやつ!!』

とたまげた。

三

江戸の別家の兄貴は薬も試製してみても具合もい
ので、いよいよ看板でも下げてそろそろ賣出しの準
備でもしようかなと或日店先で思案のきまつた煙管
をぼんとはたいて筒へ納めて腰にさし、ぶらりぶら
りとふところ手で出入りの指物師に看板の注文にゆ
く道すがら妹夫婦の住まふ横町の呉服御用達所と書
いた地味な門口を通りかかると

『家傳大祕方さう毒ばい毒〇日請合薬』とか何とか
いふ文句の並んだ金看板がびかびかと黒すんだしも



たや造りの格子先に光つてゐる。

兄さん氣も大きくもなかつたと見えて驚愕と激怒とに混乱して下駄も敷居口へつつかけ乍ら
奥へ飛び込むと妹小せんは泰然と長火鉢の前にかくあらん事を待つてゐた。

『兄さんお前さんは親や兄から資本と信用を澤山わけて貰つた大通りの立派な間口の大旦那、
わたしの亭主は年期から勤め上げた腕一本きりの新世帯、こつちへこそ國の兄さんはせめてお
金のつるを、残してくれるのが當り前でしょ。だから私しや川崎から連れ戻して私の方へも祕傳
をわけて貰ひましたよ。同じものだから賣れる賣れないは互方の骨の折り次第、看板の文
句だけはそれく違へて置けといつて本家は歸つて行きましたよ』

一子相傳は昔は藝事でも何でも二階へ上つて梯子をあげてしまつて傳へたものださうだ。小
せん女史國の兄貴をたれを下ろした駕籠で祕かにひつぱり戻して出來たての土藏の二階へかん
詰にしてとうとう製法を教はつてしまつたのである。

其の薬は大へんよくきく薬で江戸のたい廢期で蕩兒が多い時分だつたので随分擴まつて賣れ
たさうである。宣傳販賣の方法に至つてはふところ手の大家の兄さんと此の妹とでは意氣込み
が格段に違つたので一方は自然消滅をし、薬ばかりでなくしまひには店までさせてしまつたが、

片方は繁昌して明治の初期になつて賣藥法が制定される迄、小せん芳兵衛夫妻の大きな副財源となつてゐた。

後年樂るん居になつてから不用になつた此の丸藥製造のいろいろな小道具を取り出して見せては息子の嫁によく此の祕方入手ばなしを聞かせきかせて、そして其の嫁に製方を残して死んだ。嫁とは私の母でやり手の小せん女史は即ち父方のおばあさんの話である。こんな町人の女房にならずに運命が伊勢から京都の方へでも彼女を旅立たしてゐたらもつとスケールの大きい機智の話を残した人かも知れない。例の藥の祕傳なるものも私の兄妹のだれかが傳へられて知つてゐる筈である。

秋影鋪道ニ來ル

(一人)

赤外線寫眞でなくつても、斜めに此のきつい秋の西日がさし込んだら、面白い明暗線が現れいでて、古風な人ならあられもないと顔をしかめようし、男性はにやりにやりとしようし此の女史みづからも多少そこをねらつたこしらへだらうとばかりに言ふ勿れ、秋冷のうす



着はどこらへ兼ねる哀れ果敢ないものはないんですよ。

素肌へ着たなへた紹ちりめんは兎に角もよれてもしんなり體の線を出すところこれでも人絹ではござりませぬ。

手には甚だ手ずれたハンドバック、相當工夫をこらした眉毛の引きかた、素足には塗りの駒下駄、斷髪はごくさつぱりと刈つて後ろ向き時には子供かたまされたが、兵兒帶下を伊達巻きでキリリと胴へ締め上げた腰に風情が甚だ多いのでハテナとこつちを向いたらかくの如き街の修道者、一寸うらぶれもありこれ正に私の安つほき秋の感傷のサンボルではあります。

然したとへ其の兵兒帶は紹ちりめんに對するメリンスで汚點と穴とがあらうとも、着ものの色と調和を取つた所は多少心得があるが連れとの會話は隣席のキミ、ボク語の兩嬢のキビキビ語尾まで明快なのに比べると少しくねばつてもやもやしてそん色ありアタマの程度はどの邊やら、諸君よこれ市中どこいらの風俗と思ひますか場所は京橋——日本橋間、ひるちよつと過ぎのバスの中でありませぬ。

(風景)

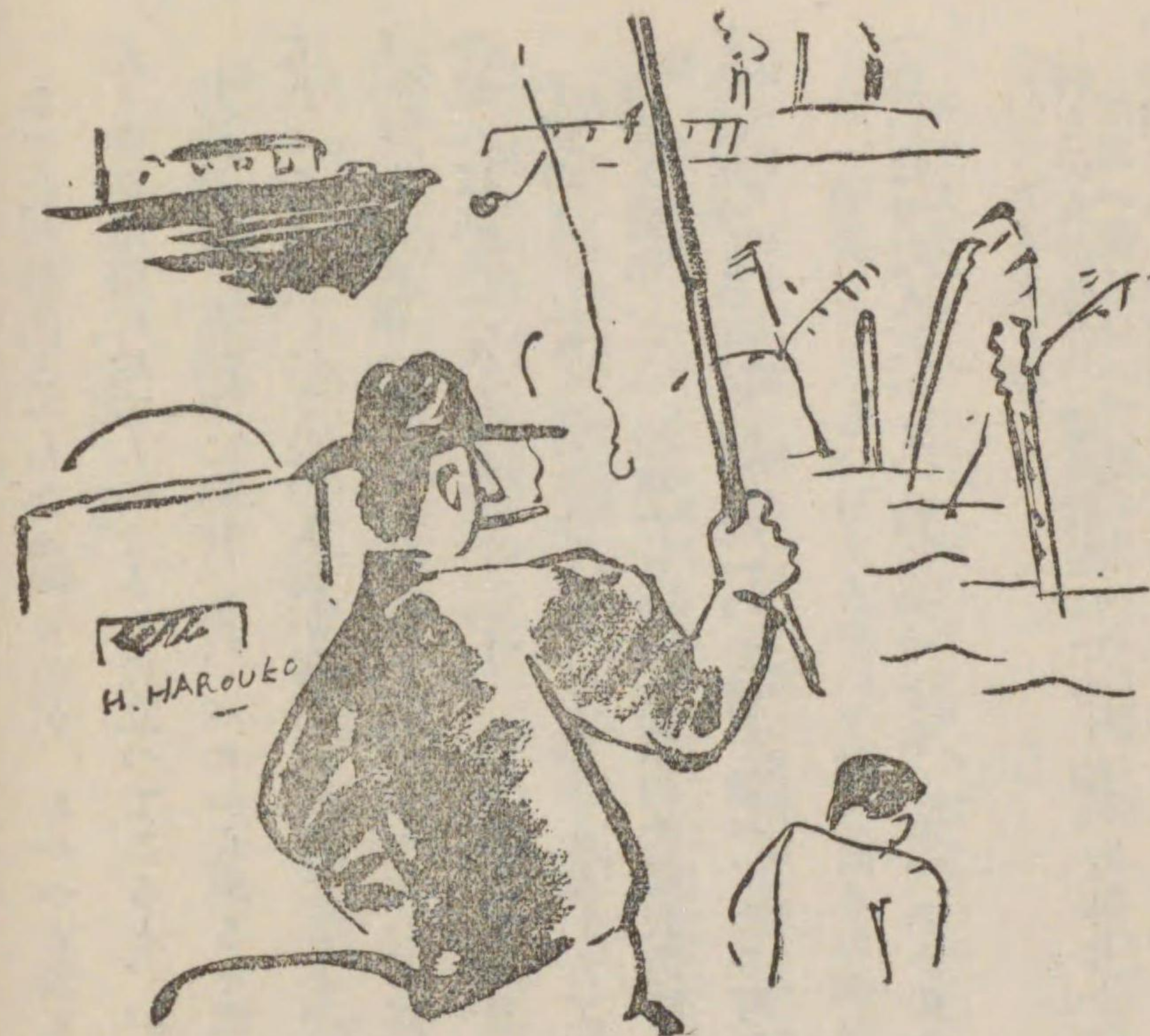
さて此の君達と一しよに降りたが、おやつと云ふ間に影が横町へ消えちまつた。そこでぼつんと安全地帯に地方人のごとくに立つてゐると、がたがたがた市電が来る。

片道切符、五錢玉に銅貨二枚、バスから來ると電車の運轉手と車掌さんのおヂイサンに感じられることよ、はて此の人達が當局發表によると平均收入一〇八圓かつて取れた人なのかな。ちつと以前赤電へ乗つて不愛想と不親切ハナハダ露骨で私は車臺からころがり落ち掛けて以來の思へば絶えて久しき市電だつた。今日は大分お手やはらかでよろしい。

子供のようにきよろきよろ窓から舗道を樂しんでるうちに、風景は都心からいつの間やら海邊と變化して、坦坦たる我が東京の大舗装道路は今やどぶんどぶんと打ちよせる品川灣の夕波の高汐と三尺の防波堤一つで肩を並べてゐる町だ。

「逢いはせなんだかよ、館山沖でよネ二本マストのよ、××丸よオ——」

何とか丸が昔昔、遠洋航海にいつて歸つて來なかつた哀話がこんな歌に残つてゐる商船學校が海側にある。其の航海用の今の練習船が白塗でさつぱりとした姿で浮いてゐる、今時めづら



しい帆前船なり。其の先き隣りが水産講習所、又其の先きは隅田川のデルタ、更はずつと先きの海のあなたの安房上總は芝居の助六のセリフが出来た時代と比して隅田川尻から見える事には今も變りはなし。とも一ついつまでも變らないのが川中の洲に立つてゐる川施餓鬼のそと婆と目じるしの笹つ葉。

何でこんな所へフラフラと私が来たかといふと、まだこんななコンクリートで武装されない震災前時代に毎日毎日、秋来れば堤上にだぼはぜを釣り——大人はセイゴやぼらを釣り——汐の加減で泳いでくるくらげをしやくひ、中秋の夜海瀟

に逢つては怪我をしたりして少女時代をすごした懐しの土地であつたのである。

其の釣りをしたり馳けつこをした我が庭先は今日は造船所の大バラツクの非常時軍需風景でがながんがん勇壯で幼年の感傷風景なんぞ木一本なくなつてきつぱりしてゐる。

デルタだつて前進して廿年前の新生の河口だつた此の邊も、もうすうつと先きの方へ又一つ木の橋が掛つて洲には防風林さへ出来て海は此所からとつくにアデュウしてゐる。道理で汐の香もしないし水も薄ぐろくなつたな、嫌らしく懐かしいあの舟蟲共がうちやうちや岸壁にはりついてゐる。これで一體今でも何か釣れるのかしら。

秋菜雜菜の味

何ともいへなく爽かに澄みきつた秋の天、空気はおいしい白葡萄酒の酒のやうにすうつと口中へ入つて氣持のいゝ味がして誰でもが郊外へ出かけていつて胸一ぱいに大氣をすひ込みたい氣になるのは、やがてその次ぎには太陽はあつてもないやうな鈍い光りとなり長い夜の雨濕季の冬を待たなくてはならない歐洲人全體の秋の日のねがひだ。

中でも天然、人、建築と三つが揃つて秋の趣の深いのはやつぱりフランス、休み日は競馬行か、遠近の眺めのいい場所の古城めぐりのドライブを、自動車へ家から食糧積み込みの氣のはらない家内總出行も悪くはないけれども、少し氣取つて美女友まじりのブルジョア氣分、散々調子のいい車でドライブのあとのほどあひの食慾を、また都合よく到る處でフランス人はうまい土地料理をゆきあたり食べさせてくれるから、郊外でもまた何處の名所でもゆきすりに一寸名の知れた小料理屋へ飛び込んで苑内のそろ／＼色のつきかけた木の下とか、綺麗な花壇

のふちの芝の上へ食卓を据ゑさせて竹籠へ盛つて出したフランスパン、小さい鐵たがの木樽形の德利へ入れた土地の銘酒、酒番にはわざと田舎風の赤い縞のチョッキなどを着せてゐるのが心にくいほどで、クーベルト（食布や食器代みたいなもので之によつて料理屋の格付がわかる）も一人前相當に取るだけに眞白な上等の卓布類、銀器コップが氣持がいゝのにさし向ふのはあつさり時に適つた身装をして會話の巧妙なフランスをんなとは、どうです思つてもなかなか悪くないでせう。

そこで先づこんな場合、料理は出先きの事なり今脂の乗つて來た野山の獲物にうまい野菜かなんぞで軽く食べたあとのデザートには如何しても時節柄乾酪がほしくなると、黒いタクシーDの上へ白い大前掛を掛けた鬚の太つた給仕が大きな廣ぶた盆の上へ大小とりどりくさぐさの乾酪を並べたのへナイフを添へて小脇から『へい、旦那』

その乾酪の中にパリ近在から出るプリーといふおよそ臭い物にきまつてゐる乾酪の中でも一際傑出して實際鼻もちの成らないへんな臭ひのするのがある。まづ見掛けといひ臭ひといひそつくり生糊のくされ掛つたやうなしろもので上皮は茶黄色にやゝ固まり中味の方はうす白糊のやうにまだべとつてゐる。

『濕氣が來ると匍ひ出すプリー』こんな歌があるくらゐ、つまり黴だらけで暑中にはバイキンが増えてうようよ動き出すかも知れない所をいつたものです。

あながち悪食意地きたなでなく、それがまたフランスパンへちよつとづつ付けて食べると何とも誠にうまくつてまづ乳製のねりうにとか鹽辛とでもいひたい。

と、も一つ同じく青黴だらけで更にうまい乾酪がある。有名なイタリヤ産のゴルゴンゾラ、これを下物にすれば天下の名酒ブルゴオニユの赤葡萄酒の古酒を更に一瓶口を開けるべしと古來相場がきまつてある位だ。

ゴルゴンゾラの方は前の半腐れ氏より持ちがいいので日本へも渡つて來る。これと殆ど同じ品か、あるひはもちつとうまいか、フランスのピレネエ山邊りで出來るロツクフォル、此の二者が歐洲乾酪界の横綱格らしいが有名なだけにパリですでに偽せ物が横行して、一寸した料理屋で、おや話で聞いたほど割にうまくないなんぞといふロツクフォル、ゴルゴンゾラはまづイミテーション、私も生産地で始めて本物のうまさを知つてひとつ買はうかしらと思つたら直径七八インチに厚さ一インチ半位が今の爲替なら八九十圓、乾酪一片に百金とは貧乏畫描き手が出せなかつたが、これを新鮮な極上バターと半々に交合せ合してパンへ付けたら正に天下の絶品、

歐洲へ出かけたなら是非試したまへです。但しこのチーズ生一本では強すぎてちつともうまくもなく通人は食べません。

乾酪の外に、パンをつい餘計に食べさしてしまふのはこれからうまい野鴨や鶯鳥やその他野の小鳥なんぞの肉や肝や臓物でこさへたパテ、鹽あぢの磨り味の肉でこれも素敵、トリユツフ(松露)入りのすりみ肉とはクリスマスのしやれた夜食の獻立には立役者の一つで、先づ生蠣に松露入りのパテ、七面鳥が出てシヤムパン酒ならば伊達大盡の一通りの御馳走で通るのである。但しこのすりみ肉は痛風にはごく毒で老人過食で年末年初うんうん唸るユウモアはよく小説なんぞに出てくる。

パテの中へ入るトリユツフといふ松露は眞黒で大きさも丁度炭團ぐらゐ、料理の中へちよつぱり入れてもわざ／＼トリユツフ入りと獻立書に斷りが付くくらゐ珍重されるもので、料理屋で生で自慢に置いてあつて其儘かじる人もある。うまいかまづいかは我つひに生を味はずです。

このほかからくちの前菜にはカピヤもよし、ロシヤ産の川魚のうす黒い細い卵は讀者御承知の通りだが、夜會とかお茶のサンドウキツチにカピヤ入りの黒パンが出たとなればこれ相當なもの、黒パンへ付け方が適度をすぎすと少し生臭い氣もする。それをロシヤ人にはせるとさ

すが贅澤な歐洲各國でもカビヤが高價いので甚だちびく／＼食べて吝くさいとわらふが、成程モスクワの外人向のホテルへ行つた時には驚くべくふんだんに出した、然し其かはり此食事一人前金百ルーブルでまた驚かされたが、但し變幻自在のルーブル貨のことだから邦貨金二百五十圓なら膽もつぶれるが、下つて實はたゞの十圓位か或はもつと安いものさといはれ／＼ば成ほどと思ふし數字はミステイクだがとも角、ロシア料理の前菜は一寸くせが強いが豊富でうまいものだった。

この度は生もの、生海膽、生牡蠣、生貝のあぢ、濱邊で漁師が賣つてゐる生うにをすゝるうまさ海岸の料亭で給仕が貝籠を海水から引き上げて剥き立てを貝の儘皿の上へ並べて持つて来る馬刀貝、あさりなんぞへレモンの汁を一、二滴したゝらすとまだ肉がうごめいてゐるのを小悪魔きどりでむさぼり食べると幾らでも食べられる。之には少しから、口のスキスカライン産の白葡萄酒がよく適ふ。ナポリ邊だと加ふるに背景がヴェスヴィオの噴煙で、小舟でギタのサンタルチアの歌が旅人の御機嫌を伺ひに足下へ漕ぎ寄せて來るといふ風情が添ふからこのうまかつた馬刀貝の追想は更に／＼印象的となつてしまふのである。

螺鈿のやうに銀灰色と薄紫の妖しく異しいほの光りが内側からもれる薄いやさしい、恰度生

れたばかりの柔かい鮑の貝を圓形にして二枚貝にしたやうな繊細きはまる品、これが貝のまゝ開かれて水々しく皿の上へ半ダースとか一ダースとか美しく並べられたのを、如何して我々には極東の故郷で岩や石垣や舟着き場の棒ぐひに食つ付いてゐるあのごつごつの鐵くそのやうな牡蠣の概念に思ひ合はさりよかです。流石彼方で生牡蠣生がきと大騒ぎするのはこないみじいやさしい牡蠣だったのでメニューにもそれぞれ海の出所、名どころが記き込まれてある位、食べれば實に舌ざはりよく磯の香も上品にほんのりとしたものだった。

然しまた日本の磯邊でお馴染の深いあの荒つばい磯の香のつよいごつごつの牡蠣も存在する但しそれは竹籠へ入つて街の辻の板の上へカンテラの燈で並べられ、近所のお内儀さん達が夕方皿を前掛の下へ入れて買ひに來るか仕事の歸りに立ちながら二つ、三つ食べて向ふ側の酒屋へかけ込む人の御ひるきの品だ。

例のかたつむりもシユンに成つてよくこれからは町角で見掛けるが、こればかりは有名な物だけれど向ふの人間でもこつちから行つた人間にも心からウマイといった人を私はたうとう聞かなかつた。まづ此所等がいまも忘れ兼ねるヨーロッパの秋の味はひの食べ物追懐、ほんのちよつと半可通なところ。

東京の一片

一、銀座の足の下

「椽の下の力持ち」なる古語はこれより地の下の力もちとかへるべし。

「此の邊が銀座の天國ですか、あつちが芝口の豆屋の下です」

地下鐵は鐵の脚柱をうんとふんばつし頭の上の新橋が保つやうにと橋の兩側の地べたの下でひとり相撲のふんばりをやつてる。

一メートルの厚さの壁からは新橋川のしぼれ水がちよろちよろ涎のやう、あんまりキレイなよだれにあらず、何所からかいやな臭ひがふうん、但し開通式の日(廿一日)には洗ひ流してポンプであげて川にもやふ肥料船のせるに臭氣を背負はしてしまつて置く由、新橋銀座八百メートル卷ゲートルに首つ玉へ手ぬぐひのかれ氏と、懷中電燈をふりふり枕木をまたぎまたぎ、高壓電流の通つてゐるレールをオツカナビツクリもぐらもち、今時分頭の上では友達の奴めが夏帽子

にみとれたり、美人にみとれたり、うまいコーヒーで夏晝のねむけを覺ましてゐるんだな、ち

えつた。

銀座の出口では、柱の

背が少し低すぎるから

「出羽ヶ岳が通る時にや

首をまげさせますか」

といふと、憤然とした

首玉手ぬぐひの監督さん

忽ち腹から卷尺を出して

「二メートル三〇センチ

ジャスト！」

のつぼうの諸君安心し

てくだり給へ。

ともかく俄雨空襲、炎



暑にはチカテツを用ひて大いに便にして妙なり。

二、郵便車を狙ふ

無心なる配達さん勘辨しろ、これは私がうけた命令だ。

つけるからには近頃人氣のた——ほら先日五十萬圓抜き取り氏によつてポピュラアになつたあの赤い錠のかゝる郵便手車にしようかな、と、

丸ビルの角で張り込んでゐるとも知るや知らずや、午前の正に十一時をすぐる五分也、ゴロゴロゴロと注文通りに中央郵便局御出門だ。まづ入つたのが郵船ビル、君は先づ蓋に突つかい棒をたて、古かばんを取り出し、一ぱい詰め込み手にもうんと持つてビルの中へ。

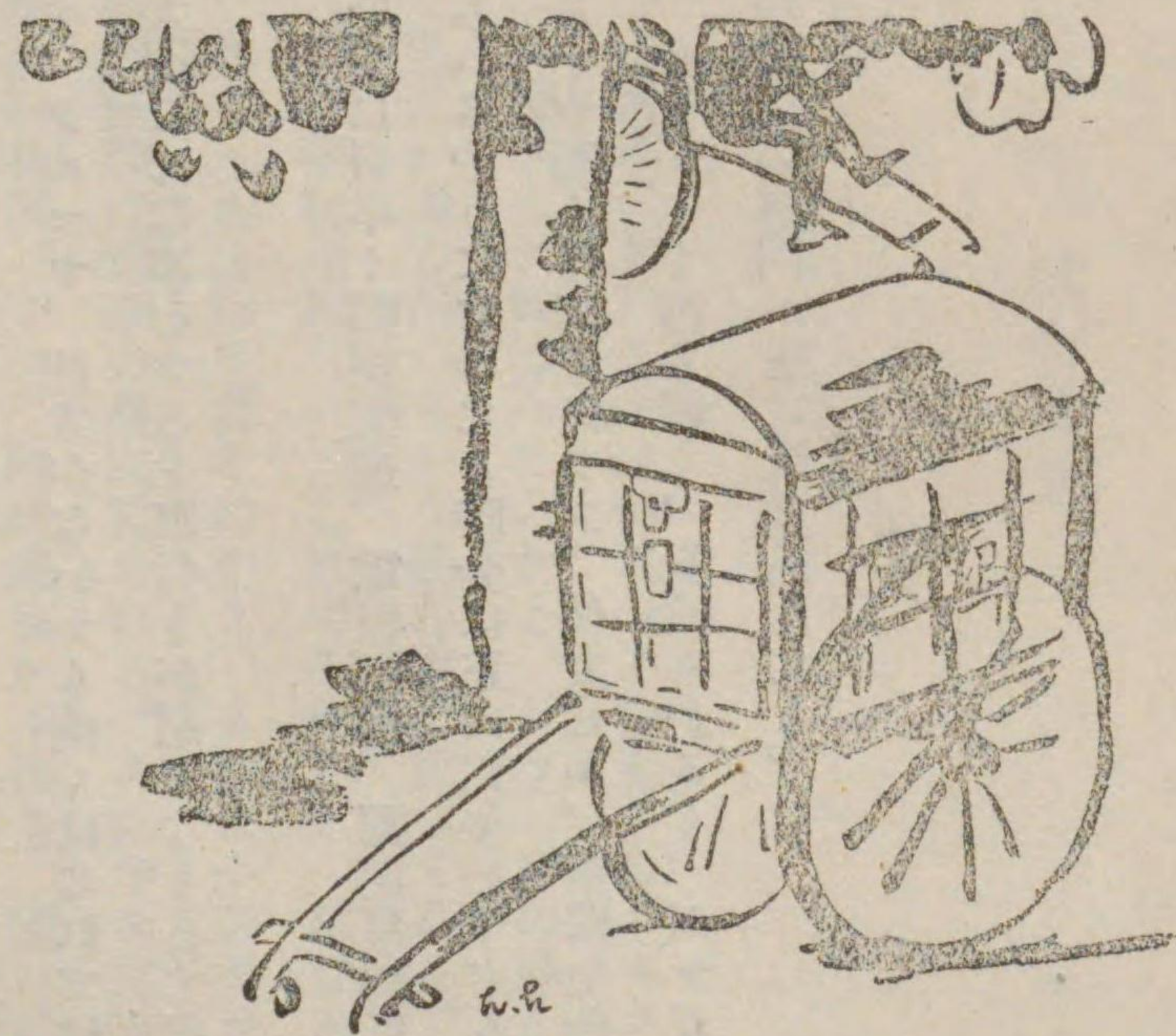
今度は海上ビル、あら生憎と行者の金剛杖のやうなこん棒短剣のお巡りさんの近くに車を置いた。何氣ないふりをしてちよつとのぞくと、あるく一杯！茶色の封筒が多いぞ、株券書き替へにしてはすこし安つはいぞ、奥の方にはカーキ色の麻袋もあるぞ、小使さんへはあるまいが

重役からタイピ嬢までの濃艶の手紙より、やつぱり數にしては印刷物の方が多いです。

さあ配達さん中々出て來ない。怪しまれては事なりと、ビルの中へ入つてあつちこつちを冷やかしてはまた出てちよとのぞくが、赤車君、嚴然としてお巡りさんの隣りにあり、約卅分、とうく業を煮やして且つは人にも怪しまれじとケーキと紅茶一ぱい、そこくに出て來るとあら大變だ、いつちやつた！

目印は易し、遠くはゆかじで、駈け出して四つ角できよろく、あつたく、ついお隣りの入口に、彼氏まことに慎しみ深くつて表口へは決して著けない。

さて諸君、この邊り興業銀行、ナショナルシテイ、三和、三菱等、々々、しかも交通はなは



だ狭雑物すくなくしてまれなり、しかも午めし時なり、イタヅラするにはもつて來いのチャンスではあるなれどそれに反して人通りが薄いと素人ツケ人、形がつかない、どうもイヤに急所々々に交番があるな、伴待ち自動車、クツミガキ、クルマヤ、仕方がないから遠くはなれてはるかのが赤き小箱をちらく〜と楽しむ。あゝ人間こんな事をすると思付きが悪くなりますぞよ。

かくする中にその内に何萬の通行人の中からいやに目早く郵便配達、電報配達、郵便自動車赤ぐるま、あらゆる郵便氏がとつきに拾ひ上げられるやうになつたる時分は正に正午をすぐる四十五分、然るにわが懐しき伴侶は、しるやしらすや漸くに工業クラブ、住友ビル、帝國生命東京驛、ホテルへ最後に新聞を一つ二つ置いて、心もかるく荷も軽く、梶棒もかるく、ガラガラガラツとともにお腹のへつてゐる私を残して中央局の裏門へとは駈け込んだり。

三、横町歩き

浅草



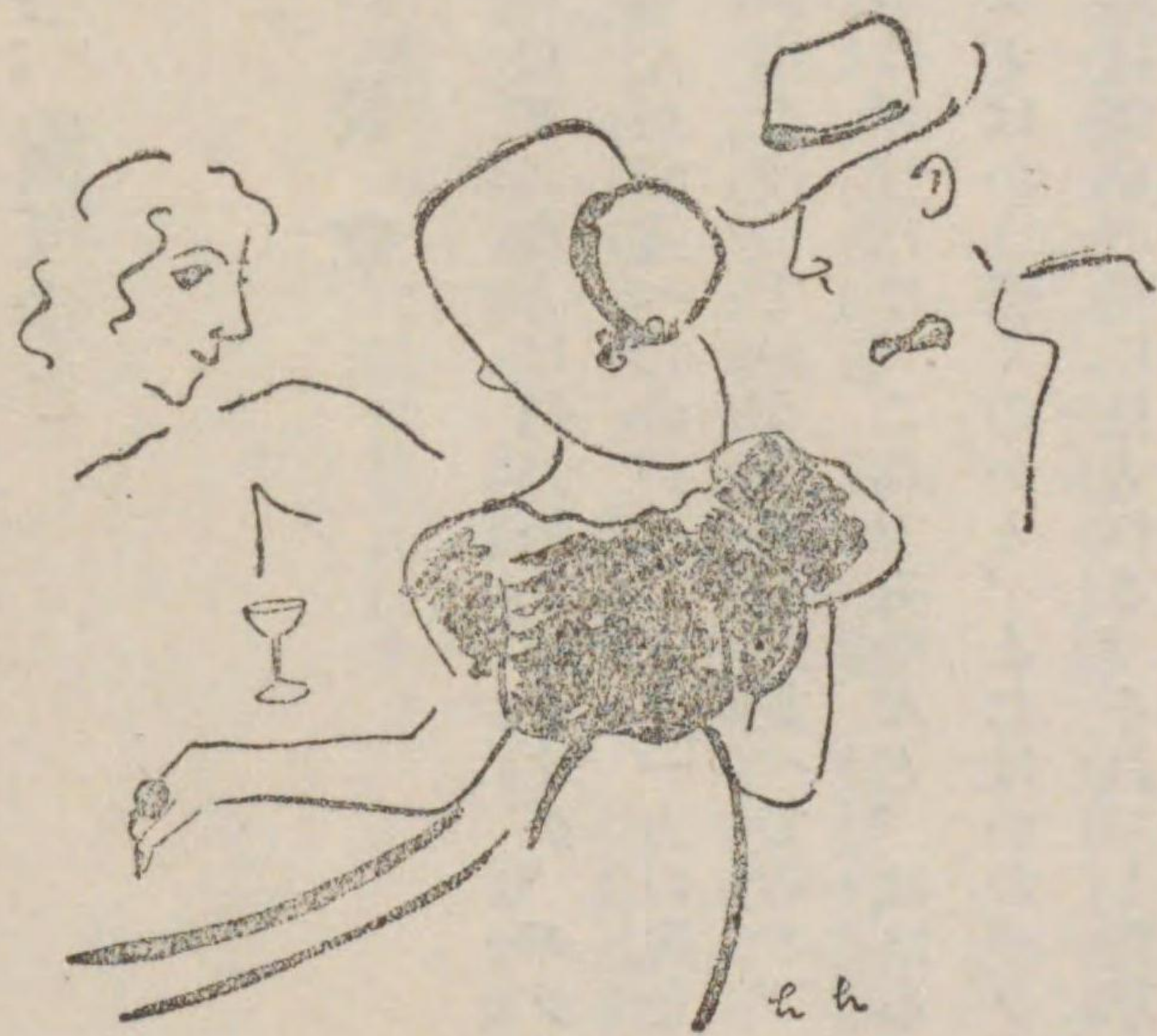
諸君CFEAとは何だかよめますか。ガラス屋さんが間違へたのかと、もう一方の扉を見たが両方揃つてかう羅馬字が並べてある。日本字は屋號だけ、これでちやんと、ははあカフェとはかう書くのかと、またほかのガラ

ス屋さんが眞似うつしに参ります。モダニズムの最後端は浅草の奥に見られる。それでも電車通りバス通りと四圍から攻め立てられ楊弓店は今は射的屋、その二階は麻雀か玉突き、隣にはちやんと自轉車や荷物のお預かり所あり、食べ物屋の窓はいづれも藁の棒の入つた赤いか黄色い水のコップと、ライスカレエに豚カツの皿。明治大正時代の浅草を謳歌しながら町の人は財

布の口を兎角實用加入のモダンの方へ取られるらしく、いはゆるむかしの淺草情調は今や段々へうたん池の向ふの北の方へつめられて『よし原近道』と看板の出た横町あたりにやゝ名残が多い。その邊で前記の新語にぶつかり大前髪の色氣つばい唐人髷や白たけながで丸櫛の束髪に縞の前かけが裾もほらほら道ゆく人をこわくして一葉女史作「にぎり江」のふとんや新七を現代にしたような男もできるならん、街上を流れる音楽に至つてはこれは音痴に近くトナリはラヂオの求人こつちは義太夫に軍艦マアチ、向ふ側ではゆるい電氣チクオンキのワメキ合ひ耳をふさいで通り給へ。

銀座

お母様を百貨店の特選賣場の番頭のところか寶石店へおいてけぼりにし、運轉手をうまくまいて、お



嬢さんはひとりで銀座の横町へ、待つてゐた男トモダチと手なんぞ組んで、『テイサロンぢや甘いやどんなもんだか男のゆくカフェが見たいわよ』で、連れてつて貰つて、皆の眞似してタバコを喫つたりお酒を飲んでみたり、『ああいくらア・ラ・モードの服でもかう増えちやつちや目立たなくてつままないや、ネエ男装はどうかしらん』と、男のトモダチに相談するのが近頃銀座の當世娘。

四、新宿の胸算用

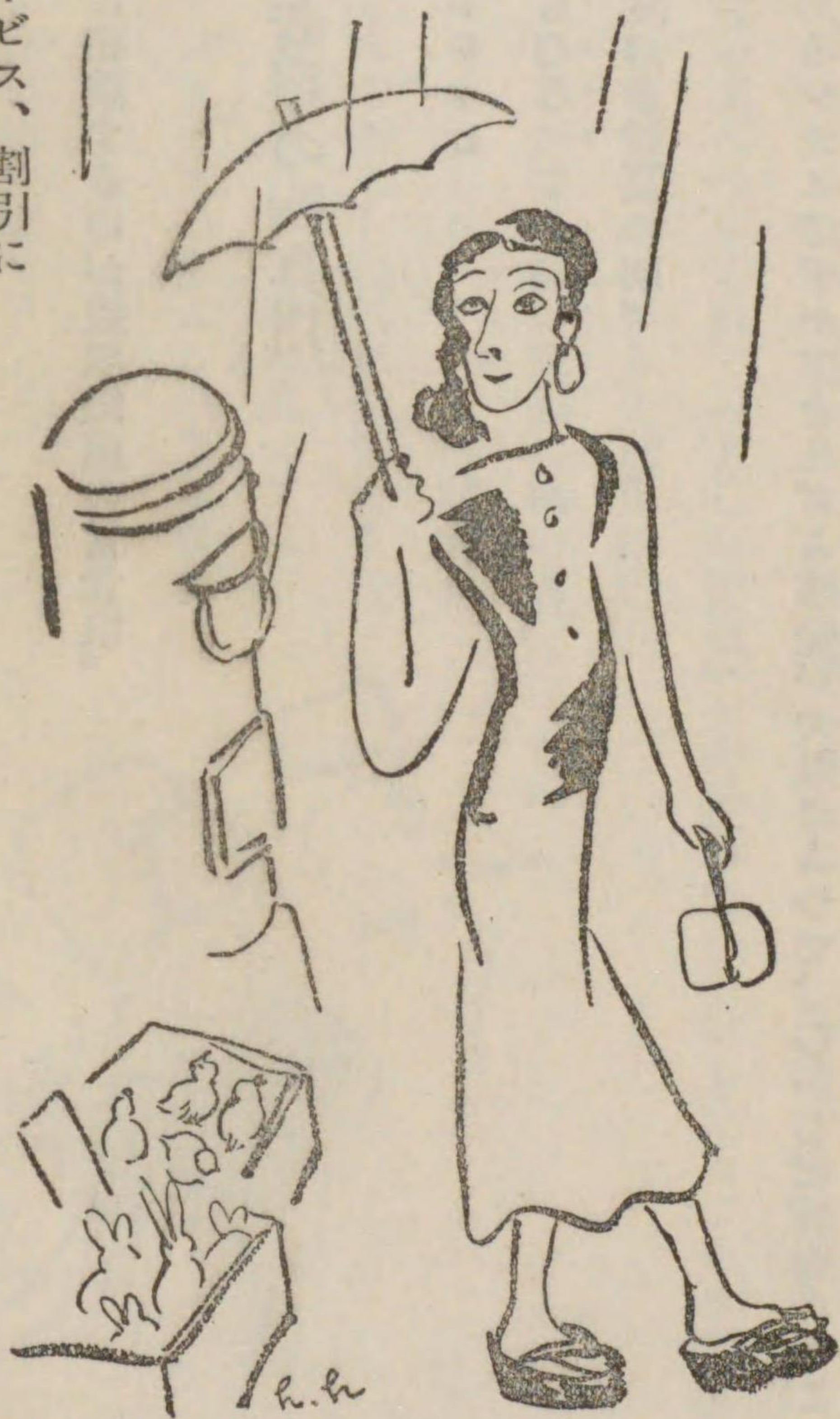
新宿のデイトリッヒ

こま下駄からころ

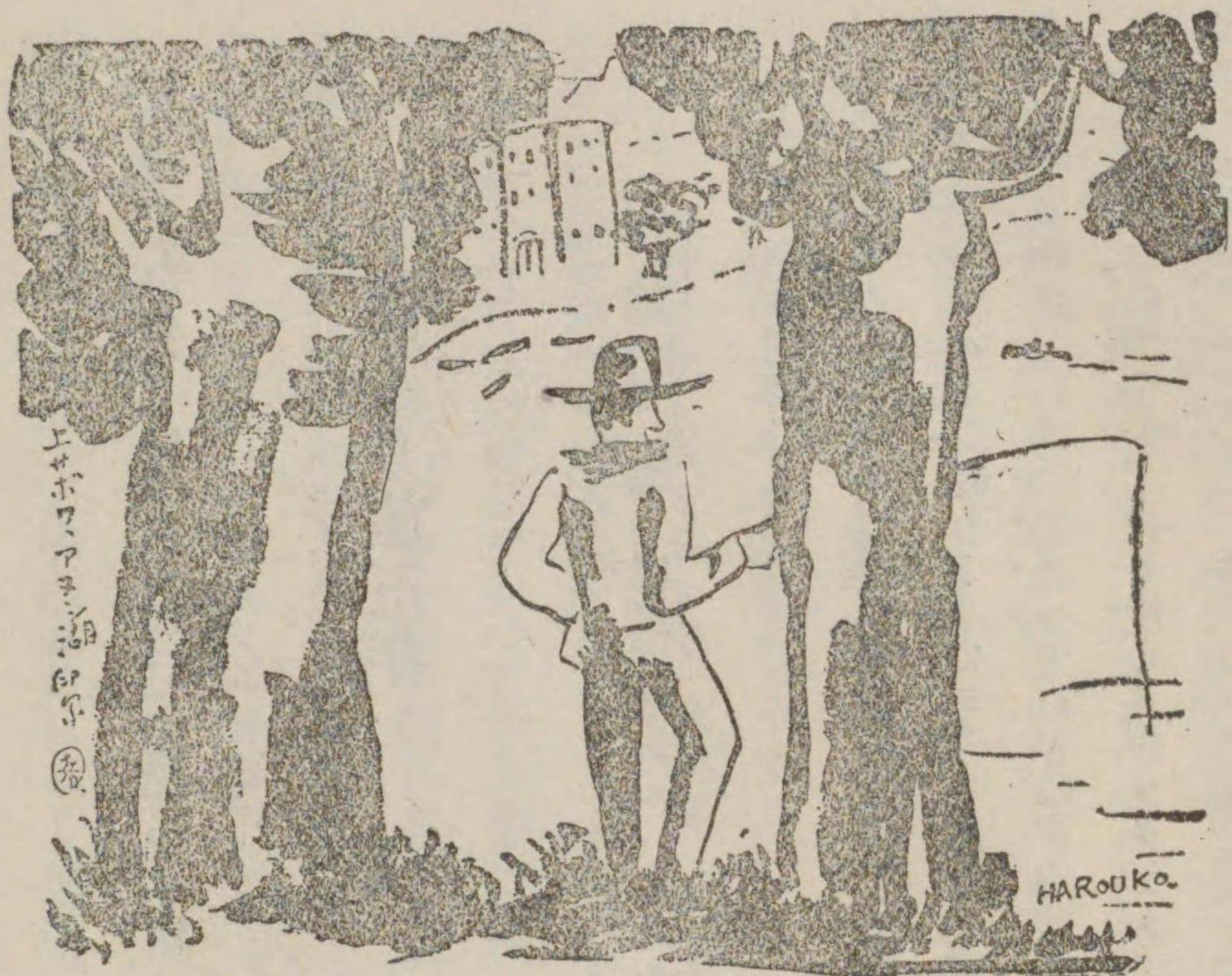
しうまいぶらぶら、夏の雨。

和製モンマルトル、インテリでヂャアナリズム感覺が大衆にあつて、しかして野趣ありこの

街を使用する青春中年男女ともども、いづれも娯樂歡樂をさまざまに受用する中に必ず一様にエコノミツクにそろ盤高く豫算のケタをはづさぬ特徴あり、學生向きの十センチスタンド、ノウチツプ別天地サービス、割引になると俄に中産サラリー夫婦が澤山入つてくるカジノやレビュー、活動の番組にも、百貨店の商品にも、街の店先き露店に至るまで必ず實用的な支出と受用の胸算用が見られるのがこの色彩、但し横町のカフェー街のレコード、ラヂオでこのお客の程度と好みを咀嚼して軒々から出る綜合音は同趣のメロディ・サンホニイとなり、さまでは耳ぐるしくないのはまづ宜し。



ひとり旅三年



サボワの山街

アルプスの最高白山モブランとジエネバの大きな湖とこのアマシの小さな水との三點へ引いた線の内が上サボワ。

むかしなら炭焼と熊の話ですが、岩山の裾まで羊や牛が好く柔かい草ばかりで湖にはあの絶味影オシフルシユバリエの騎士がひそんで居ます、美酒マコンも程遠からず。

六月に新緑で、九月に紅葉で、この町でルツソオは戀人にめぐり逢ひました。豪華なカイゼルは大饗の料理人をめ



つけられました。

いつてごらんさい娘たちはいゝ發音で「山シャンソンドグイウシャレの古家」をうたひます。

ひとり旅三年

(1) 第一年 春 巴里、ピエル、ニコル町より

いよいよ巴里到着です。

うつかりするとカレイ迄持つて行かれて了ふ所でした、驛夫が呼び聲をしない國で、薄暗いガル・ド・リヨンへ忍び込むようにそろそろと列車が着きました。船馴染の英國男が紳士は婦人を保護する物也といふたて、まへでわざわざ到着時刻にはきちんとして私のコムパート迄手傳ひに来て呉れたのですが、彼も始めてのフランスで私より尙カンが悪くつて窓から首を出して見てノウ・ノウ静かだからこりやまだ郊外だらうなんていつていたのが巴里の大玄關でした。煤

でくすんで幼い時の汽笛一聲の古新橋驛を思ひ出しましたよ。

日曜の朝の九時四十分の巴里はまだ眠つていたのです。電報はマルセイユで打つて置いたのだが前々からの知り合がある譯ぢやなし、氣のきかない日曜の早朝につくなんて誰も和佛兩方驛頭には見當り不申で、日本船で來たらお上り連れもあつたのでせうが、其の英國人の暖い大きな手と握手をしてきて赤帽の手押車へ我が荷物を積み上げたのと一諸にぼつぼつ歩き出したといふ誠に華やかならざる都入りです。

折から陰氣な曇り雨でしてね、光りといふ魔術で古都へ美と魅力とが與へてなかつたものですから只途中の町々は古臭く見えてあちこちにお寺が多すぎて辻々の立像共は平凡極まる駄作だし並木の大きな樹は年をとつて刈り込まれてつましやかすぎて極り切つた形すぎるし、都政のくらし向きがラクでないのか何だか街に衰へと手入れ不足があるような氣がする、といった第一印象でしたが無論これはこれから心細くも譯りにくい新開住宅地の知り合ひを探し出さうとする三十二日間の船旅疲れの神経がしからしめた憂鬱も交つた印象色彩です。

然し私は珊瑚集を読み過ぎましたよ、永井さんのふらんす物語や名畫の複製や小説であまり懐れが過ぎた。これでも明治時代にでも洋行した人だつたらもつと巴里入城幸福感が多かつた

でせう。不幸な事には優れた物はみんな我耳目にすでに久しき物で人間の青眼玉の大きな體からでる言語も四半分も半分位も解かるものだからどうも異國人の感じより何もかもが親しみがあつて小さい時に離れた故郷へ久し振りで歸つたとてもいふやうな案配、それだから歸郷者がするやうに町の疲れや衰へなんぞが我家の衰微のやうに氣にかかる、人間の方にも實に其の感があります。もう十何年もたつてゐる世界大戰だがやつとこさつとこふせいだがこつちも腰の疲れが抜け切らずといふ形、三十歳以上の人の顔には皆その苦惱經過のあとがあります。東京に日本に燃え立つてゐる新興の炎が、ほら燃える火の傍で感じる空氣の動搖がここにはありません。悪くない物でも古い物が多すぎるといふ事も一方これ又考へ物ですよ、まして別に大して惜しくもないやうな物は大地震でタマには薄汚なさの大清算も又妙ですよ。

畫商D氏の手紙によつて氏の義弟が見付けておいて呉れた素人宿フレイムに到着第三日目から入りました。おそろしい別嬪の二十四五の若夫人と老夫人と下宿人のドイツの情熱的な肉體の娘さんとが居ります。食べ物フレイムはフランスのくせにあまり巧妙でないが、三度三度美人をながめ乍ら話し乍ら食事のできるのフレイムは畫描きには此上もない事です、チエホフの櫻の園とでもいひたい空氣が此の家庭にはただよひます。長くいたら小説的興味のある家に違ひなし。

このお上りお上りさんはまづオペラへある人から招ばれました、音樂芝居シネマ、美術館は無論あちこちすでに此の二週間に度々です。がまだ如何したわけか一度もはつと心が踊るやうな事に
出逢ひません。ウームと呻る様なエライ俳優音樂家にもまだ出くわしません。未だたつた二週間でさう慾張るのがセツカチの日本人のくせか神經衰弱のセイかほんとうに天才的なものが藝術各方面に現代巴里には不足なのか事實はいづれなりや我知らず。

郊外の森へ例によつて大好物の一人歩きを致しましたら一度森の奥深き所で怪しき奴に追つかけられました、ちやんとそんな者の出さうな所には騎上憲兵ジャンダムが居ました。よく途上で目に付くのが佝僂せむし、毎日一人二人は見掛けますがレムプラントの畫中人物のやうなのがりますよ。犬のいいのも流石ちよいちよい往來で見掛ける、猫もペルシャよりシヤム猫は尙よろしい、人馴れが悪いさうです。

それから又若い女中年女の生活苦と情慾の内部葛藤激烈の爲か何だか實にすまじき白粉の顔付物凄いのによく出くはします日本のあらゆる階級にこういふタイプは見當りません、向ふにや又赤味のない頬紅も付けない私の顔がげにも隠やかに見える事でせうよ、方々の店の賣り子には可愛いおしやれが澤山居ますよ流石は巴里ですね。ハリウッド邊りのスタア連位のは

ざらですよ、時々おつそろしい淫蕩な顔をした子供に出逢つて吃驚しますが、それが皆同じ年頃の子供ばかりで丁度大戦末期頃に出来た子供です成因お察し下さい。フランス人も英吉利西人も年々自分達の國人の體格が低下してゆくと嘆いていますが日本でも優生學はもつと考慮されよかしてすね、黄色く瘦せているといふ事は榮養不足と過勞といふ同義語に文學中で表現されていますよ、ほらあの千一夜物語中でもさうでしょ。それからガゼー、即ち毒瓦斯で肺病やみのようになつた四五十位の出征軍人、其の子供に線病質のようなのが出来きます。横町辻々には小カフエが酒屋があつて朝でもいつでも男達が上下差別なく一ばいやつて居ます。皆酒はつよい女も、うちの美人は幼い時に我戀人^{モシエリ}といつてはシャムパンの瓶に頬づりしたさうです。レピウでは酒なき國の亞米利加人がアウ・ルボワ・パリまた來るといふ唄で大はやり、ニウスはフォシユ元帥のお葬式窓は何百法の觀料にせり上りました。ドイツの大軍を食ひ止めた聯合軍の總大將です。

こうしていつか二週間たちました、少しづつ目新しい氣や比較して考へる事が段々うすれて參ります雜感かくの如し又次便で申し上げます。

何だか早く自分の創作を楽しみ度になりました、出發から久しく何にもしませんでしたから。

あんまり此方に現代藝術の豪い物が多すぎたら此のエトランゼ一時手も足も出なくなつたかも知れないがおお神様よ！です、幸か不幸か頭の下がること割りあひに少なかつた。だからこの遠來の一少婦は心の儘の仕事にすぐ動き出せさうです。あなたは仰しやるでせう行きたい來たいのフランスでさう不足を並べるのではお前の果しなく慾ばりな追求心は火星へでも行かなきゃ氣がすむまいと。まつたくさうです、さう思ひましたよ。

(2) 第一年 五月 ピエル・ニコル町

手紙ありがとう(フチの赤いの)。

母へは内しよですが、丁度この所珍らしくも十日程寝て佛蘭西人のお醫者(同じアパアのあとで聞いたら婦人科でしたよ、それだけあつて私の體を實に直覺的によく解釋する男だつた、まるで體格の標準が違ひますからね若し頭の悪い醫者だつたらさじ加減おそるべしです)と日本軍醫さんの厄介にめづらしくもなりました、風邪と水當り―巴里の水は悪い。それからエビアン水(礦泉)を飲む事にした四日ほど流動物もろくにといふわけで流石のハルコ大にやせました、所へ病中手紙で大變ありがたかつた。多少サビシイのかな、これでも。

三上氏時雨女史其他ニツボンよりいまだ一片の便りなければ。

今日初めて知りあいの隣りの學校の舎監夫人、こつちへ來ると柄にない人とも付きあふのでしよ。に連れられてそうつと郊外を少し歩いたがまだ大分ひよるひよる、其のひよるひよるもお腹がいたいの皆頭の中で異國の言葉を綴り合せて表現するの煩を察し玉へ。でまた春のサロ^ンも見ず大した畫もあるまいとは思へども。

街のマロニエ、リラが盛りで町や公園も悪くはないが私は本當の造らない自然の場所がより好きだ、私の體にはこ^ういふ都市生活はつらい矢張り郊外へ住みたい——體にもよくないに違ひない、所謂巴里の歡樂的な方面は少しも私の興味を引かない行き度もない。病後當分毎日郊外に親しみます、私の此の部屋は北向きで一日に約十五分間位一尺と二尺位の長方形に陽がさし込むのです。

さて有名な藤田嗣治氏も訪問いたしました氏は非常によくしてくれました伯父のようにも思へ常に入らせよといつて呉れた、半白になつたオカツパの下の眼と顔は實に様々の苦闘を経たあとのすわつた度胸と鋭い光りです。氏は「本等の貧乏も二年つづいて御覽大ていへたばるよ」「すぐ賣れさうな畫をかくなあとで價の上る畫をかけ」といひました。そこへ來る相當一流すぢ

の畫商ユダヤだD氏ではない——が私の小畫集を見て私の番地を聞いたりしたさうで其後逢つたら畫があるなら見度い何故日本から作品を持つて來なかつた個展をやるならウチでやるからと云つて呉れたので藤田さんも何度でもやれ早くやれといつて呉れるので畫の數がたまり次第三四ヶ月うちにやります、遅い筆の私が小品展でもまだ旅疲れもとれないんだから随分ツライ勞働ですが。

それから改造其他の雜誌まだ來らず。御承知の通り讀書は私の生きている楽しみの一つなれば心の糧なれば讀んだあとなど、ケチな事をいはないで（一日も早くよみたい）どしどし買つて改造ばかりでなく其他澤山送つて下さい。まだ深く精神的にふれて行く優れた友人先輩と東京のように自由に逢つたりしやべれないから其の點でも讀書は實に平常以上に餓えて居ますよ、私自身の好みの選びの本棚も今には無いのだからせめて雑誌の送りよう遅きが、げにもうらみなり。

たそがれが遅くなつてお寺の圓屋根の上の澄んだ空にまだ燕の舞つているのが午後九時ごろ。

あなたの手紙と同便で神戸の一青年から畫集を見てよこした手紙あり未知の人でかくまで私

の仕事が好いてくれる人もある事は嬉しい原畫がみてもらひ度位。日本の私のまわりのみんなに宜しく。

(3) 第一年 七月 巴里左岸より

そちらよりも久しく便りなし、さはりなしとは思へども。

アトリエから歸つたらば絹が届いていました、異状なき様子也こつちの税も割に安かつた、放光堂の繪具も今日到着の通知あり、いろいろ有難ういよいよ仕事へ油を掛ける。

改造と文藝春秋が來た丈で雑誌の送つてよこしよう甚だ少し。アンナに幾度も手紙の度に頼むのにこら怪しからん。母へは新聞を頼みました。兎も角歐羅巴へ來て見ると明日の日本人間にはもう歐洲の事丈けでは間に合はない絶えず東京の方のも讀む必要を思ひます、前便でお願いした私の書籍類も、若し未だなら直ぐ送つて下さい(右のうち大徳寺の牧溪の觀音の複製はこつちで見付けたいば送らずと宜し)好きな畫が左右にないと淋しい。

最近になつて吉屋女史佐藤女史其他へ急に一二度過然逢へました、吉屋さんに逢つて例の機智でキビキビした會話をして久し振りですうつとしたもの云はねば腹ふくるるだ。ソレホド巴

里にいる日本人には會話に味ひなき人が多いのだ(内しよ内しよ)。佛蘭西人の知り合ひも大分できたN氏が佛人に知りあひが多いので大佐殿の委託娘(私ですよ)といふ事で時々食事にも呼ばれる。

D氏も此の家へ一度訪ねて呉れ又私と家の若夫人(夫と別居している美人なれば)を招いて呉れたり。遊びに連れてつてもくれた。美人はトクだ。

H氏にいつて下さい東京ステーションの不愉快な感じはまだ覺えていると、彼割合に私を見る事淺し、藝術家で直覺がつよいと思つたのはスキだつたのでちと買被つたのかな。

すこし畫會の方も十日の菊の觀あれどちいつと運動してお金を集めて下さい。飛躍するつもりなれば尙更學費が充分ほしい。

さて先日大きな畫廊の女支配人に紹介してくれた佛人あり其の女支配人が(中々のやり手らしい顔だつた)直ちに私の畫二枚を今日邊りから初める其店の展觀へ(フジタも入るエコール・ド・パリの)出して呉れる事になり額ぶち其他向ふでやつてくれるさうです幸さき甚だよし、これで賣れば申分なし、もつとも佛蘭西へ來て初めて描いた畫ですこし詩が^{ポエジイ}すぎるが悪い畫ではなかつた。其他前記のやうな機會があれば一二枚づつ出品するつもりです。

こないだフジタのアトリエで友人大會あり、私へ速達がフジタから來たらうちの美人を名にしおふフジタとて人氣役者から手紙でも來たように黄金の眼玉をきらきら輝せた、集るもの北澤樂天、黒田鵬心、矢澤弦月、吉屋・門馬兩女史、北村兼子さん等々々、フジタ、ラクテン、ハルコの三人大はしやぎむき出しの兩の腕へ樂天氏の指あとを左右八つ九つあざにして歸つてきて、お婆さんをおつ魂げさせ當分袖なしの服がきらなかつた。

閑話休題ともかく毎日畫は必ず描く五月半ばから今日までに大小七枚かいた、トモカク本場の油畫とキツコウする丈けの確りした畫でなくば薄つべらの日本畫では巴里では名は成せない、しつかりやりますよ、死ぬよりはまだ偉れた畫かきになる方がいくらからラクだと思ふ。

あなたの日本よりの手助けを切に頼みますよほんとうに。

もう十日ほどすると美人とお婆さんと三人でピレネエ山の方へいつて靜かに讀書と畫作と私の好物の晝寢を充分する。また畫材を拾つて來て秋には更によき晝を描きますよ。することしたき事澤山澤山ありだ。だから尙澤山の時間が愆しいナマケモノの時間がわけて貰へぬ物かしら。先日好便あり流行のモイドエシヤルプ大枚をふんばつしてあなたに届けたれば入手は十月半ばになるべし氣の長き事也。

パリも急に暑くなつた昨日今日九十度以上、ルーブル美術館の壁は王様の御殿だから厚くて内部いともすゞし。いいひ暑殿だ。

(4) 第一年夏 ガスコオニユより

上ガロンヌ縣某村といつた所で東京のあなたには何の興味もありませんまいが、ピレネエ山の麓に近く昔は鍋釜の出所ツウルウズ市からまだ二十里、ほらシラノ・ド・ベルジュラツクや世界大戰のフォシユ元帥の生れたガスコオニユの一部ですよ。で此所の名物は今もつて武勇と、も一つは『^{アッシュユシマントウ}確認付きの法螺』で、うちのお婆さんの大法螺小嘘も成程この生れに由來します。

うちの城^{シャトル}があるはこれ又大法螺だつたが百姓風の母屋と木造の離れがあつて日本をいでて半年目に久し振りの木造家屋の中に、故博士の書齋だつた見晴しのいい二階の大寢臺にぼつんと一人、高原の朝風に氣もちの好い朝寢をすごし、午めし過ぎにはまたお婆さんと若夫人——とても美人ですよ——と三人で綠蔭婦女眠るの圖を作り、夜はランプちようちんをぶら下げて離れ屋へ戻つて本でも讀まなきや又早寢だ。これで漸く半年間の旅疲れ氣疲れ見物疲れの體をとり戻しさうです。

かくして十餘日をもう過ぎしたが眠るばかりで畫作はちつとも。私は印象はすぐに頭へセツセと取り込んで置くけれど筆の方は餘程其の場所に馴れてそらでも描けるやうになつてからでなくちや描き出せない。それに此町へ到着以來いろいろ小説的挿話がありましてね、先日は此の門へ競賣の貼り札が出て、すんでの事で寢臺も椅子もなくなる所でしたよ。

ピレネエ連山はまだ十里位前方に地中海の方から大西洋まで一筋に天然の萬里の長城です。丁度此の邊が一番高い所で標高三四千米の角峰^{ピク}がおし並び雲か雪か白い岩か三者入り交つてゐるらしい、あつちの山の頂邊は何々のお聖人のあと此方の丘はバジリツクの古寺あり等々で順禮が一生一度はかかされぬルルドの靈場もさう遠くはありません。山懷には有名なルツシヨン温泉もあるのです。

あの山越してスペインが見たいな。此方側は木が茂つてゐるが向ふ側は赫土の荒蕪地に強い太陽の光、まるで違つた世界ださうですよ。

私の今住む高原はフランス大平野の終曲^{エポク}でなだらかな丘の波がだんだん重なつて山勢が起らうとする所。只一面のみどりの牧草に林と畑で濃い青のふち取りをした中へ朝と夕方は白やまだら牛や黒犬と羊飼がさし加はる風景。實に靜かで羊飼の長閑な方言^{パトワ}と犬のなく聲と夜は遠く

のお百姓の馬鹿囃子、あとは我等三人の會話の聲きり、人も來ず人も招かず一日遅れの新聞でスノウデンやドウズ案にお婆さんは今更ふんがいし私と美人は日本か巴里から來る手紙を戀しがつて郵便屋がやつて來ると嬉しくつて郵便やにキツスでもしてやり度位、といった生活。屋根裏には田舎畫師の描いた、昔の肖像畫だの寫真だの襪で濕つた本だのの中からカリダアサのシヤクンタラなんぞが出てきました。

美人も私も流行おくれのつんつるてんの着物を着て二人で散歩したり私一人で歩いて放し飼ひの大牛におどかされたりお百姓に話し掛けられたりするが方言^{パトワ}は『全然別の語尾^{セトユンヌラング}』でちつとも譯らぬ。食卓の日ましの黒ばんも蜂蜜をつけたりロツクフォルといふ名物のチーズとても臭いのへ新しいバタを半分位まぜつけて食べればおいしい事私は裏の廢園からゆがんだ林檎や紫色の梅の實を籠に一ぱいちぎつて來て食卓へ並べる。美人は深い井戸からつめたい水をくんで來る、あとは固い肉にソウセージにショコラ、これが毎日のこん立、ポータブルでシヤリアピンの聲でも聞いて二階へ上つて天心に懸る夏の月の光で靜にねむる。一寸かういふ生活です。悪くはないでせう。

木の葉が落ちてもう五時には眞暗です。冬は三時には暗くなるさうです。従つて展覧會でも其他畫商でも人の客間へ掛けたのでもみんな燈火で見る時の方が多いわけです。これがよく黄色の調子の強すぎる畫の原因でせう。

近頃手紙は支那とロシアの喧嘩で早かつたり遅かつたりまちまち東洋旅行者も汽車にしたり船にかへたり又汽車にしたりまごまご兎角天下は事勿れだ。

あなたの手紙で種々様子が解り面白かつたり其他感がいは様ざま。

H氏Kさんにも宜しくお傳へ下さい。兩氏エンプクエンプク、傍にゐれば小松の鰻でもおごらせる所也、彼氏私に出發驛頭何とかもちやもちやいつたが自分の方が早かつた。ちと羨しけれどめでたしめでたし。

T氏の届物は誠に感謝感謝、經費は日本人なれた物知りの流石のうちのお婆さんもたたいて見たり嗅いで見たり考へてきて何の木皮かへと聞きましたよ。

前便で申したシャルパンティエ畫廊の展覧は止めた。一流の店だが全くコンマアシャルな畫

を賣る店で私には多作は無理だしお互ひに話が付かず又其中へひとの何とかで相撲といふ人も出てきてね私は抜けてしまつた。丁度そばのグランパレ（春秋のサロンの場所）で自動車の展覧會で、全國近國からあらゆる自動車屋の亭主と金持が出て來て誇張なしに其の近邊五六町四方は自動車展へ來た人の乗り捨てた自動車で埋る通抜けるのに小一時間はかゝるので飛つ散りて畫廊へも人がより付けず仲間へ入らなくてよかつたといふ成績だつたらしい。

人も私の畫は個展の方がいいといふしそれでいよいよサンヂエルマン廣場のザツクといふ小さくはあるが中々流行る藝術的に格のいゝ店で十二月初めにやる事に今日きまりました。今度は絶體に変更しない、あつちへぶつかりこつちの畫商に何とかうまい事をいはれたりしてゐる中に畫商賣なるものも段々自然に解つてきます。

例のD氏も私は別に強いて頼みやしないがここの家と仲よしになつて美人は彼を歡待するしよく來る。自然私の事も考へて呉れたりピカソの所へ連れて行かうと工夫してくれたり巴里で受けるコツなるものを教へて呉れたりする。さうかと思ふと自分の商賣の占ひのついでに私までロシアの女占ひに見せたりする。おばけは箱根からぢやないが、フランスでもおばけ神祕不可思議は皆明るい南の國からは出なくつてドイツだのロシアだの暗い國の方角からくる。女占

師私に曰く「藝術家ですね。一度失戀してからあなたは大成功する。然し子供はありませんよこれは今に淋しうござんすよ」當るかしらん。失戀の悲しみなどはなしですませたいな。

あなたの家の犬は如何しました。巴里で犬のいい奴を引張つてゐるのは大てい女、きやしやな美人に大きな犬いいですね。お婆さん中婆さんは小犬を引ばつてゐる、此所の家にも崇拜男獻上物の可愛い波斯猫がゐましてね五階の住居では自由に戀愛を樂しめない、ふざけて落ちたら死んちまふしヒステリーを起して大騒ぎとも哀れだつた。私の香水香油の瓶白粉のパツフはヒステリーの犠牲になりましたよ。D氏の犬は利巧だが小牛の様に大きくて撫でるよりまたがり度くなりさうな強い奴です。大犬の風呂代電氣で乾して一回一圓某した。

(6) 第二年正月 南歐碧玉の岸邊より

まつたく碧玉の岸です。佛蘭西人は實に物を如實にしかも美と詩を入れて云ひ廻す人種ですね支那人なら直ぐ只誇張に流れてしまふ所ですが。

去年マルセイユ上陸以後、海の水を一年見ませんでしたから海が戀しくつて明るい光線が懐しくつて着いた翌朝は元日の朝眠い眼玉をこすりこすりよるい戸を明けて五階からのぞいて見たら此の南方の明るい光線と碧い明快な寶玉のやうな波の色、深い底の藻の擴がつているのまではつきり見える。老若い人より残念な事には中年老年が多い所です、歐羅巴中から日光を懐しがつて寄り集つてきたお爺さんとお婆さんが外套なしで小さな日傘なんぞ伊達にさして樂しさに散歩道を歩いたり海をながめたり手を結んだりうようよとして居ましたよ。

頃日まつたく疲れました。たつた二十點の個展をしてこつ疲れるなんて我乍ら貧弱な體力で。然しザツクの主人は大成功さといつて呉れたが収入の方は甚だ少々だが先づ先づこつして勉強さへしていたら何とか道は開けてゆきませう。

此所は明るきが故に何か私には皆面白く楽しい、巴里の三時から日暮れで朝七時に燈の下でカフェを飲むで雨が毎日じめじめ太陽はにぶく低くあるかなきかの光りなりは疲れて居たせいか長夜の眠りのようでも堪まりませんでした。蘇つたようです。

然し土地の人氣はづるく悪さうだ。まづ會計は第一週目には誤算を出してお客の注意力の試験を何所の店でも必ずやります、伊太利亞半分の空氣ですね。ガリバルヂの紀念が澤山あります。すぐ近くにも紀念館や美術館がある。來ている避寒客は例によつて英吉利西婆大部をしめあとは亞米利加獨逸等々面白くも可笑しくもなき無趣味無あいさうの輩で彼等でもこんな

い所へ來るといい氣持は感じるのかなといひ度位。

外れと云へども海岸通りで三食付き三十五法で海側の部屋を一人客が見付け出したのは手柄でしよ。その替り亞米利加パニツクで閑だものだから私一人きりの爲にランテイルのひね臭い煮付けを出しました修道院の孤兒か兵隊ぢやあるまいし。

カジノや豪華なパレイメデイテラネへは未だ入つても見ませんうしろの雪のアルプの山々や溪谷の方が私をより強く引ばる。

花が安くて抱へる程買つて今の時節で五法位これも有難し有難し。けちな水族館が海岸にある。晝間はこれをのぞき夕方は一法の遠眼鏡で土星(?)の環をながめます。

海邊の石つころに青ガラスの玉のように淡い美しいのが澤山まじる。だから海の水も幽えんに更に深く碧く見えるらしい、ヴキナスもこんな美しい海だから考へ出せたものでせう。

コルシカ行きの船が出る。伊太利亞へ行き度なつたがさうもいかない。世界の贅澤地ニースで清貧か吝臭くかは暮せども自然の方が非常に豊富に私にどしどし楽しさと美しさを提供してくれるので懐中と反比例に誠に豊かな氣持ちになります。

來て見てマテイスとヴァン・ドンゲンが粹なニースの題趣はすつかりさらつて了つたのに氣

付いたこの二人で天下の避寒地ニース小趣は盡せりですよ。輔道の椰子の木の下を歩く心地は正にドンゲンの晝だ。其所を氣狂じみてどの車もどの車も一時間百二十キロ位出す奴ばかりで火事場へゆくポンプ見たいにヒユツヒユツ朝から夜中迄落付かない騒音です。そして毎日あつちの岬こつちの崖で事故事故、モナコでばくちに負けた人ばかりでもあるまいが。

晝商で知り合ひのスタアリンに二三日前ひよつくり出逢ひました。彼は女房子供と山手の安宿にいる。女房は西洋人のくせに又お産で女の兒が付きまとふ部屋の中であれで好い晝が描けたら超天才だが才質は相當あつて折角賣り出し掛けたのに若いのにやれ可愛さうに。

カアニユ邊りへ行けば日本の晝描きも居ると思ひますがニースでは月初めに福島氏其他に一才逢つて別れたきり久しく日本語も口から出しません。

此の家はアンドレ・サルモン氏などもお得意の一人ださうで、お主婦さんは大戦にできた後家さんで新婚の客にはアタリがちと悪い小間使と料理女は姉妹で姉は太い腕で大鍋をかき廻し鶏をしめ殺す妹はパリの安宿奉公で日本人の仲よしでもあつたか私を客の中で一番好いてくれるさうだ。わい談を折々聞かせて呉れるがこれは少々へきえきします。

寒中なのに氣持ちよささうに日中泳いでいる若い男女もあります、ろはの好いモデルだ。お

風呂にひたり乍らながめる空のきれいな事、まったくイタリア碧です。

(7) 第二年二月 ニースより

春になりかけました。

さてちつともあなた方より手紙なし、正月と暮で家持ちだから忙しいとは察するがあなたよりも母よりも賀状の外來す。私は十二月以來たしかこれで五本位あなたに書いたと思ひますね筆不性の私がね。兎も角ちつと手紙下さい。それにお金の事あれ程一生懸命書いたのだから私がどんなに困るかは承知と思ふのに待つても待つてもそれに對する委しいそつちの様子の手紙も來ない。もう一月半ば過ぎの新聞や本が來るのだからあなたの手紙が來るのを毎日毎日どんなに待つてゐるかは御想像下さい。

先月十九日大方あなたが計らつて送つても下すつたのだと思ふお金もあれ丈では今まで生きてはゐられないフランスでは。運よく一枚畫が賣れて其のお金と合せてやつと今日迄來た譯ですがまだ×新聞の返事が來ないし、あなたと某社へ頼んだ話も兩方とも電カワが來ないしもう一週間しかお金が無いからいづれにせよ兩三日中に又大枚をふんばつしてSOSを打つ。先づ

どつちにしても手紙で委しく時々状態知らせて下さることと畫會其他工夫して奔走してくれよば——友情で一生けん命やつて下さいよ——お金のまとまる口は幾つかあるのだから何とかセツセとやつて下さい。外國にいる者の心配さ加減は又別ですよ兵糧が續かないと折角神さまが此所迄手をとつて運を開いてくれるのにいま干ばしになつては我運命に對してすこし濟まない藝術に對しては尙更だ。少くも様子のわかるように知らせて下さい餘計な心配ばかりして何にもろくに出來ません。

まあ一月以來日本のあちこちの金策の手紙を待つので苦勞したことしたこと。こゝで何か短い文章でも書かうかと思つていたがその心配で駄目だった。度胸は相當いつもりだが矢張り外國だとね。明るい土地を描くのに暗くなつて破つて了つた破くなんて生れて初めてだ。

金の途がいたら巴里へ歸つて一生けん命春のテユイルイへ紹介するといふ人もあるから大作をやるつもり。あい間に畫會の畫もかかしません。又巴里で賣る畫もかき溜めねばならず。ああ天は誰か早くいい保護者でも與へて下さい！それからあなたが次の畫會に馬力を掛けてくれますように！

勉強してきますか。御自愛下さい。私も幸ひにカネのクロウの外には何事もなし。

此の程まつたくの孤獨生活、宿には口をきき度ような人間共は泊つていません仕事と散歩と讀書、我乍らよく神經衰弱にもならぬ事哉。

(8) 伊太利亞より 第二年四月羅馬キリナーレホテルより

お見送りありがとうございます。

あなたが「イヤな顔付きの給仕ですね」と仰つた通りでした、デイジョン迄來ない内に連れは無しと見てやつて來て此の混交切符ミックスドは違つているとごちやごちや彼は都合によつては下手になつたり譯らない振りをする佛蘭西語で申します。結局差金二百法計りの請求です、どうも臭い奴だと思ふが翌日の暮方迄はいやでもこいつがサアヴィスするのですしたつた一人きりのコムパアトですし、これが車掌も兼務しているのですから國境へかかる前に途中の驛長へ申告しようかとも思ひましたが兎も角要求通り拂ふ(まあ二百法だから)かはり巴里へ歸つてトマスクツクの賣つた男を詰問するから羅馬の停車場で此の切符をあとの證據に私に呉れるよう改札にいふ事とお前の名前をサインしろといひましたら不性無性ヤムナク承知いたしましたして其の通りに實行いたさせました。彼は始終此の手でナポリから一路上船歸國の日本人から少しづつせし

めて居るのでせう。この二三日間でももう伊太利亞人の此の手は大分經驗いたしました切符の事もクツクの間違でないように私は思ひます。

先づでも無事に隣國羅馬へ到着いたしました。

此のホテルには朝日の重徳さんも巴里から來て居られました、松岡先生——日本を出てから初めて子供の時分からの知りあひにお目に掛つたのですから嬉しくつてはしやいで日本へ歸つたような氣になつて其夜は二時すぎ迄松岡平福重徳氏其他でサロンへ長尻をいたしホテルを困らせました、私の更なる勇辯は恐ろしき迄でしたらう、ベルモットをなめ乍ら。本場のベルモットは本當においしいございますね。

M、H兩先生が何時までも居候をして居て宜しいと風呂付きの可愛い部屋を下さいました。前側の兩先生は朝は六時位にはもうお湯の音が聞えます。先生方が公用でお出掛けの間は一人で毎日ベデツカアで羅馬見物をいたして居ります。伊太利亞語ももう話せます馬車へ乗れば『アルベルゴ、キリナーレ、ヴキアナチヨナアレ』とか『シ、シ、シニョラ』とかローマなままりでやつて居ります。

横町の日本人料理で御存じの馬の名人今村少佐に逢ひました、競争の優勝馬のように生々と

氣が早くつて愉快な士官です。私もあはて者ですから門口に立つていた氏に『大急ぎだから早く御飯を食べさせて下さいよ』と先づやつたものです。忽ち仲よく氣の早い此の二人の同國人ヨハネはさし向ひで快談しながら食事をいたしました。

展覽會の招待日にはムツソリーニが遣つて参りました。過勞だと見えて割にやつれて元氣がありませんでしたが、其日の夕刊には水兵を前に大元氣な演説をいたして居ります。平靜な日本畫をみて居る時には疲れがでてちつと眠かつたのかも知れません。

これからナポリ、フロレンス、と一人旅を致しますがヴェニスへも行かうかとも思ひますがアドリア海の方は少し暗からうし、私には明るいナポリの自然の方が魅力が多う御座いますからナポリで楽しく泊つてフロレンス丈けで歸る事になりませう大方それで懷も一ぱいで御座いませう。歸りますと又澤山おしやべりを致しに伺ひます。いい物が至る所澤山あつて殊にここでは彫刻は素敵、ほんとに伊太利亞へ來られて嬉しうございます。

(9) 第二年夏 端西ツエルマツトより

今日あたりは東京大阪では土用の最中で頭が茫とする暑さでせうが今此の部屋、板ばりの箱

みたいな部屋ですが——では寒暖計は譯らないが大へんに寒い、涼しい所は通り越しです。零點にもまさか降るまいが今日お天氣の午後が寒暖計漸く十度でした。毛の付いた冬外套をきてぶるぶると手紙を書いてゐる。窓掛のかはりにさらし布が一枚引ばつてあるガラスの板戸から寫眞ではもう永い事お馴染のセルパン、マツタアホルンの尖つた頭が今夜は夜目にもはつきり現實に見えてゐます。

アルプスも奥の奥のこんな町までやつて來るとは登山家でもない癖に我乍ら随分御苦勞な話其因縁はといふと巴里の下宿屋の一族の生れ在所が此のツエルマツトだったので。夏は巴里の客が減るので家族達が此方の店へ手助ひに來る、アルプス氣分はツエルマツト迄來なくちや譯らない、ユングフラウ位ぢや甘いもんでさあ位の話からぢやあ端西めぐりには是非寄らうとなつて此所迄はきて見たが本當に随分の奥の奥でした。シムプロンほらスキスから伊太利亞へ抜ける世界で有名な大隧道、それとモン・ロザ山脈を境にしたツエルマツトの溪谷を汽車がよち登つて來た終點にセルパンの白い頂が光つてゐる。途中で右にも左にも大小の氷河や野生の山羊やかも羊が岩山の横腹を自由にかけまわつてゐるのや一本一本に岩石を根でしつかり握りしめて漸く生きてゐる深谷の縦や糸杉の木をながめて來ました。

丁度今度の出立前、F畫伯がウキン行に案内者兼に誘つて下さつたが、M畫伯の方はアメリカ廻りで歸朝の途につかれました。私は瑞西も歩きたかつたし——丁度小さな畫が一枚賣れたのです——そして此の旅の最後の落付き先が上サボワときまつて居る。其所もやつぱりアルプスの麓で佛蘭西領ですが例のB將軍夫妻の在所で安いい下宿を借りておいて呉れる筈で此の夏はこうして平穩なサボワ人の中で靜かに暮す約束をしてしまつた後でした。それにウキンやミュンヘンには音楽と繪畫もあるがなけなしの私の懐で行かうとする程に引力がなかつたのです。どうも私はイギリス、ドイツあつちの方角へは引力が弱い今度もし行かれるとすれば西班牙のグレコだ、ベラスケス・ゴヤの巡禮だ。

さて初めの中は連れもあつて先づユングフラウへ登り——岩山の胴腹をくり抜いた隧道でぼつたり頂上近い雪の真中へ出るのですから富士より何千尺も高いユング・フラウだつて日がへの享樂です。それから主都のベルヌやチュウリツヒ、獨逸オウスタリ境のボーデン湖——向ふ岸に例のツエツペリンの工場がある此方岸ではドルニエの大飛行機が百餘人乗りのホテル式の大きな飛行機を作つてゐた、邊り迄行つて途中から一人になつて思ひも掛けない町に温泉があつて久々でぬるい乍らもいでゆにつかつて見たり夏の間だけある氷河特急列車といふのに乗

て見たりしてラインの水源からユングフラウの裏山ローヌ川の水上の氷河を通つてやつとこさつとこ足は用はずとも大分足勞れてのはてが今夜は漸くに久しぶりで宿屋の亭主や家族にしる一つ鍋のスウプを啜りあふお仲間逢つて懐しくべちやくちやつた譯です。そこで今夜は一本亭主御自慢のスキスのから口の白葡萄酒もはづました。

此所だつて横濱のグランドホテル位の大きさの高級ホテルも一二軒はありますが、然しまだ登山氣分の田舎田舎した村です。ユングフラウの麓のインタラーケン邊りの國際大ブルヂヨア都市とは雲泥の差です、我宿も先代は山案内人上りでほんとの瑞西の山奥の木造小屋、今夜の寢臺は旅疲れの身にはちよつと溜息のであるしるもの。下にはのれんの掛つた入口から山うさぎの様な顔をした山案内人や御百姓達が出入りして一ぱいやつたりカルタを取つたりしてゐる。

夜の一本筋の往來にはカンテラだの電燈をつけてセルパンの繪はがき登山用具、木地物細工に鍛冶やに端の方へゆけば草葺の百姓屋もある奈良の校倉のような穀倉も出てくる谷川の音も聞える。露店では山の娘やお主婦さん達が手縫ひ取りの布地やスキス名物の人絹ものを並べてゐる。聞える言葉は伊太利亞語獨逸語佛語は少ない。ひどいなまりで「ヤアヤア」が「ヨウヨ

ウ」と鼻にかゝるそこへお客のために俄仕込の英語、瑞西人は段々用語が各種に交つて淺くなり複雑な心理表現は出来なくなり言語で表現する藝術家は發生しない様な氣がする。

私も今度繪具箱をかついで廻つたが一二泊づつの見物ばかりで滞在しないから道具箱はまだ單にお荷物にすぎない、巴里で知り合ひの瑞西生れの畫描きがよく私に瑞西の風景はあまりピトレスクで題材にならないとこぼしてゐたが多少さうかも知れない、もつとも其の男は才能のない男ですがね。

宿の亭主は巴里の下宿なみで拂へばいいからとしきりと滞在を薦めて呉れるが悪くはないがどうもキャンプの中を畫室にするようなもので滞在して畫作するにはどうもすこし平靜で風趣のある簡單乍らも一寸氣のきいた軽い人交りもあり食べ物も田舎乍らに風味あるといった佛蘭西伊太利の方がいい、今の所さう永くこゝにはゐる氣はしません。あまりに物資もとぼしい罐詰交りの料理だ佛蘭西では山家でもこゝにいふ事はない。川も水が冷めたすぎて魚もゐないさうだ。山の狩は別として手近にゐるのは穀倉の鼠と大きな山モルモット丈け、山モルモットは捕へられて往來の人々の興に伏籠に入れられて通りの真中でぐうぐう寝てゐる。宿のお老爺さん『マドモアゼル如何です』私の大寝坊は西洋へ來ても何所でも通りものです。

ケーブルでセルパンの途中迄は登るつもりですがあの尖つた岩角はよぢ登れない。私は又谷を下つて下傳ひ谷水と一しよにジエネバの湖水まで行つて大まわりをして又モン・ブランの麓の方の上サボワへ行きます。登山家ならマツアホルンからモンブランへかけて屋根傳ひをやるのだがそれは近い道だが豪傑でも小一週間かゝるコース、下まわりは一日の汽車の旅です。

氷河雪山岩山、牛の首の鈴の音青草の色木小屋に索道フニキニールに田舎人の顔と聲、これ等が素材のまままで私の頭に入つてゐるこれで今スキスの畫をかけといはればまづさてハンケチかチヨコレートの箱紙の石版畫しか描けません。

藝術の話しの少しでも通じる所へ行きたくなつた。早くアヌシ湖畔でB夫人のおなじみのむく毛の小狗でもなで乍らB夫人の皺のよつた毛だらけのほほへキツスでもしてお茶でも飲みたくなりました。ではお休みなさい。

(10) 第二年初夏 巴里十六區より

ハガキ二枚到着。

用とお饒舌と一緒に書くとおなたがどうも用の方を(前例によれば)忘れるさうだから用事

は別紙に個條書きにする事にしました。

大佛さんの事大へん嬉しい。次作「女と猫」はいい畫が描きたいからゆつくり描かせて下さい。同氏夫妻へ呉々も宜しく大變私喜んでる旨を必ず御傳へおき下さい。

近いうちに又少し澤山にはあらず、放先堂へ繪具の注文をするから覺悟して下さいよ。私もお金もちいとは欲しいな——の補助金丈ではくるしい。ああ何日あなたが爲替をよこして呉れる事やら。

T氏は近況如何、同氏にもちつとセイを出すようお傳へ下さい、ぬらりくらりと頼りなくクラゲのようだ(内しよ内しよ)。

H氏對Kさんまよれば芽出度事也、かくなるべく豫想したり好きだつたらアラのセンサクなぞせず決行する事。何でも時機を失するが一番悪からん、KさんよH氏は不可解な性格なりとするも異才ある藝術家のこと愛情の方でおぎなふべし。兩氏に宜しく。私は別として只の女の一人住は苦しからんましてお金があつて子がなくなつて用がなければ尙更だ。ヒスになると友達が困る當人にも可哀さうだ。お嫁にゆくに限る。

此の間私の留守に横山大觀氏以下お供十餘名で私の下宿を訪問されたので宿のびつこのお主

婦さん面喰つたらしい、始て男の和装や其他見馴れない花々しき一行だから印度の王様位に思つたのでせうよ。用事は何か買物でも頼む位の事だつた、其晩食事へ招ばれましたよ。

今度の宿は丁度千駄ヶ邊といった場所でブウロオニユ公園の後の方で競馬の日には大きな公園内外人間で一杯になります。まだ私は一度も競馬を見たことはないけれど。

宿泊人は私、スキス娘のタイピスト、田舎の奥さんで美人のみもちの人、イギリス人夫婦、ルーマニヤの學士、ベルシヤの商務官、波斯人は髻そりのあと青黒く眼の鋭い苦味の人相だものだから泊める泊めないで宿の夫婦喧嘩があつたが王族で金びら鮮やかに切るので今ちやお主婦さんとスキス娘に大もて、ここは部屋は小さいが安い物も相當にうまく料理し掃除がきれいで小庭がある。近所も別莊風の家が會ての大きな庭園内に程よく散在してゐるといつた好い環境で氣が落付きますよ。マルク・シヤガアルも近所に居るさうです。アンドレ・ディドも先には住んでゐたさうだ。食事をしてゐると私の卓の窓のふちへ雀が澤山並んでパン屑をねだります。

(11) 第二年初秋 巴里モンモランシ街より

拜啓

サボワのB氏の許から歸つて参りましたとたん暑さがぶり返して四五日箱中の魚の苦しみを致しました、男なら冬服でもどうやら過ごせるのが巴里の夏だのに印度洋以來の白麻の着物を取り出した程ですからその暑さお察し下さい。小窓一つの屋根裏染みた私の小部屋をお察し下さい。たうとう近所に住まはれるFさんとMさんの川邊の別荘へ逃げ込みました。アルプの氷溪グラシエの澄明な水から歸つて、セーヌの川下の濁り水で暑さをしのぐはめになりました。英吉利では兵隊が演習を中止したさうですがまさか英國では百度位なものだらうにさりとは英國の陸兵らしい話です。

コストは其のなきの後ではきまつて歐羅巴大陸からアメリカへ向けて吹く追手風を利用して大西洋逆コースに成功致しました。大抵の劃期的の事にはなれつこの佛蘭西でも皆しんから嬉さうです。彼の落ち付きと體力と各部門の協力者達の完全した科學的準備を見れば成るといふ動詞の未來現在過去が順に経過したにすぎない様で萬一不可能の方がへんなといひ度位整然としてゐます。あぶなげがなく目も付り上げ興奮せず流石流石と思ひます。一寸羨しい、一般の科學の向上と彼等の體力丈けは我々にも是非加へなければならぬ事です。

ほんたうに體力です。藤田嗣治さんの言草ちやないがバルザック、ユウゴウの量だ、畫描きだつて少くも千枚やそこら傑作が出来る位でなくちや駄目だ。描けるの描けないの氣分がどうのと云つてゐるより先づうんと描く事だと思へばお金なんぞは無い癖に苦にもならないで只私に足りないのは體力、之だけは我身乍ら憐むべき貧弱さです。貧しいの弱いのと云ふ字はどんな事に當てはめても感心しませんね。

スミスから來た十八歳のギャルソンが未だ少年といふ所で女中の替りに私の部屋へ毎朝カフエを持つてきます。それが或る朝つくづくと寢て居る私を眺めて、昨夜の夢に私がアクシダンで往來で倒れたのを彼が背負つて來た夢を見たのださうです。そんな想像を少年給仕に起させる程私は貧弱な小さな十五六歳の娘の體格にしか當らないのです。

ザック畫廊で又暮に昨年と同日から個展を致す事にきめました。去年よりはいくらか上手くなつた作品を並べられませう。

又落付いた秋夜から暗い冬になつて参ります、個展の畫作で氣は張つて居りますが、夕ぐれタグレの片側町等ひとり散歩を致して居りますと、淋しい背中の老人の姿など見て、我事のやうにわびしさが傳染して参ります。近頃になつて親しかつた人、優しくしてくれた人、友達先輩達がつぎつぎに日本へ歸られます、今年の個展は何もかも私一人でやらなくてはなりません。仲間

私が一番いつも元氣だと云ふが、これでもすこし瘦せました。私の只元氣なおしやべり丈けはかありません。これが止む時は恐らく息を引き取る時でせう。

近刊のバイロン傳が中々面白くチャイルド・ハロルドも折があつたら讀んでみたくなりました。佛蘭西に居て海峡を渡つてくる人間を見て居ると段々イギリスへ行く氣がしなくなります。愛嬌のない發音の英語を讀む事も話す事も嫌ひになりました。ワイルドやバイロンを佛蘭西人はひどく可愛がります。あんな國土に生れて運の悪い人達だつて。

秋のサロンも何の期待も致しません、春のドラクロアの特別展観は流石ルーブルの仕事でした。誰か現代の人のいい個展でもあればいいと思つて居ります。

部屋で仕事をすまして夕方ポエシイ通りの畫商の窓を折々のぞきに行きますが、自分の畫の強弱やいろんな點がはつきり比較研究が出来てこれは好い勉強方法です。時々ザツクの二階にも小品でもドラクロアのルベンスの模寫だの(素敵ですよ)モンチセリ等といふ珍品も出てくるし、ルノワル、シャガール、モデイリアナなんぞもあるのを一人で引っぱり出しては飽く程見て居ります。

ザツクの未亡人といふ人は恐ろしく頭のいい人でソロバンも弾くが人を見て加減もし誠に世

の中に通じた苦勞人です。パリ畫商三人女の一人です。まだ馴染も浅い私に日本でも僅かに鎔木先生や梅原龍三郎先生位が私にして下さる位の心持のあつかひと微妙なる會話をして呉れます。ユダヤ系の波蘭土人らしいのですが、然し番頭達や賣子娘には何でうちのお主婦さんは「燕にもならない日本人の女」に肩を入れるのか合點がいかないし時にはお出入り免許の畫描き仲間に尊敬されたり羨れたり小意地の悪い目にも逢ひます。

折々は東京の近況ちとお話し下さい。外國へ來ない人は筆不性だなあ。

伊太利亞の畫描きの呉れた支那の安茶を古九谷の茶碗に入れてお菓子を摘まめばもうこぼろぎがないて居ります。セマイ室の隅には靴數足を並べ洋傘、トランクから畫架本箱に寢臺がはりのデイヴン洗面臺で一ぱい、隣室はアイルランド人の番頭さんの大いびきにスミス老人、旅人ぐらしももう二年です。

(12) 第二年冬 巴里十六區より

芝居やシネマはさう組織だつては見ては居りません。

きりきりづめの學費で智慾にはどんよく飽く事なきそして不都合にも餘り貧乏臭い事を喜ば

ない私の事ですから手が届きかねて芝居の方はまだ切符を買つて観たといふのはよくよく見度
い時だけ殆ど知り合ひの買つている年極めの席の空いている時のオペラコミックとか世界的名
優だつたムネ・シュリイの遺児のジャンヌと一寸仲よくして居たので彼女が出演の時折呉れる
佛蘭西座の切符か美術記者から貰ふ招待券といふ機會の見物の方が多いのです。

オペラは相變らず十年二十年一日の如くワグネル物やタイス、ファウスト、ウヰリヤムテル
の如きものです。千九百年の萬國大博覽會のお上りさんは三十年後の今日、もう一度オペラへ
行つてもきつと何一つ變つた事のないのを感じするか溜息をつくかでせう。オオケストラの一
番前列の知名な批評家音楽家の常席の老人達は燕尾服かタキシードで何時もいかめしいが少し
薄暗い場面へ來ると其のはげ頭が皆こくりこくりやり出します。世界中のお上りさんが一度は
話しの種に見物しようと云ふ譯で大廊下では最新せん端流行から始まつて少なくとも十年前迄廻
ぼつた田舎と都會の女の夜會服が一度に觀られます。音楽は非の少い美事なものなのですが感
激的ではありません。

オペラコミックの方は大小名愚とりどりの曲がさしかはりますから拾ひ物もあります。新人
の均りに掛かる所です。こゝではオペラ以外の他の物もやりますアルヘンテナなども日本の

帝劇でうけた事などをこゝで演つた時には刷物に入れて宣傳してありましたよ。宮川美子さん
も最近大勉強の結果がこゝへ出られました。彼のガリクルツチが唱へば變轉の妙技極りのない
『ラクメの嘆き』も至極おそまつな平凡曲に歌はれて了ふ時もありますが時には又遇然出くは
した『ハバネラ』で多數のヴァイオリンばかりの序曲なんぞ中々よくて感心いたしました。

佛蘭西座では相變らずよくモリエール、コルネイユ、ラシーヌ又其他古いもの古臭い物が始
終出ます。モリエル物は作其物が素晴らしいからまだいいが、當時の時代精神だけのコルネイ
ユ、ラシーヌとなると役者も俳優學校時代いやもつと小學校の時分からさんざん暗稱しつづけ
た文句のくり返しですから感じもなくなつてしまつて表情よくようマンネリズムの極みにし
て衣装をつけた朗讀です。正則佛語を解するには此所へ來るかお寺のお説教へゆくに限りませ
私の悪口ではありません皮肉な佛蘭西人がさういひましたよ。此所で今シャルル・ヴヰルドラ
ック氏自身演出指揮のものを演り初めました。舞臺稽古（まづ招待日です）に往きましたが彼
の『詩』は自身指揮してもやつぱり俳優には再現できませんでした。日本でも評判のよかつた
『郵便船テナンシテ號』をシャンゼリゼ座でやつて大分好評でしたが見ませんでした。
私の渡歐前一年かもつと前から演つていて未だ何日まで續くのか譯らないのがマルセル・パ

ニヨールの『トツパーズ』と少し後れて初めた『ル、セックスフェイブル』日本なら何所か知らから必ず風教云々の槍が出るに違ひないどつちも現代露骨の社會諷刺で句々の皮肉に觀客が時々『うつ』とうなる程、俗だが一種の人世の底をついて居るから見物は皆教養のある中年の世の中なるものを解している男達とその伴侶の女達だ。こういふ確りしたお客が面白いとか怪しからんとか家庭や客間で大に論じますから見なくちや話題に脱れるといふ譯で後から後から人が押し掛ける。二つとも劇場は中邊の所です。従つてにせたる書き下しも方々で始まつて中には一寸面白く當りさうなのもあるのだが長續きしません。シネマで馴染のアドルフ・マンヂユウ程度の男女優の達者なのが此の邊の所へ出るのです。

エドワード七世座では英國では『トツパーズ』以上に當てたといふ『ジャワニースエンド』世戰大戦物を見ましたが私には英國人には果して面白さとかよさとか又純粹藝術とか本當に解せるかと云ふ事は疑問ですね。矢張りイギリス獨逸で當てた『四文のオペラ』をモンパルナスの小芝居で評判がいいので松尾氏に引張られて三階からのぞきましたが出装装置ドイツ表現派で演つている、悪くはないがドイツ物は暗くてあくがあつてヘレニズムの私には向かない。好奇の心でメニール・モンタンの共産大學の宣傳劇も一度のぞいて見ましたがね。

サアシャ・ギトリイは巴里のロスチャイルド男からピガール座といふ近代のあらゆる精を盡した筒にして豪華な劇場を建てて貰ひましたがコケラ落しの『佛蘭西の歴史』は彼自身書き下したものです。歴史をダブロウ化した丈けの豪華版の生人形式なものです、彼は自らモリエールに扮し又ギョウテ對ナポレオンの所で何とか皮肉な事をしやべつて居ましたつけ、其の芝居へ夏頃ニツポンのケンゲキ一座が渡つて來ました。何はさて世界中の珍奇な物には數世紀間飽食した巴里のブルジョワ共もケンゲキの座長が脱れたら大變と必死の熱演するケンゲキとハラキリにはたまげましたよ。芝居の筋も藝も何もありませんが只立廻りだの立ち腹だのと大車輪で實際切り殺して了ひさうな勢でやつたのですからグランギニール（グロや血生臭い物ばかり演る特殊の劇場）にだつて無い仕事ですから大きな體のお客共は氣の弱い子供が初めて芝居で殺しを見た時のように「ゾツ」としたり「はつ」とします。大當りでした。エコウドパリ紙の記者が一體日本でどれ位の役者かと聞きました。大毎の特派員永戸氏が只一人此の座長筒井徳次郎氏の事を知っていました。一座の女優の方はちまちまとした可愛い人形のようなだつたが男の下廻り連は顔形のまづいでこぼこ氏のグロばかりをよせ集めたのでもあるまいが少々と云ひ度いがコムパトリオトにとつては大分情けないような連中でした。それから野趣多き安三

味線の下座これ又冷汗ものでした。歐人は耳は上下だれでもデリカですからね。

話しかはつて藝術座の明星ピトエフ夫人は實にいい俳優です。ひどい露西亞なまりの佛蘭西語さへも藝術化されて私には特色に聞えます。イオンヌ・プランタン(サアシヤギトリイ夫人で人氣女優)の甘い美しい聲だが地方なまりの方が餘程外國人のピトエフより耳ざはりです。ピトエフの藝風は實に素で行く、味の深いそして自らの香氣と品のあるものです。體は私位しかないごくの小柄で美人でも何でもない六七人の子持ちの瘦せた女です。だから舞臺に出て來た時にはオヤこんなひとかと思ふ中に、私の見た時はいつもつまらない脚本だったが一幕二幕三幕と段々観客は息も出來ない程に引すり込まれて了ふ。さうして誇張のないたんだんたる藝が何時の間にか表現のヤマに達してきます。女に有りがちの安つばいセンチメンタルな解釋などしない、様々のコンデイションで出來上る一つの事件人物を美事に藝術の香りを添へて再現します。物はまるで違ふが死んだ大シユリイ丈けが古典物でやつぱり場内しはぶき一つ許さぬ程に見物を締めたさうですが女で此所迄藝の心境の達した人は今は外にはないでせう、死んだ伊太利亞のデウゼはさうだつたでせうが、そしてすこしスケールが大きかつたかも知れません。歸つたらばピトエフ夫人の事を菊五郎氏に話したい、彼に見せたいと思ひます。保守派の官立

劇場の俳優連も今はピトエフ夫人丈けには誰も悪口もいはず正直にかぶとを脱いで感心していただきますが彼女は革命で逃げて來て世すぎに始めた素人藝なのです、夫ピトエフ氏も又相當なものだいい頭の人です。

俳優ぢやないが、何といつてもミスタンゲト、私は此の人の浮かれ節には心から浮かれて楽しくなりました、其の藝の圓味と滋味はそつくり菊五郎の踊りの味で彼の東洋流にやや近頃出だした澁味と菊か梅の香のようなたぐひの薫りのかはりに彼女はフランスの柔い香水と甘美な果物の液汁と艶やかな脂だといつたらいいでせう。それでもう六十歳以上なのですよ。まつたく世界一の浮かれ節だ。すこし落るし物もかはるがラケルメレーも居ります。すつと落ちたサアカスの餘興ですが近頃は日本迄も名が傳はつた『三人兄弟』の藝もこれもまつたく佛蘭西の味だお目にかけて度ようです音楽入りの三人の道化師にすぎないのですがね、それが素敵な風味のある面白さなのですよ。

シネマはシヤンゼリゼ通りだのグランブルバール邊りの英米人目あてのパラマウント、ゴウモンはトッキーにも英語まじりだ。以下到る所實に大小シネマ澤山ありますがモンマルトルのスタディオ28、ユルズルジーヌ町の町名と同じシネマ、前衛^{アベンガルト}が見られるのは此の二つでせ

う、くろうと向きで技術構想のいろんなヒントを得ます。スタジオ28の方が場所柄だけに不良が多くてちつと飽きると口笛怒鳴るひどい時にはナイフで幕を切る奴が出て来る。一方は學者町のラテン區ですから中年の學者醫者藝術家物すぎといったお客連だからエロ極どき場面でもひとでや蛇の實寫と同じく科學的な心理で男達はしみじみながめて居る連れの太った細君かアミー達がふうつと暗やみで熱い息をもらすといふ寸法。最近評判のよかつたのは「巴里の屋根の下」ウフア物で「ガソリン男」ボーイヘデユクシヨ「誘惑」、最後の物はエロ大變なものだと聞いて居ますがまだ見ません探偵物の小さい面白い物も出ます先づ「半七捕物帳」のたぐひですがこれは會話が筋を立てて行くのだから外國へは持つて行けません。其筋が感心したり参考にしたりするような泥棒方法のうまいのがありました。一法（八錢位）でニュースばかりやる所がある（一時間以内）これなぞ銀座あたりにあつてもいいと思ひますね。

私も何だか少々疲れてきましたのでともかく一度日本へ近いうちに歸らうかしらとも最近はお考へ出すようになりました、さすれば拜眉大にいろいろ御話し申しませう。

(13) 第二年冬 モンモランシ街より

年末になりました。

さて目下此の五日から二週間個展をやつています。まだあと二日残つてるといふのに店にも此所にもカタログが一枚もなくなつて了つてシワがあるけれど一つ封入します、序文はシャルル・ヴィルドラツク氏がいい言葉を書いてくれました。サルモン氏も例によつて招待日には来てくれてうまくなつたね大事にしておやんなさいよとお主婦さんと私と並べていつたお主婦さんも自分の眼力に對して上機嫌です。然し巴里も深刻な不景氣サコマンズ始まりで最近漸く激しさが身にしみてきた、流石は昔からいろんな事件に馴れた佛蘭西人物價を思ひ切つてどんどん何所の窓をのぞいても下げてゐる迂濶な横町の安物や一流高級店よりうつつかりすると以前の高い價がついてるといふ仕末、高級品はアメリカ人が金を使はぬようになつてから一つも賣れない畫も御同様一流でも三流でも畫商畫家共に又受難時代至れりらしいこれは自分で各畫店の内部の事が度々出入りしてゐる内に自然譯つてきたわけ。だから私も今年は價をきく人希望者があれば思ひ切つて安くどんどん賣つてやつといふような費用の大部分だけは借金にもならずに濟みさう、これでも目下の場合では他からは大成功に見られる事せう。Y大使夫人がお馴染甲斐に一枚とつてくれました價は大まけに負けた。

畫商の店まわりも相當やつた。ザツクではまあ御承知通りのあつかひを受けているが、時にはヒドイ目にもあふ。前の話したがヴキルドラツク氏が畫室へ來て私の畫を見てくれるといふのだが何しろ畫室にも何にも小さな小窓ひとつの寢室に過ぎないのだから向ふは藝術家の貧乏振りには馴れては居ようがこつちには甚だ恐縮だからしかも随分遠方なのだから畫を持つてきてお見せしますといふ事になつて氏の妻君の經營している小さい畫廊の方へ畫を運んだものです。所が丁度何にも知らぬ息子さんばかりだったので、例のルムペンおしかけ作品と思つたのだらう彼に合點をゆかせる前にすんでの事で私の傑作二枚は往來の石の上へおつぱり出されかけましたよ。

又見込みを付けて向ふから親切にいつて呉れる畫商の一二軒では今度は只取り上げの魂膽だ殆どユダヤ人許りだから徹底した人情だ畫は非常に高價になる工夫はして呉れるがこつちも餘程がつちりして居ないと其の作家の餓死位は平氣なものだ、好例モデイリアニを見よです。

さてO社の補助も盡き掛けたしY氏が歸朝後K先生と相談してすぐ何とか口を見付けて呉れる約束もさういかなかつたと見えて半年経ても梨のつぶでだしM先生からも機を見て一度歸朝せよ日本とあまり交渉が薄くなるのも不利だ熟考せよそして再度の計を計れとの手紙も又も

つともだし或は次第によつたら急に來月早々にでもひとまづ歸るかも知れませんが、それも旅費の都合工面もあるからまだはつきりとは云へません。

此方の折角種々出來かけた惠まれた各方面のつても惜しいがさりとて何しろ畫商が今ストツクうんうんで買入れが絶體に出來ないのでから畫商をアテに食べて行く事がいくら有望作品でも恐らく不可能だから、然し此の次の景氣には必ず其れ迄にいい畫家になつておいてうんとお金も澤山取るようにする。それに私もすこし足勞れてきた否定しようとしても日本も友達も大分戀しくなつてきましたよ。畫家の創作にとつて心の疲れが一番いい仕事をするには悪い事だから疲れたら氣をかへてすこし靜養だ。いつも私の心は朗らかでなくてはいい畫は描けないから。

歸るとすれば今度はシベリヤ經由でそれもお金がギリギリだから今度は何にもお土産が買へないから勘辨して下さい。みんな此の次此の次。恐入ますが此の手紙を御覽のあとを忘れず母の方へ御廻し下さいそうでないと急に歸つて吃驚するといけないから。

X夫妻も最近パリへ到着らしき様子大使館邊りでそんな噂を聞きましたが其の様子では彼氏彼女私には逢ひ度なからん結ぶの神に對してへんな事也、感謝されて然るべきなのにね、國を

出る時きや仲よしだつたがケイエンされるとは致し方なし。頼んだといふあなたの贈り物さへ私の手許に早く着けばそれで結構だが、所でまだ入手をしません。靴下が盡きて其の贈り物を待ち焦れつつです。お尋ねの私の方のいい事はまだ出来ない、先づ突發すれば別だが順序から行けば私だけに特に運命が指定した仕事の方がもうすこし如何になつてからの事にする。然しおいおい遣れたらやり度い大にやる考ですよ。戀愛もしない藝術家なんて犬に喰はれるだ。これだつて『御入用の場合には先づ私の事をどうぞ考慮して下さい』位のやりとりや『あの人の所へお嫁にいつてしまはうか知ら』なんていふ迷ひは時々あるんですよはばかり乍ら。ではよき年をお越しなさい、越しませう。

(14) 第三年二月 巴里モンモランシ町より

取り急ぎ一筆、漸く金策成り、——ああこれだけあればもう半ケ年位勉強できるのだが若し今度これだけ溜らないとハルコは日本を見る事が出来なくなると大變だから——いよいよあと旅券査證の都合が變らぬ限りは十一日頃巴里出發伯林をとまかく一日見てモスコウ半日か或は二日位の豫定です。月末には東京着。

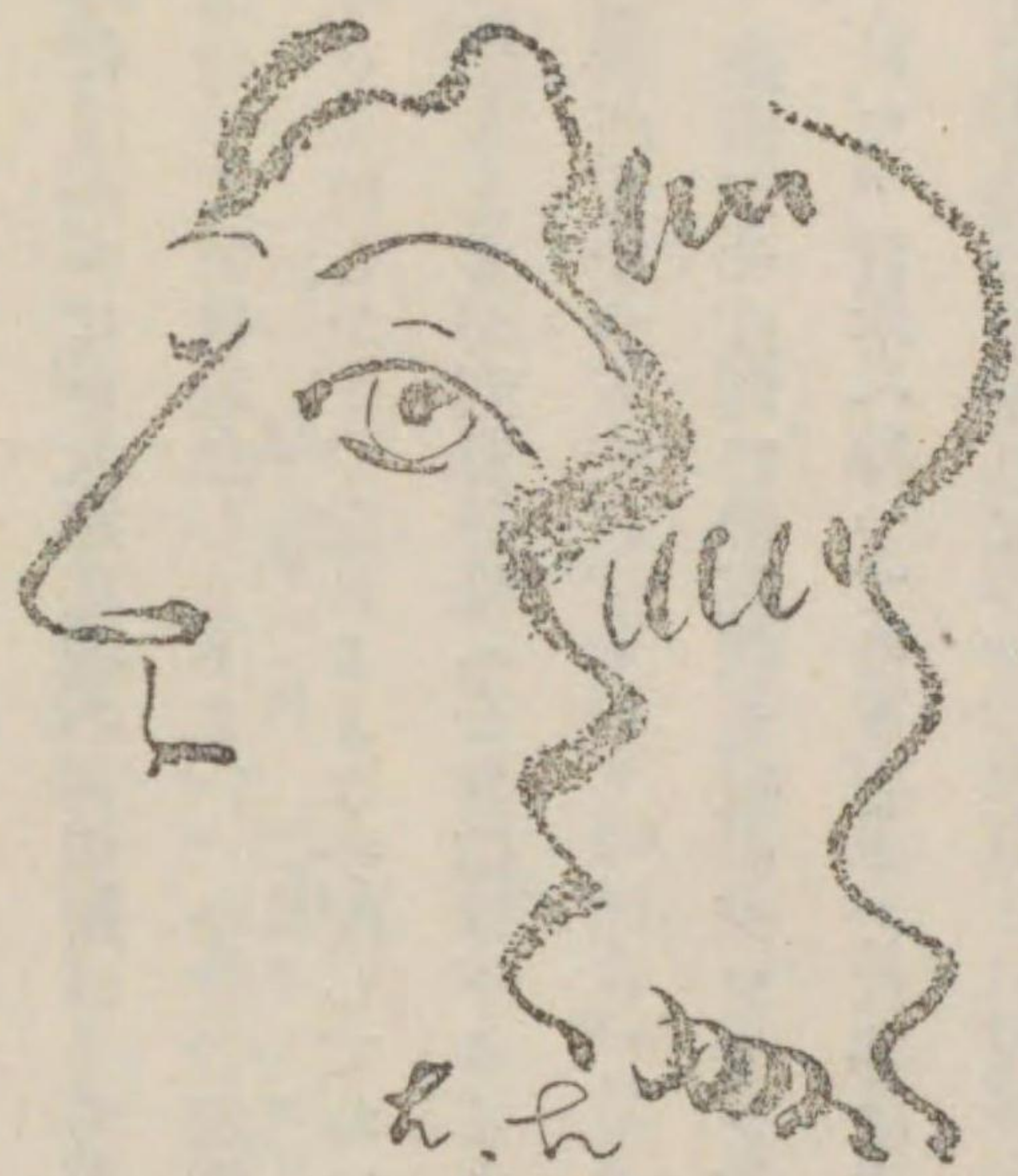
そこで出来る丈クシンサンタンをしたが如何もちと旅費怪しく(度々トマスクツクへ通つては番頭と經濟切り詰め法を研究してゐますが)とも角ハルピンか買へれば大連又は京城迄の切符を買ひます。暮から不都合にもシベリア鐵道迄五割價上げといふハメ。でいよいよ立往生の時にはハルピン大連京城の三個所のうちから電報をうちますから百圓以内でいから如何にか都合して電報送金して下さい。今度の返電は「デキヌ」は勘辨して下さい。さうだと化けて出るぞよ何とかすぐ送れるよう手配しておいて下さいこれ丈は呉々もお願しておきます。

恐入ますが到着を母へお言傳げ下さるよう三上夫妻へも御通知願ひます、日本支那朝鮮間は電報料もすつと安い。

畫商がせん別に佛現代大家のデッサン油等數點私に選まして、呉れたり信用で貸したりしてくれた。日本へ持つてゆきますこれ等は大出来ならん。其の替り私の畫はこつちへ残すからいくらも持つて歸れない。

雪が巴里も今日はちらちら、シベリア極寒地帯を此際大貧乏の旅行で通るのは我乍ら哀れなる哉、然し苦しみの中にもちよつと興味もある、日本でフアナテイクが多いロシアの經國ぶりを兎も角自分の眼で見えておく事も興味がある。何でも若いうちにやつたり見たりして置く事です。

美人のお城



の輝やかしい黄金いろ眼の方はお天氣の日の地中海の碧藍の波が凝りかたまつた玉のようなのが、形のいゝ高い鼻の上に好奇の光澤を添へて二點、つまり黒毛とオオクル色のわれ／＼が全

まづ素晴らしい美人だつた。この間例の國際離婚問題の自稱クレオパトラF夫人を見ましたが、あれより十倍位も美しい、もつと派手にばつとして金髪へき眼で、それもイギリス人や北の方の歐羅巴人のような薄つばい亞麻色じみたブロードぢやないし、青い瞳も、その連中達のような冷めたい小意地の悪さうな灰白に近いのではなく、この美人の髪の毛は本當のいはゆる味のいゝブロード

然缺いてゐる鮮紅鮮黄明藍といふような色彩の合成人間なのだから、だれでも吃驚して茫となるわけ、おのぼりの日本人好みの型の中でも絶品なるものですね。

しかもその上この人は立派な子爵夫人ですよ。父親は文科大學の學長をした人で、まだ故人の部屋には豪華な王様の様な書棚や、數千圓もする骨董的書物棚などがある。母親の方はまだ



生きて一緒にゐて、これは武勇と法螺吹きで古來有名なガスコオニユ州ピレネーの山麓の—ほらシラノ・ベルジュラツクやフォツシュ元帥の出た、—の名門の出、だから客間での藝術論だつて、淺くとも流石は巴里人で理解者らしくやつてのける。有名なポオル・フォールはかの女に詩をデデイケートする、活動屋はマリイ・アントワネット役に買ひに来

る位。

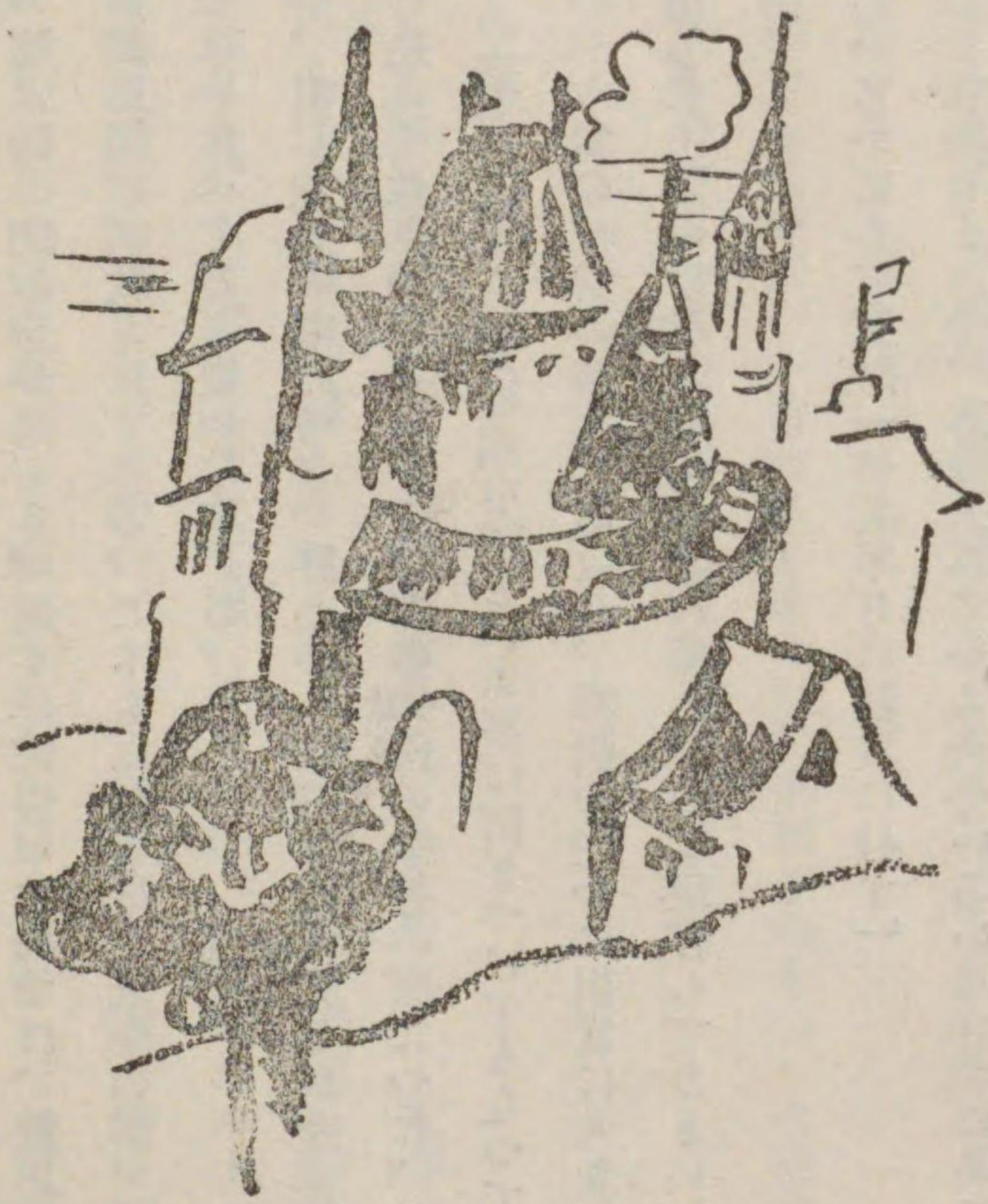
ところがひとつの不審は、學者町のこの邊では數のすけない第一流の建物の居住者でありながら、暮し向きも先づ先づそれ位の體面を張つてゐながら、一人も雇人がゐない。半日一日の時間女さへも雇はないので、毎日出來あいの物を買つては食べ、たまに電氣塵吸ひで掃除をすませてはゐるのが、寄宿人の東洋の小さな娘——西洋だと私がさう小さく可愛ゆく見えるのですよ——にも、近頃崇拜者からシツクな贈り物によこした高價な白猫にも、合點のいかない事で、猫奴は一度長椅子の下へもぐつたら忽ち眞黒に汚れてしまつたので、不審さうに主人を見上げてみやをと啼く。

すると或日突然美人は

「ビレネエの麓にうちのお城があるからこの夏はお母様と三人そこで暮さう。」

「スペインの城」といふ言葉は、俗にありもしない物の法螺を吹くことなのですよ、美人のお城も西班牙界のビレネエちや少々怪しいと思つたところ、兎にも角にも今私は事實に、ピレネエ大山脈の見える高原の眞中にそびえ立つ六層造りのお城の中で、しかも一番大きな居部屋の中央に小間使がわざ／＼三階から取り出してきた冷めたい上等の敷布をのべて、私が四人位一度に寝られさうな大寢臺の上に、王女様のようにとばかりを垂れて午睡させられてゐる场景です。

鎧戸からすかして見える強い光りの前裁にはレモンの一
杯なつてゐる木や草花が澤山
咲いてゐる間を、孔雀が四五



匹遊んでゐて犬が寝そべつてゐる。植木師の鋏の音が聞える。遠くの眞青な牧場では、競馬用のアングロアラブの美事な若駒達が調馬師に調教されてゐる。こちらには大きな乳牛の群、羊は赫土の丘のようにむれかたまつて草を食べてゐる豊かながめ。

本當にお城は立派なお城だつたが、但し他人の家だつた。肝心のわれ等の行く先きは今日俄に差おさへとなつて、あはて、駈け込んで泣きついたのでこの昔の知邊しよべの金持の家だつた。この家の主人、田舎の辯護士さん。その盡力で漸く競賣延期申請といふ事に漕ぎつけてもらつて、さてこの莊園の主の車で送られたのが本當の彼女の持家、あはれ、誇張の度合は相當に大きかつた。お城は平家の小作の家を改造した土間の母屋と木造の離れ屋となつて現存してゐましたよ、しかしして其上片折戸には

「某夫人の申立により、しかしかしかじかにして家財一切某年月日競賣に付す」

とはつてある所から出入する、通る百姓もまれで、落ちぶれてから大分いろいろ評判のあるらしいこの家は往來する人も殆どないらしい。

けれども人事の方はそんな譯だが、自然の方は誠にさはやかで、フランスの大平野が漸く終曲になり、山勢が起らうとする高燥な青野原に、朝夕は靜かに牛と牛飼ひと犬とが加はる風景夏月の、南歐らしく天心にかかるのもうれしく、黒ばんへ蜂蜜をつけて食べ、深い深い井戸の水を美人と二人でやつと一杯づつくみ上げて、廢園の梅の實やゆがんだ林檎を摘んでは食卓へ並べるのも、美人とやれば楽しい詩がありますよ。

やがてくる競賣はあんまりいい氣持でもないが、一時的にもさうした平和そのものゝ生活を つゞけていた或朝、食堂へゆくと、ひよつくり一人の東洋の男が立つてゐた。

ばん屋へ一里、風呂へ二里の人づきあひもない三人きりの女の世界へ、一人男が——支那の人で昨日フランスへついたばかりの、昔のこの家の寄宿人といふ私へ紹介の言葉で、若い紳士が入つてきたのですから、自然陽氣になつてきて鶏の丸やきも爐にかゝれば、高價なポルトオ酒もはづむ、家中で近邊見物に出掛ける氣にもなるし、土間のランプの下でポルタブルでタンゴを踊つて、近所のお百姓の馬鹿ばやしをさまたげるといふ賑かきの幾日目かを數へてゐると

私あての一通の極秘必親展書が届いた。

「拜啓貴殿には責任を以つて絶対御迷惑相掛け間敷候間、しかじかの日本人一名貴女の居住せらるゝ所に滞在いたし居るべく、其實否電報を以て下記へ御通知下被度、尙此事某夫人及び某子爵夫人（美人母子）へは絶対に祕密に願上候々々」

どう處置をしていゝのやら、豫測がつき兼ねるこの突然の必親展書は、仕方がないからまづ年の甲とお婆アさんにさうつと聞いて見た。

○

すると暫くして美人と男が青くなつてやつて来て、膝をついての頼みには「實はわれくは―」といふ事になつた、迂濶に返事を出さなくてよかつたのです。美人は目下子爵と離婚の訴訟の最中なのだが、そこがフランス人同志の事、虚々實々の離婚戦には又更に祕事祕策があり此の男も無論登場の一役で、夫の方の云ひ分には、自分の方も大分悪い事だらけだが其方も相當非があるから合ひ討ちで、賠償金無しで分れようといふのださうだが、そんな事では此の母子は承知はしない。向ふもそんなら尻尾を捕まへようとなつて家庭へ出入する男には一人一人

探偵が付いた。折から飛び來んだ私及び其の訪問客達は時にとつての誠に有がたいカモフラージュ、門番も買収、女中は手紙を盗み出したので、それつきり雇へない、段々三角四角關係の助援者までがおのおの二手に別れて、今やこの返電おそろしい事を將來するといふ譯で、どうか助けてくれといふ次第。

で思案の結論が、電文まで作者が付いたのではないように私らしい拙い佛文を綴つて、

「日本人は見當らぬ」と打つたものです、支那人だと思つてゐたといふ譯、男は匆々夜にまぎれて物珍しがる田舎驛を脱出です。

さてその翌日の夕方、放し飼の牛の角におどかされて牛飼犬の助けで漸つと歸つて來ると、美人と母親がまことにいやな顔色をしてゐる。

『今し方見知らない男が入つてきてね、奥様方^{オヤム}いやな用事でございませと名刺を出されたら巴里から刑事がやつてきたのさ』

○

秋になつて競賣離婚の二口の公判には離婚の方へまごまごすると、私も證人に引張り出されさうになつたので、物好きもこの邊とたうとう美人の家から出てしまつた。

漫趣三つ

ロアレ川小趣

へさきをぶつけちや「御免なさい」
おしりをあてては「いや失敬」
ツウルなまりで可愛いのが
ジャツクは二十一、大男
デジュネのぶどう酒のみすぎて
六メートルの川の中
半メートルの水の底
やつと、浅瀬をおし放れ

やれ嬉しやと又ごつん
立上つてはひよろひよろひよろ
縞のチョツキの大ふんとう。

釣する男にやどなられる
ちいさん子供にやはやされる
別荘の窓にはたわやめや
いきな男が大わらひ
はぢをかきかき共に漕ぐ
連れになつたる身の切なさ
みどりのとんねるまた二十町
石の橋越し又くぐり
人氣の絶えたを幸ひに
ええめんどとうと水の中

舟を押しおし行く先は
うつくし水の流れ出す
お城の庭の大ふき井戸。

草の上

「おひるだよ」

ばんは？

きつておくれ

サアジンがあつたつけ

ソシソンをおとりなさい

赤だいこんはどう？

鹽がないもの。

キヤンテイはしぶいねえ

もうこれつきり？

炙ロツテイ鶏があつたあつた

ええ骨ごとしやぶつちまへ

「ギユギユスや、こいこい」
わん！

雀にもばんをおやりよ。

そこでデゼールはすてきたよ

スキスのシヨコラ

ムステにめろん

それからコワントロウ

コーヒーは？

かはりにペーゼだ。